宮城県文化財調査報告書第 155 集

下 南 山 遺 跡

平 成 5 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序　　文

宮城県には、数十万年を遡る時代から各時代にわたって数多くの埋蔵文化財が存在することが知られており、これらは豊かな自然と長い伝統の中で培われ、育まれてきた貴重な遺産であります。このような、かけがえのない先人の文化遺産を保存し活用するとともに、将来に伝えていくことは現代に生きる私たちの大きな責務と考えられます。

したがって、近年各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、保護・保存するにとどまらずそれを特色ある地域づくりの拠点として整備し活用していこうとするところが多くなっていることは、まことに有意義なことと存じます。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を、具体的な物質的資料に即して解明することができる貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々とって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものでもあります。

しかし、埋蔵文化財は土地と深く結び付いてこれまで保存されてきたという特質をもっており、そのため各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委貴会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき、平成４年度に当教育委員会が実施した発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘調査にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成５年３月

宮城県教育委員会教育長　大立目　謙　直

例　　言

1　本書は、福島県が計画した松ヶ房ダム建設に伴う宮城県丸森町下南山遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。
2　調査は、宮城県教育委員会が主体となり、文化財保護課が担当した。また、調査には丸森町教育委員会の協力を得た。
3　本書における土色の記述には、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を利用した。
4　本書の第 1 図は、建設省国土地理院発行の 1/50.000「相馬中村」を複製して使用した。
5　下南山遺跡に関する諸記録および出土遺物は、宮城県教育委員会が保管しており、求めに応じて公開している。
6　本書の執筆は、調査担当職員の協議、検討を経て、石器の実測、事実記載および考察は須田良平が行ない、その他は天野順陽が行なった。また、編集は天野が行なった。

調　査　要　項

遺跡名　：下南山遺跡（しもみなみやまいせき）
遺跡記号：ＯＤ（宮城県遺跡地名表登載番号：10152）
所在地　：宮城県伊具郡丸森町筆甫字下南山
調査原因：松ヶ房ダム建設
調査面積：Ａ区　3100 ㎡＋Ｂ区　2740 ㎡＝5840 ㎡
調査期間：確認調査　平成 2 年（1990 年）9 月 27・28 日
　　事前調査　平成 4 年（1992 年）6 月 10 日～8 月 6 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課　　真山　悟、須田良平、岩見和泰　（確認調査）
　　古川一明、天野順陽（まさはる）、佐藤憲幸　（事前調査）
調査協力：丸森町教育委員会生涯学習課　伊藤博道
　　伊藤砕石工業、庄建技術株式会社
　　大橋ミイコ、大槻光子、佐々木孝弘、佐藤アキヨ、佐藤くに子、
　　佐藤トシ子、佐藤淑子、曽我ユキ子、高橋ハルイ、八巻マサ子、
　　引地豊、平栗マスイ
　　（敬称略・五十音順）

目　　次

第一章　はじめに 1
　1. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境 1
　2. 調査に至るまでの経過 1
　3. 調査の方法 4
第二章　発見された遺構と遺物 7
　1. 土壙 7
　2. 焼け面 8
　3. Ａ区遺物包含層 17
　4. Ｂ区遺物包含層 19
第三章　考察 40
　1. 出土遺物について 40
　2. 遺構について 47
第四章　まとめ 49
　　引用・参考文献 50
　　写真図版 53

下南山遺跡（しもみなみやまいせき）

第一章　はじめに

1．遺跡の位置と地理的・歴史的環境

下南山遺跡は、宮城県伊具郡丸森町筆甫字下南山に所在する。丸森町役場から南へ約 15ｋm離れており、福島県相馬市との境界付近に当たる（第１図）。

遺跡は、標高 500～650mの阿武隈山地から北東に派生する傾斜が緩やかな丘陵上に位置する。この丘陵を取り囲むように、福島県霊山に源を発する宇田川が太平洋に向けて東流する。標高は 390m前後で、現状は山林・荒れ地・建築資材置場などになっている（第 2 図）。

歴史的環境について見てみると、丸森町には現在 119 箇所の遺跡が登録されている（宮城県教育委員会：1993）。丸森町中心部付近は、縄文時代～古墳時代、古代の遺跡が多く見られ、このうち縄文時代の岩ノ入遺跡や入大遺跡、古墳時代の台町古墳群や矢ノ目遺跡、古代の中平遺跡などで発掘調査が行なわれ、内容の一端が明らかになっている。

しかし、町の中心部から離れるに従い、古墳時代～古代の遺跡は減少し、本遺跡周辺では、東山Ａ・Ｂ遺跡や、札立場遺跡、鳥ノ子遺跡など縄文時代の遺跡が登録されているに過ぎず、不明な点が多い地域となっている。

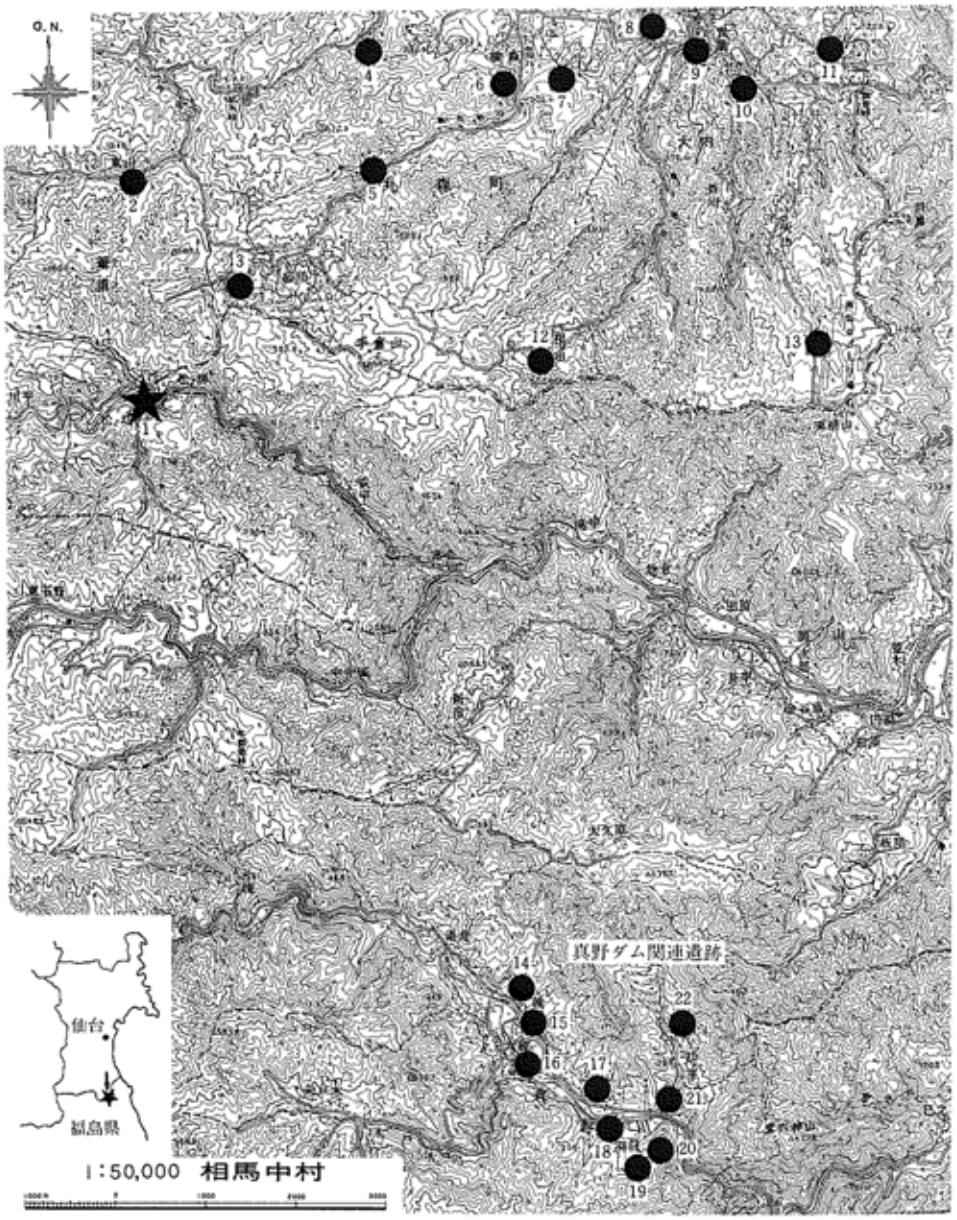
また、隣接する福島県北部の飯舘村大倉地区では、真野ダム建設（昭和 63 年完成）に伴って、昭和 53 年から関連遺跡の発掘調査が行なわれ、松ヶ平Ａ・Ｂ遺跡、羽白Ａ～Ｄ遺跡など縄文時代早・前期の遺跡の内容が明らかになり、本遺跡をはじめ、同時期の宮城県内の遺跡との関連が注目される。

2．調査に至るまでの経過

福島県北部浜通り地方の新地町と相馬市は、海岸線付近まで阿武隈山地が張り出し、平野の面積が狭く、河川が急勾配という地理的条件のため、河川がすぐに太平洋に流れ込んでしまい、慢性的な農業用水不足に悩んでいた。特に、田植えの時期は深刻で、農業用水の確保が早急な課題となっていた。

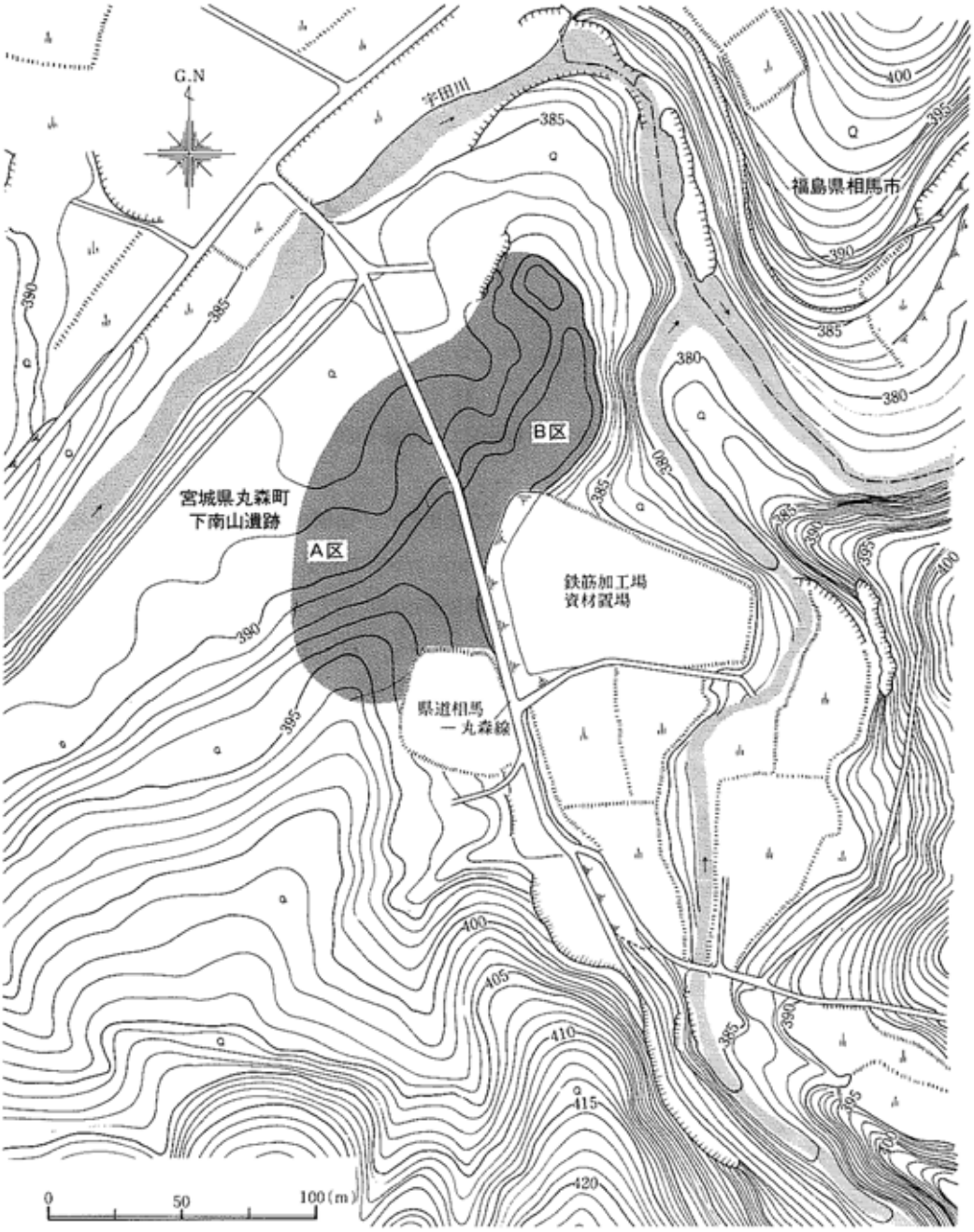
そこで、福島県は農業用ダムを建設する計画を打ち出し、地形、地質的条件等に合致した丸森町筆甫字下南山と相馬市山上字松ヶ房にまたがる地域をダム建設地として選定した。

この計画を受けて、宮城県教育委員会は昭和 56 年に予定地内の分布調査を行ない、下南



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	下南山遺跡	縄文時代早期～中期・弥生時代・平安時代	12	相ノ山遺跡	縄文時代
2	東山A遺跡	縄文時代	13	天明山遺跡	縄文時代・古墳時代
3	東山B遺跡	縄文時代前期	14	柏久保遺跡	縄文時代前期
4	鳥ノ子遺跡	縄文時代中期	15	宮内A遺跡	縄文早期・前期・後期・晩期
5	孔立場遺跡	縄文時代前期・平安時代	16	上の台C遺跡	縄文時代前期
6	黒佐野遺跡	縄文時代晩期	17	岩下B遺跡	縄文早期・前期・後期・晩期
7	横森遺跡	縄文時代後期	18	羽白C・D遺跡	縄文時代早期～晩期
8	上ノ原遺跡	縄文晩期・弥生・古墳前期	19	羽白A・B遺跡	縄文時代早期
9	馬場遺跡	縄文時代	20	岩下向A・B遺跡	縄文早期・前期・後期
10	貴宝山遺跡	縄文時代中期	21	松ヶ平A遺跡	縄文早期・前期・平安時代
11	鹿巻遺跡	縄文時代早期・中期	22	松ヶ平B遺跡	縄文早期・前期

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　下南山遺跡周辺の地形

山地区で数点の縄文土器を表面採取し、約 10.000 ㎡にわたり遺跡が広がっていることが明らかとなった。

平成 2 年 9 月 27 日～28 日には、遺跡の範囲の再確認および遺構の分布状況を把握することを目的とした確認調査を行なった。確認調査では、遺跡の中央を南北に走る県道を境として、西側をＡ区、東側をＢ区とし、重機を用いたトレンチ調査を行なった。その結果、Ａ区では焼け面 2 か所が検出され、付近からは縄文時代早期末～前期初頭の土器が出土した。また、Ｂ区では遺構は検出されなかったが、縄文土器が集中する場所が確認され、付近になんらかの遺構の存在が予想された。

3．調査の方法

上述の成果に基づき、遺跡の記録保存を目的とした事前調査を、平成 4 年 6 月 10 日～8 月 6 日にかけて行なった。

調査は、まず、重機で表土を除去し、遺構を検出した。遺構の検出状況に応じて調査区を適時拡張し、最終的にＡ区 3100 ㎡＋Ｂ区 2740 ㎡の合計 5840 ㎡が調査対象面積となった。

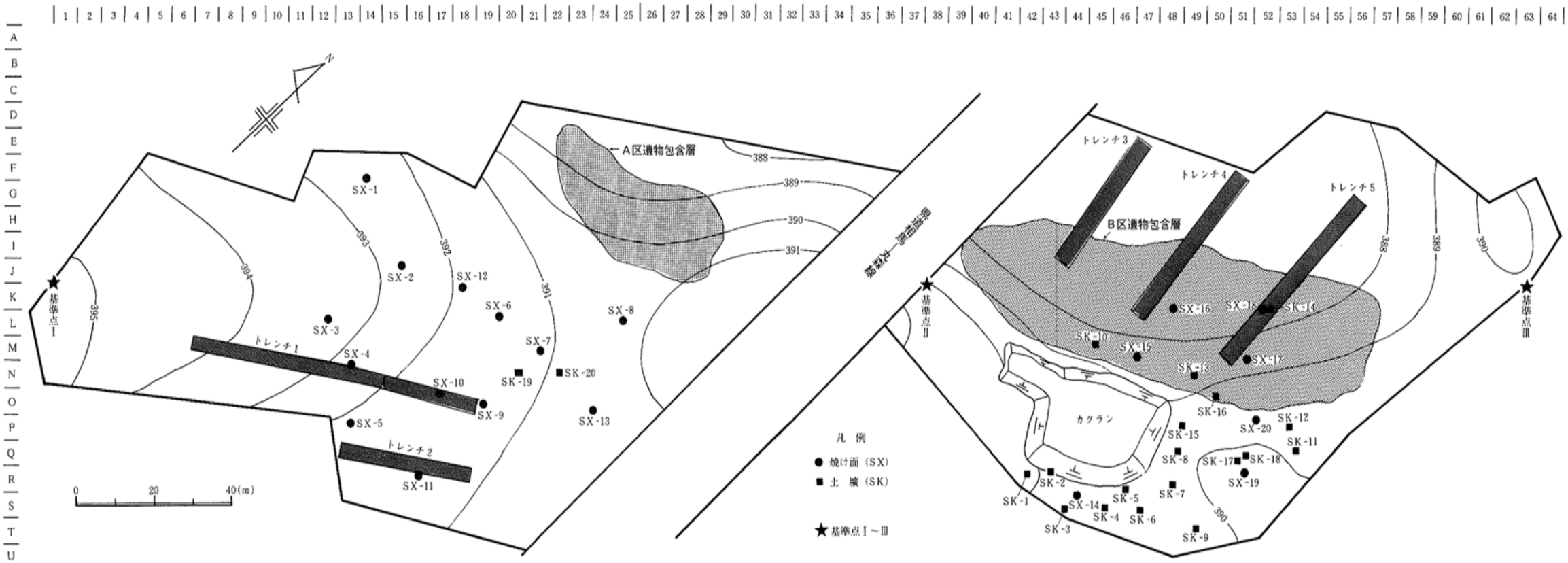
つぎに、調査区のほぼ中央を通るように任意に基準線を設定（Ｅ－20°－Ｎ）し、基準点Ｉを起点として第 3 図のように 3mグリッドを設定した。なお、基準点の国家座標はつぎの通りである。

基準点Ⅰ　Ｘ＝2688.9648　Ｙ＝4554.2794

基準点Ⅱ　Ｘ＝2797.0724　Ｙ＝4517.9205

基準点Ⅲ　Ｘ＝2869.5703　Ｙ＝4493.5262

精査した遺構については、平板測量（1/200）、簡易遣り方測量によって平面図（1/20）を、必要に応じて断面図（1/20、1/40）を作成した。また、35mm白黒写真、カラー・リバーサル写真、6×7 白黒写真、カラー写真による記録も行なった。



第3図　下南山遺跡遺構配置図

第二章　発見された遺構と遺物

今回の調査で、土壙 20 基、焼け面 20 か所、遺物包含層 2 か所が検出された。これらの遺構や堆積土などから縄文土器、弥生土器、土師器、石器が出土しており、量的には整理用平箱で 30 箱になる。以下、上記の順に記述する。

1．土壙（第４・５図、第１表）

土壙は、Ａ区で 2 基、Ｂ区で 18 基の 20 基検出された。確認面は、ほとんどが地山面であるが、第 10・13 号土壙はＢ区遺物包含層 2ａ層上面、第 16 号土壙はＢ区遺物包含層 1 層上面で確認された。分布状況を見てみると、Ａ区で検出された第 19・20 号土壙以外はＢ区の丘陵端部の尾根から北側緩斜面に集中している（第 3 図）。

平面形は、円形・楕円形のものと長楕円形のもの（第 19・20 号土壙）があり、前者が大部分を占める。平面形が円形・楕円形のものには、壁が急に立ち上がり比較的深いものと、壁が緩やかに立ち上がり比較的浅いものがある。規模を見てみると、前者には直径 1.3m 前後のもの（第 2～4、6、8、14、17 号土壙）と直径 2m前後のもの（第 15、16 号土壙）がある。後者には、直径 2m前後のもの（第 7、9 号土壙）、直径 1.3mのもの（第 1 号土壙）、直径 80ｃｍ前後のもの（第 5、10～13、18 号土壙）がある。

平面形が長楕円形のもの（第 19・20 号土壙）は、いずれも長径が 2m以上のもので、壁が急に立ち上がり、上部でやや開き比較的深い。第 20 号土壙の底部には直径 10ｃｍの杭穴が 8 個認められた。

これらの土壙で直接切り合っているものはないが、後述する焼け面と新旧関係が認められるものがある。第 3・4 号土壙は、第 14 号焼け面周辺に広がる炭化物層を切っており、これよりも新しい。第 14 号土壙は、土壙内自然堆積層 7 層上面に形成された第 18 号焼け面より古い。

すべての土壙は、人為的に埋められたものはなく、自然堆積によるものである。第 5～8 号土壙の堆積層には礫が混入している。

縄文土器や石器が約半数の土壙から出土している。土器はほとんどが細片で摩滅したものである（第 7・8 図）。この他、第 17 号土壙からは、玦状耳飾りが出土している。穿孔の後に擦り切りによって玦状部が作出されている。また孔部分の上部にも、擦り切り時の痕跡が認められる（第 11 図）。

2．焼け面（第６図、第２表）

焼け面は、直接地面で火を焚き、表面が火熱で赤色化したものや硬化したものである。これらのには人為的な堀込みは認められず、地形的にわずかに窪んだところや傾斜が緩いところに形成されている。

焼け面はＡ区で 13 か所、Ｂ区で 7 か所の計 20 か所が検出された。なお、第 1 号焼け面は残存状況が悪く、記録化できなかった。確認面は、地山面（第 1、8、9、14、15、19、20 号焼け面）、地形的に窪んでいるところに堆積した層上（第 3～7、10～13 号焼け面）、Ｂ区遺物包含層 2ａ層上面（第 16、17 号焼け面）、倒木痕上（第 2 号焼け面）、第 14 号土壙内自然堆積層 7 層上面（第 18 号焼け面）である。

分布状況をみてみると、Ａ区で検出された焼け面（第 1～13 号焼け面）は丘陵南側の緩斜面に環状に分布している。一方、丘陵端部のＢ区で検出された焼け面（第 14～20 号焼け面）は丘陵尾根上から北側の緩斜面に点在している。

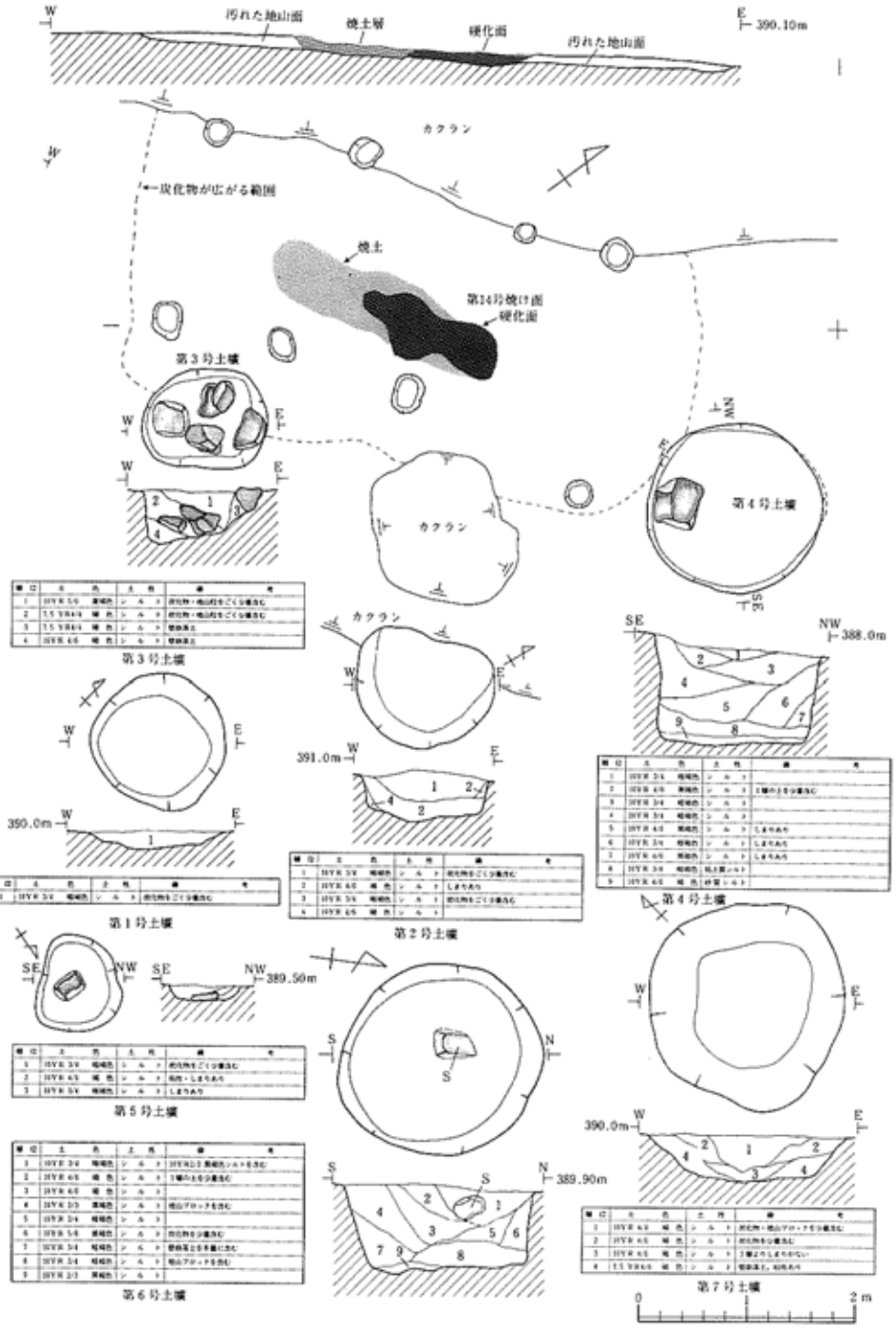
平面形は、焼け面形成時と異なっている可能性があるが、現状を見るかぎりは、不整形（第 2、3、5、6、11～13、15、16 号焼け面）、円形（第 4、8、9、19 号焼け面）、楕円形（第 10、17、18、20 号焼け面）のものがある。

規模は、長径が 50～80ｃｍ前後のものが多いが、第 12、13 号焼け面のように 110ｃｍのものや、第 10、14 号焼け面のように 200ｃｍ以上のものもある。

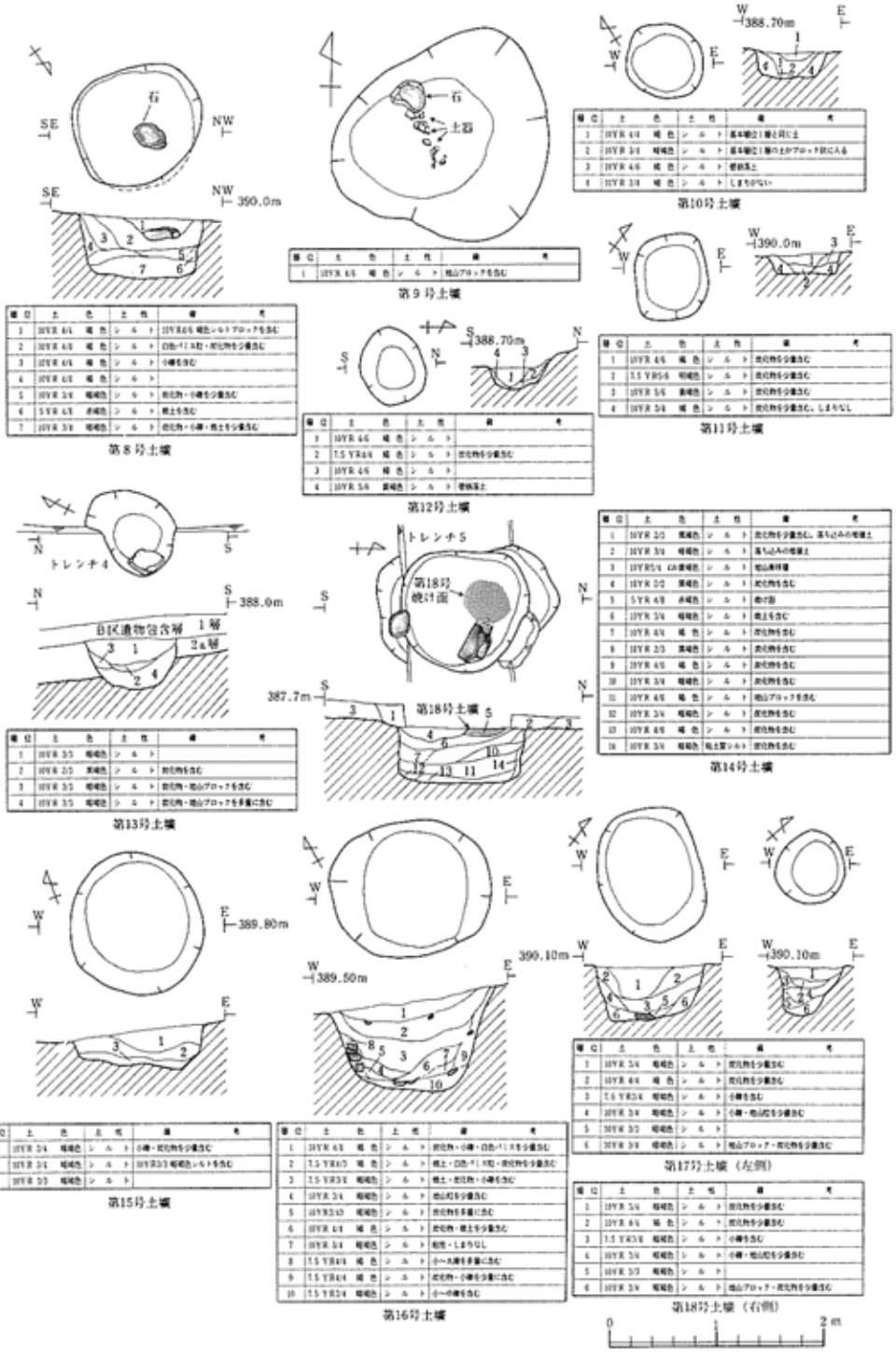
また、表面が硬化・赤色化し、周辺に焼土や炭化物が広がっているものと、硬化面が形成されず赤色化部分が残っている程度のものがある。前者は、第 9～11、14 号焼け面のみで、後者が大部分を占める。

また、第 14 号焼け面周辺には、焼け面を挟んで直径 15～20ｃｍの柱穴が南北に 4 個づつ並んでいるのが認められた。簡単な雨よけ屋根程度のものが建っていた可能性が考えられる。

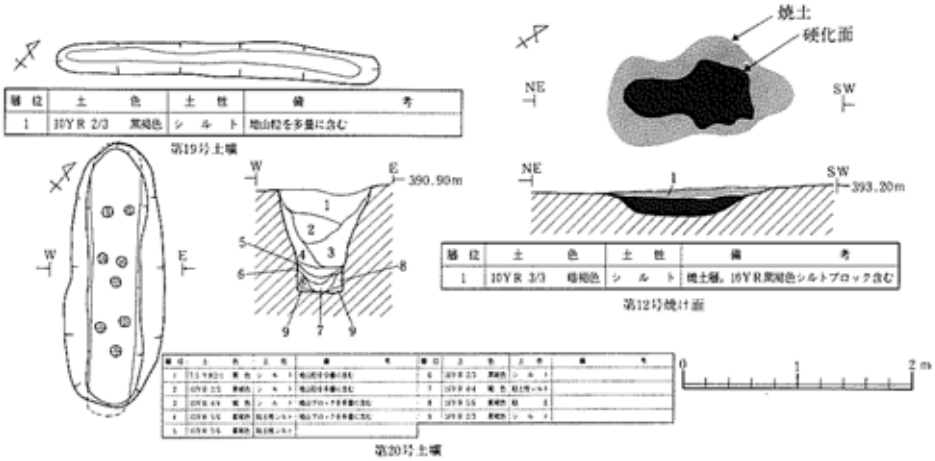
ほとんどの焼け面およびその周辺から縄文土器、石器が出土している。大半が細片や摩滅したものである（第 9・10 図）。



第４図　発見された遺構（１）
土壙（第１～７号土壙）



第５図　発見された遺構（2）
土壌（第８～18号土壌）



層位	土色	土性	備考
1	10YR 2/3 黒褐色	シルト	地山粒を多量に含む

第19号土壙

層位	土色	土性	備考
1	10YR 3/3 暗褐色	シルト	焼土層。10YR黒褐色シルトブロック含む

第12号焼け面

第20号土壙

第6図　発見された遺構（3）
土壙（第19・20号土壙）・第12号焼け面

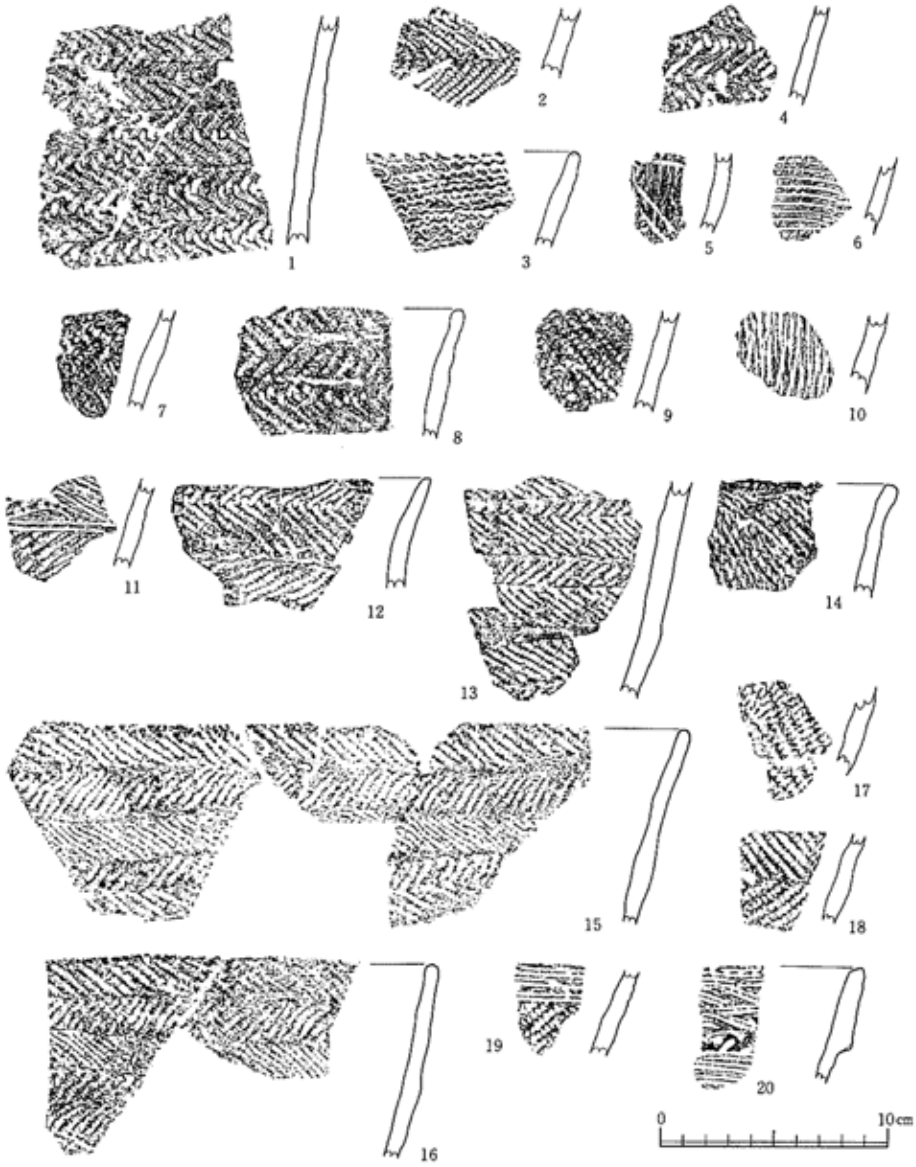
遺構名	位置（区／グリッド）	確認面	規模（長径×短径×深さcm）	平面形	遺物（土器／石器）		備考
SK－1	B R－42	地山面	130×120 × 20	円形			
2	B R－43	地山面	130×130 × 50	円形	9	2	石刃、スクレイパー
3	B S－43・44	地山面	116× 90 × 52	楕円形	2		
4	B S－45	地山面	160×160 × 90	円形	18		
5	B R－46	地山面	90× 75 × 14	楕円形	60		底面に20cmの穴
6	B R－46・47	地山面	200×180 × 84	楕円形	39	1	堆積土に80cmの穴、石刃
7	B R－48	地山面	200×180 × 44	円形	14		堆積土に10cmの穴
8	B Q－48・49	地山面	120×106 × 56	楕円形	26		堆積土に30cmの穴
9	B T－49・50	地山面	210× 80 × 20	不整形	81	1	石器
10	B M－45	B②2a層上面	74× 68 × 20	楕円形			
11	B Q－53	地山面	76× 68 × 20	円形		1	
12	B P－53	地山面	80× 68 × 24	楕円形			
13	B N－49	B②2a層上面	76× 68 × 20	円形			
14	B K・L－51・52	地山系移層	176×116 ×100	楕円形	29		SX－18より古い
15	B P－49・50	地山面	180×130 × 42	円形	57	1	石器
16	B O－51	B②1層上面	156×126 × 90	楕円形	95		
17	B Q・R－50・51	地山面	126×100 × 52	楕円形		1	10区IIIから移り出土
18	B Q－51	地山面	70× 64 × 46	円形			
19	A N－20・21	地山面	284× 39 × 52	長楕円形			Tピット
20	A N－22	地山面	234× 82 × 92	長楕円形			Tピット、底部に直径10cmの杭穴8個あり

第1表　土壙（SK）一覧表

遺構名	位置（区／グリッド）	確認面	規模（長径×短径cm）	平面形	硬化	赤色化	遺物（土器／石器）		備考
SX－1	A F－14	地山面	?	?	?	?			残存状況が非常に悪く、記録化できず
2	A N－22	倒木痕上	54 × 42	不整形	×	○	17		
3	A L－12	深み堆積土上	54 × 42	不整形	×	○	196		
4	A M－13	深み堆積土上	90 × 90	円形	×	○	5		
5	A P－13	深み堆積土上	70 × 70	不整形	×	○	50		
6	A K－21・22	深み堆積土上	84 × ?	不整形	×	○	68	1	へら状石器
7	A M－21	深み堆積土上	65 × 46	不整形	×	○	7		
8	A O－19	地山面	40 × ?	円形	×	○			
9	A L－25	地山面	30 × ?	円形	○	○	55	1	スクレイパー
10	A O－17	深み堆積土上	200 ×140	楕円形	○	○	34		
11	A R－16	深み堆積土上	76 × 42	不整形	○	○	16		
12	A J・K－18	深み堆積土上	110 × 30	不整形	×	○	2		
13	A P－23・24	深み堆積土上	110 × 30	不整形	×	○			
14	B R・S－44	地山面	230 × 50	楕円形	○	○	30	1	スクレイパー
15	B M－47・48	地山面	60 × 22	不整形	×	○	27	1	石器
16	B K－48	B②2a層上面	80 × 38	不整形	×	○			
17	B M－51	B②2a層上面	46 × 34	楕円形	×	○	1		
18	B K・L－51	SK-14 T層	50 × 40	楕円形	×	○	17	1	SK－14のT層上面に形成された。石器
19	B R－51	地山面	56 × 50	円形	×	○			
20	B O－52	地山面	44 × 36	楕円形	×	○			倒木痕下の地山面上

※1　地形的にわずかに窪んだところに堆積した層

第2表　焼け面（SX）一覧表



図番号	出土遺構	地区	粉土	備考	写真図版	図番号	出土遺構	地区	粉土	備考	写真図版
第7図1	第2号土壙	B区	繊維を含む	結束羽状縄文	7－1	第7図11		B区	繊維を含む	半截竹管による同心円状押引文	7－11
2			繊維を含む	結束羽状縄文	7－2	12	第8号土壙	B区	繊維を含む	結束羽状縄文　小波状口縁	7－12
3			繊維を含む	半截竹管による波状沈線文	7－3	13			繊維を含む	結束羽状縄文	7－13
4	第4号土壙	B区	繊維を含む	結束羽状縄文	7－4	14			繊維を含む	斜行撚糸文（L）	7－14
5			繊維を含む	縦走撚糸文（L）	7－5	15	第9号土壙	B区	繊維を含む	結束羽状縄文	7－15
6			繊維を含む	半截竹管による平行沈線文	7－6	16			繊維を含む	結束羽状縄文	7－16
7	第6号土壙	B区	繊維を含む	結束羽状縄文	7－7	17	第10号土壙	B区	繊維を含む	縦走縄文（RL）	7－17
8			繊維を含む	結束羽状縄文	7－8	18			繊維を含む	結束羽状縄文	7－18
9	第7号土壙	B区	繊維を含む	斜行縄文（RL）	7－9	19			繊維を含む	半截竹管による格子状沈線文	7－19
10			繊維を含む	縦走撚糸文（L）	7－10	20			繊維を含む	半截竹管による格子状沈線文　隆部に刻目	7－20

第７図　遺構出土土器（1）

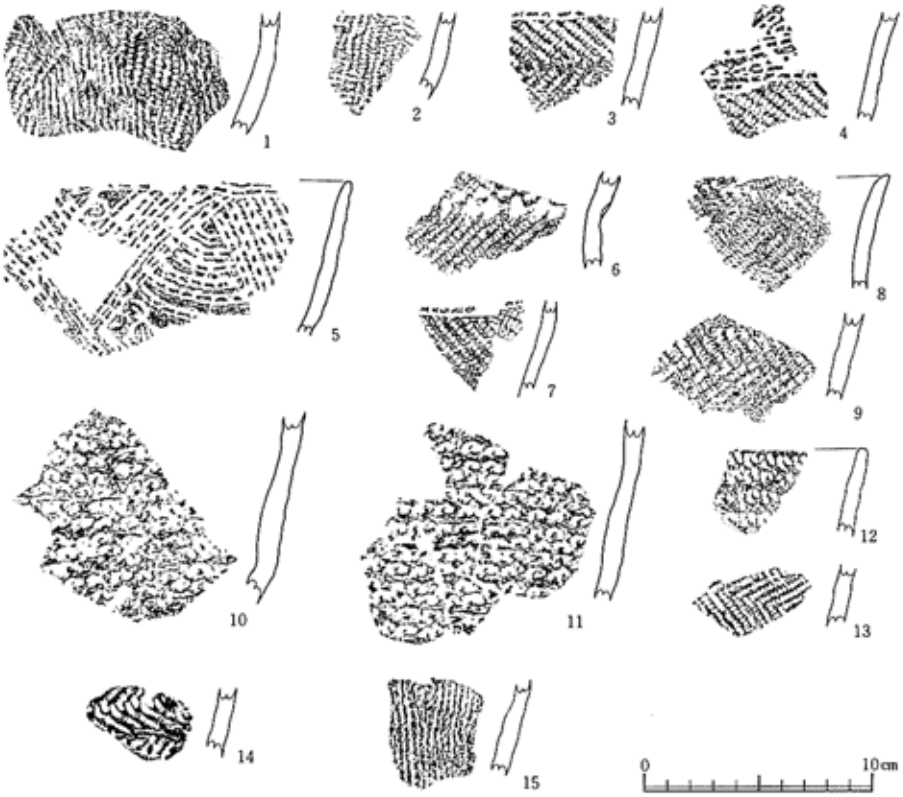
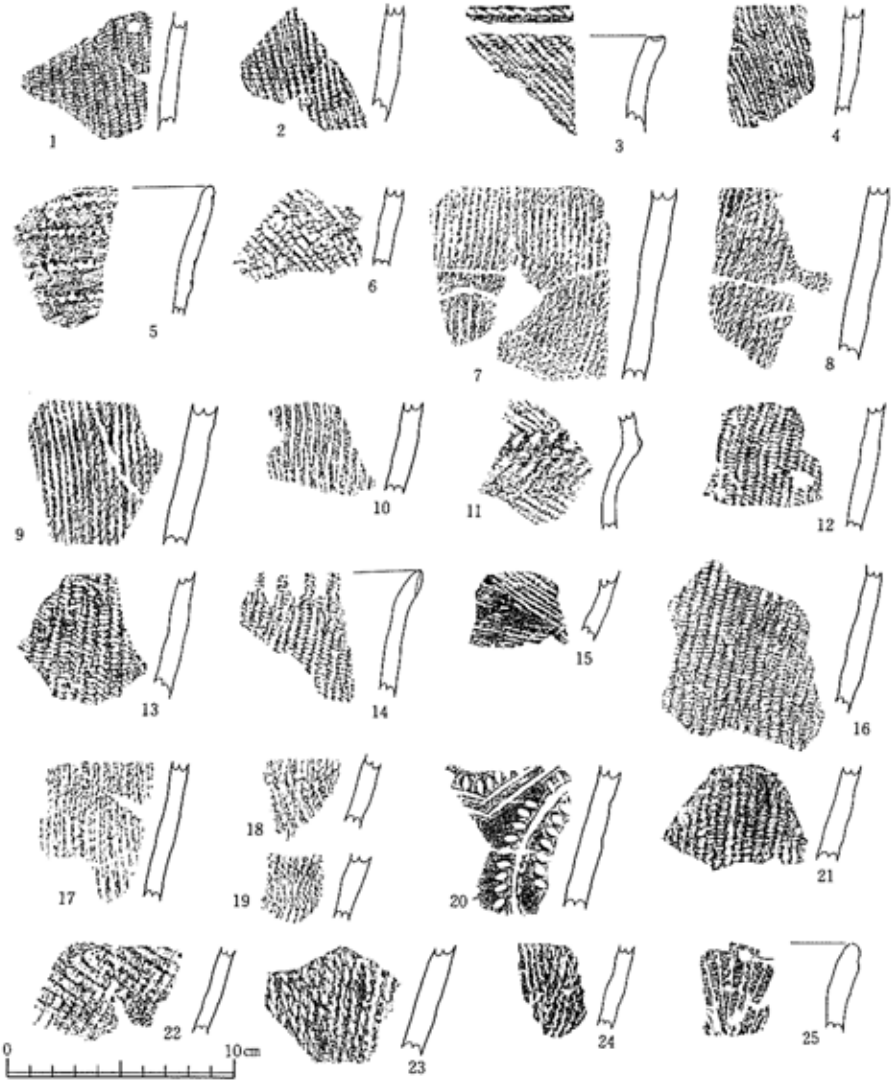


図　番号	出土遺構	地　区	胎　土	備　　考	写真図版
第8図1	第15号土壙	B　区	繊維を含む	縦走縄文（RL）	7－21
2			繊維を含む	縦走縄文（RL）	7－22
3			繊維を含む	非結束羽状縄文　口縁部に刻目	7－23
4			繊維を含む	半截竹管による同心円状押引文	7－24
5			繊維を含む	半截竹管による同心円状押引文	7－25
6	第16号土壙	B　区	繊維を含む	斜行縄文（LR）　頸部に刻目	7－26
7			繊維を含む	斜行縄文（LR）　頸部に刻目	7－27
8			繊維を含む	結束羽状縄文	7－28
9			繊維を含む	結束羽状縄文	7－29
10			繊維を含む	末端ループ文（RL）	7－30
11			繊維を含む	末端ループ文（RL）	7－31
12			繊維を含む	末端ループ文（RL）	7－32
13	第17号土壙	B　区	繊維を含む	結束羽状縄文	7－33
14			繊維を含む	結束羽状縄文	7－34
15			繊維を含む	縦走撚糸文（L）	7－35

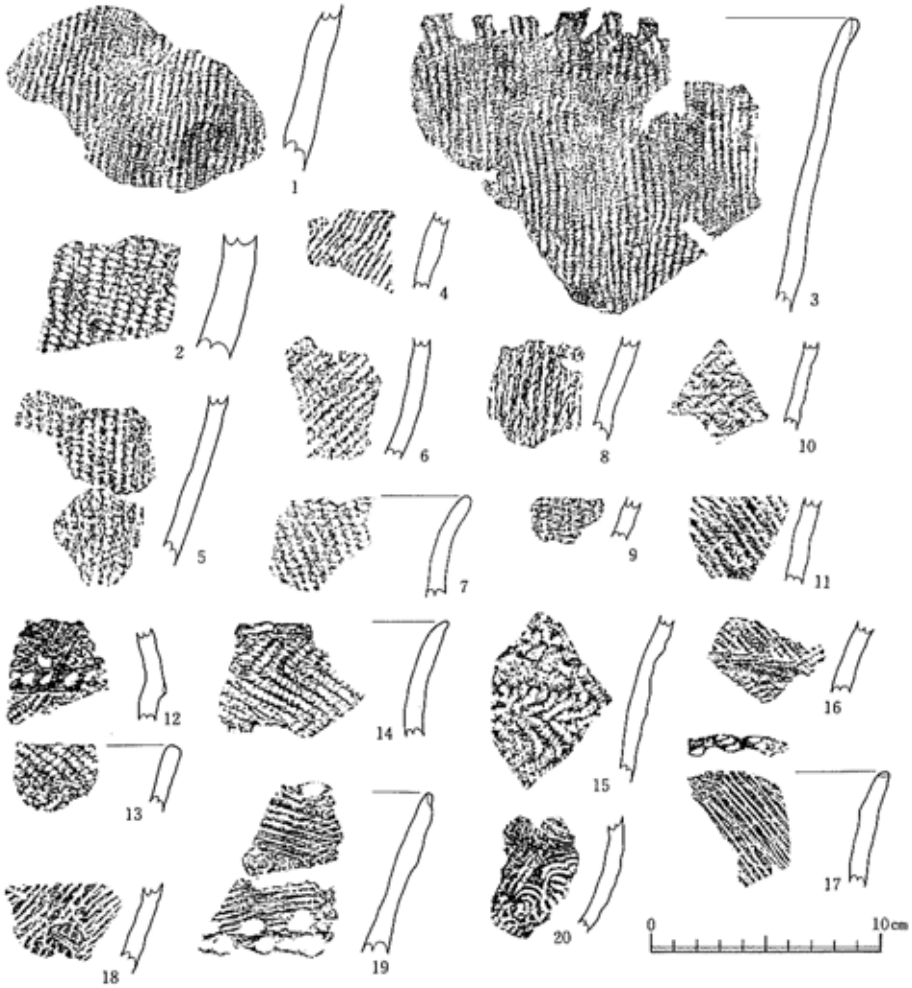
第8図　遺構出土土器 (2)



図番号	出土遺構	地区	胎土	備考	写真図版
第9図1	第2号焼け面	A区	繊維を含む	縦走縄文（R L）　補修穴あり	8－1
2			繊維を含む	斜行縄文（R L）	8－2
3			繊維を含む	斜行縄文（R L）　口唇部に縄文押圧文	8－3
4			繊維を含む	縦走撚糸文（R）	8－4
5	第3号焼け面	A区	繊維を含む	縄文原体押圧文（原体不明）	8－5
6			繊維を含む	結束羽状縄文	8－6
7			繊維を含む	縦走撚糸文（L）	8－7
8			繊維を含む	縦走撚糸文（L）	8－8
9			繊維を含む	縦走撚糸文（L）	8－9
10			繊維を含む	縦走撚糸文（L）	8－10
11			繊維を含む	結束羽状縄文	8－11
12	第4号焼け面	A区	繊維を含む	縦走縄文（L R）	8－12

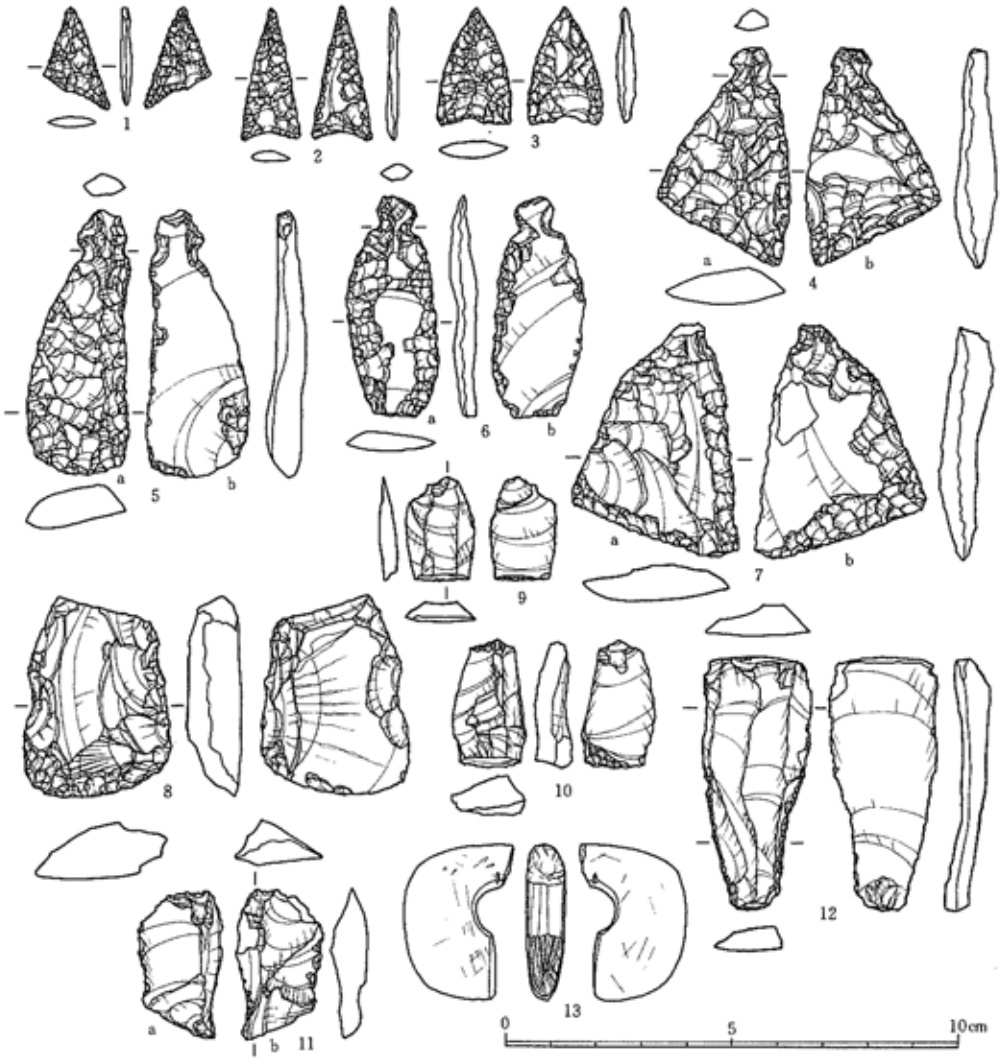
図番号	出土遺構	地区	胎土	備考	写真図版
第9図13		B区	繊維を含む	縦走縄文（L R）	8－13
14			繊維を含む	縦走縄文（L R）　口縁部に刻目	8－14
15			繊維を含む	斜行撚糸文（R）	8－15
16	第6号焼け面	A区	繊維を含む	縦走縄文（R L）	8－16
17			繊維を含む	縦走撚糸文（L）	8－17
18			繊維を含む	縦走撚糸文（L）	8－18
19			繊維を含む	縦走撚糸文（R）	8－19
20			繊維を含む	沈線文＋刻目	8－20
21	第9号焼け面	A区	繊維を含む	縦走縄文（R L）	8－21
22			繊維を含む	結束羽状縄文	8－22
23			繊維を含む	縦走撚糸文（R）	8－23
24			繊維を含む	縦・斜行撚糸文（R）	8－24
25			繊維含まず	平敷竹管による沈線文	8－25

第９図　遺構出土土器（3）



図番号	出土遺構	地区	粒土	備考	写真図版	図番号	出土遺構	地区	粒土	備考	写真図版
第10図1	第10号焼け面	A 区	繊維を含む	縦走縄文（RL）	8－26	11			繊維を含む	斜行撚糸文（R）	
2			繊維を含む	縦走縄文（RL）	8－27	12	第15号焼け面	A 区	繊維を含む	斜行縄文（LR）　頸部に刺目	8－36
3			繊維を含む	縦走縄文（RL）　口縁部に刺目	8－28	13			繊維を含む	斜行縄文（RL）	8－37
4			繊維を含む	斜行撚糸文（R）	8－29	14			繊維を含む	結束羽状縄文	8－38
5	第11号焼け面	A 区	繊維を含む	縦走縄文（RL）	8－30	15			繊維を含む	結束羽状縄文　頸部に刺目	8－39
6			繊維を含む	斜行縄文（LR）	8－31	16			繊維を含む	非結束羽状縄文	8－40
7			繊維を含む	斜行撚糸文（RL）　口縁部に刺目	8－32	17			繊維を含む	斜行撚糸文（L）　口唇部に縄文押圧文	8－41
8			繊維を含む	縦走撚糸文（L）	8－33	18			繊維を含む	斜行撚糸文（L）	8－42
9	第12号焼け面	A 区	繊維を含む	縦走縄文（RL）	8－34	19			繊維を含む	斜行撚糸文（R）　口縁部に刺目	8－43
10			繊維を含む	非結束羽状縄文	8－35	20			繊維を含む	撚糸押圧文（R）　手載竹管による沈線文	8－44

第10図　遺構出土土器（4）



番号	出土地区・層位	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	石材	備考
1	SX−15　1層	石鏃　Ⅰa類	2.3	1.4	0.2	珪質頁岩	縁辺部縁辺　新しい折れ
2	SK−06	〃　Ⅰb類	3.0	1.3	0.2	〃	
3	SK−09	〃　〃	2.6	1.7	0.4	〃	
4	SK−16	石鏃　Ⅱb類	4.9	3.0	0.9	〃	a面右側辺の二次加工が最も新しい。
5	SK−16	〃　Ⅰb類	5.9	2.2	0.9	〃	
6	SK−06	〃　Ⅰc類	4.9	2.1	0.6	〃	素材面（背腹面）のパティナ古く、二次加工・折面のパティナ新しい。
7	SX−18	〃　Ⅱb類	5.2	3.7	0.9	碧玉（赤）	元ハジケあり。
8	SX−06	楕円状石器	4.4	3.3	1.2	珪質頁岩	両面ポジティブ。　基部の折面最も新しい。
9	SK−06	両極剥離痕ある剥片	2.3	1.5	0.4	〃	
10	SK−02	〃　石器	2.8	1.6	0.8	〃	
11	SX−14	〃	3.3	1.9	0.8	〃	a面中央3面同時の可能性あり。
12	SX−60	不定形石器	(5.6)	2.4	0.7	〃	ナイフ形石器？　先端　後世の折損。
13	SK−17　1層	玦状耳飾り	3.5	(2.4)	0.8	ヒスイ	

第11図　遺構出土石器

3．A区遺物包含層

A区の北側緩斜面で遺物包含層を確認した。面積は東西 20m×南北 15m＝300 ㎡で層厚は 10～30ｃmである。土色は暗褐色（10ＹＲ2/3)、土性はシルトである。

A区遺物包含層からは　縄文時代前期初頭の土器と、少量の縄文時代中期初頭の土器が出土している。縄文時代中期初頭の土器は包含層の上部から出土していることから、混入したものと考えられる。A区遺物包含層は、縄文時代前期初頭頃に形成された層と考えてよいものと思われる。

A区遺物包含層出土遺物（第 12 図）

出土遺物は縄文土器 391 点、石器 2 点である。土器は小片のものが多く、接合資料も少なかったため、全体の器形が分かるものはない。観察の結果、土器は縄文時代前期初頭のものと縄文時代中期初頭のものがある。

縄文時代前期初頭のものは、胎土に植物繊維を含む深鉢型土器で、地文の種類には①縄文（第 12 図 1～8)、②撚糸文（9～12)、③末端ループ文（13）がある。①はさらに、縄文押圧文（1)、縦走縄文（2～5)、斜行縄文（6～7)、結束羽状縄文（8）がある。②には縦走撚糸文（9～11)、斜行撚糸文（12）がある。

縄文時代中期初頭のものは、胎土に繊維を含まない深鉢型土器で、刻目を有する細い粘土を三角形に貼付けたもの (14)、半載竹管による沈線文と沈線間に刻目状に短沈線を充塡したもの（15)、縦走結節回転文が施されるもの（16）がある。

石器は点数が少なく、いわゆる Tool 類は石匙と一側辺にスクレーパー状の刃部を作出した不定形石器がそれぞれ 1 点出土しているのみである（第 30 図 1、2)。

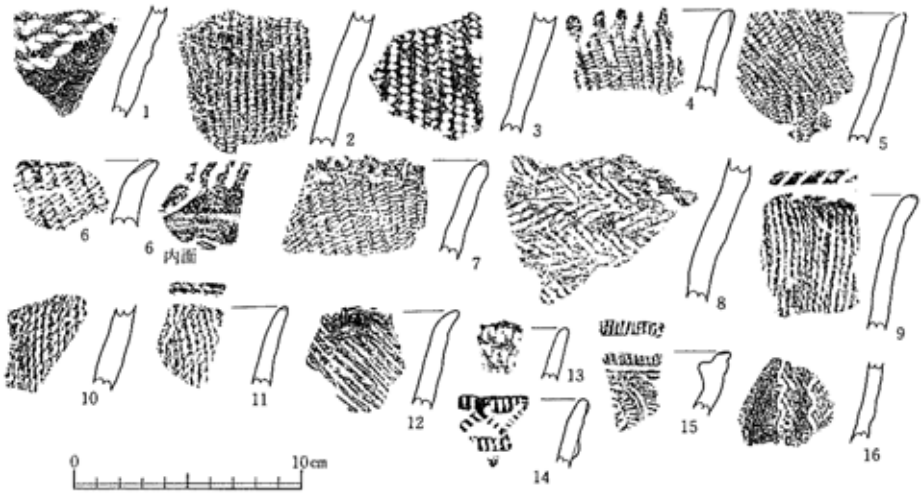


図　番号	出土位置（グリッド）	胎　土	備　　考	内　面	写真図版
第12図1	1－25	繊維を含む	縄文原体押圧文（LR）	粗いナデ	9－1
2	26ライン	繊維を含む	縦走縄文（RL）	粗いナデ	9－2
3	26ライン	繊維を含む	縦走縄文（LR）	ナ　デ	9－3
4	不　明	繊維を含む	縦走縄文（LR）　口縁部に刻目	ナ　デ	9－4
5	27ライン	繊維を含む	斜行縄文（RL）	ナ　デ	9－5
6	27ライン	繊維を含む	斜行縄文（RL）　内面に刻目	ナ　デ	9－6
7	26ライン	繊維を含む	斜行縄文（RL）　口縁部に刻目	ミガキ	9－7
8	不　明	繊維を含む	結束羽状縄文	ナ　デ	9－8
9	1－25	繊維を含む	縦走撚糸文（L）	ナ　デ	9－9
10	27ライン	繊維を含む	縦走撚糸文（L）	不　明	9－10
11	25ライン	繊維を含む	縦走撚糸文（L）　口唇部に撚糸押圧文	不　明	
12	25ライン	繊維を含む	斜行撚糸文	ミガキ	9－11
13	1－24	繊維を含む	末端ループ文（LR）	ミガキ	9－12
14	1－24	繊維含まず	半截竹管による沈線文＋刻目充填	ミガキ	9－13
15	1－24	繊維含まず	粘土貼り付け文＋刻目	ミガキ	9－14
16	1－24	繊維含まず	縦走結節回転文	不　明	9－15

第12図　A区遺物包含層出土土器

4．Ｂ区遺物包含層

Ｂ区の北側緩斜面で遺物包含層を確認した。面積は東西 50m×南北 20m＝1000 ㎡、層厚は 20～80ｃｍで基本的に 3 層、部分的に 4 層に大別できる（第 12、13 図）。後述する遺物の出土状況から、縄文時代前期初頭頃に形成されたと思われる。

Ｂ区遺物包含層出土土器

出土遺物は、縄文土器 12.914 点、弥生土器 30 点、土師器 2 点である。縄文土器は、早期中葉、早期末、前期初頭、前期中葉～中期初頭の土器があり、なかでも前期初頭の土器が大部分を占めている。

出土土器を層位ごとに見てみると、前期初頭の土器は各層から出土している。一方、早期中葉、早期末の土器は 2ａ、2ｂ層から、前期中葉～中期初頭の土器、弥生土器、土師器は 1 層から少量出土しているに過ぎない。また、3 層からは出土した土器は、ごく少量であり摩滅も激しく図示できるものはない。

また、主体を占める前期初頭の土器には、層ごとに違いなどは認められなかったため、一括して述べることとする。

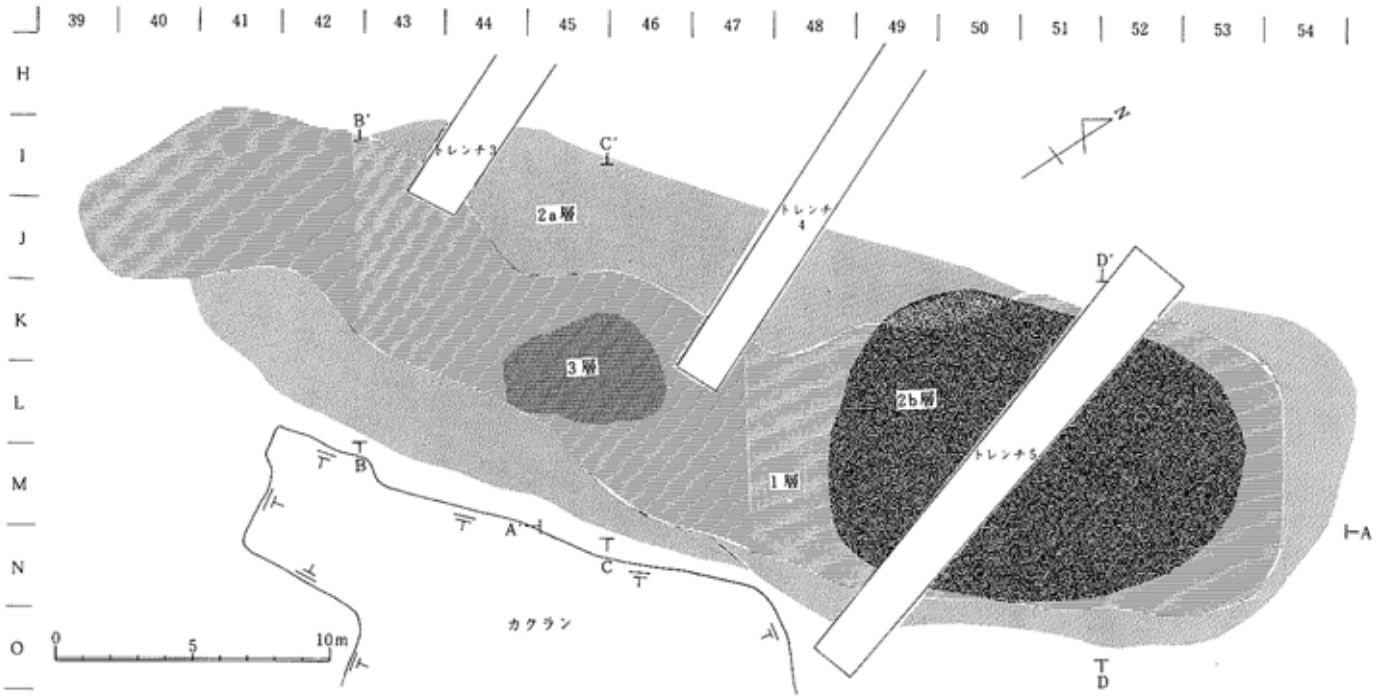
土器はすべて破片資料で、接合資料も少なかったため、全体の器形が分かるものはない。このため、胎土、施文文様などの観点から観察・分類を行ない、それぞれの所属時期ごとに説明する。

(1) 縄文時代早期中葉の土器（第 15 図 1～3）

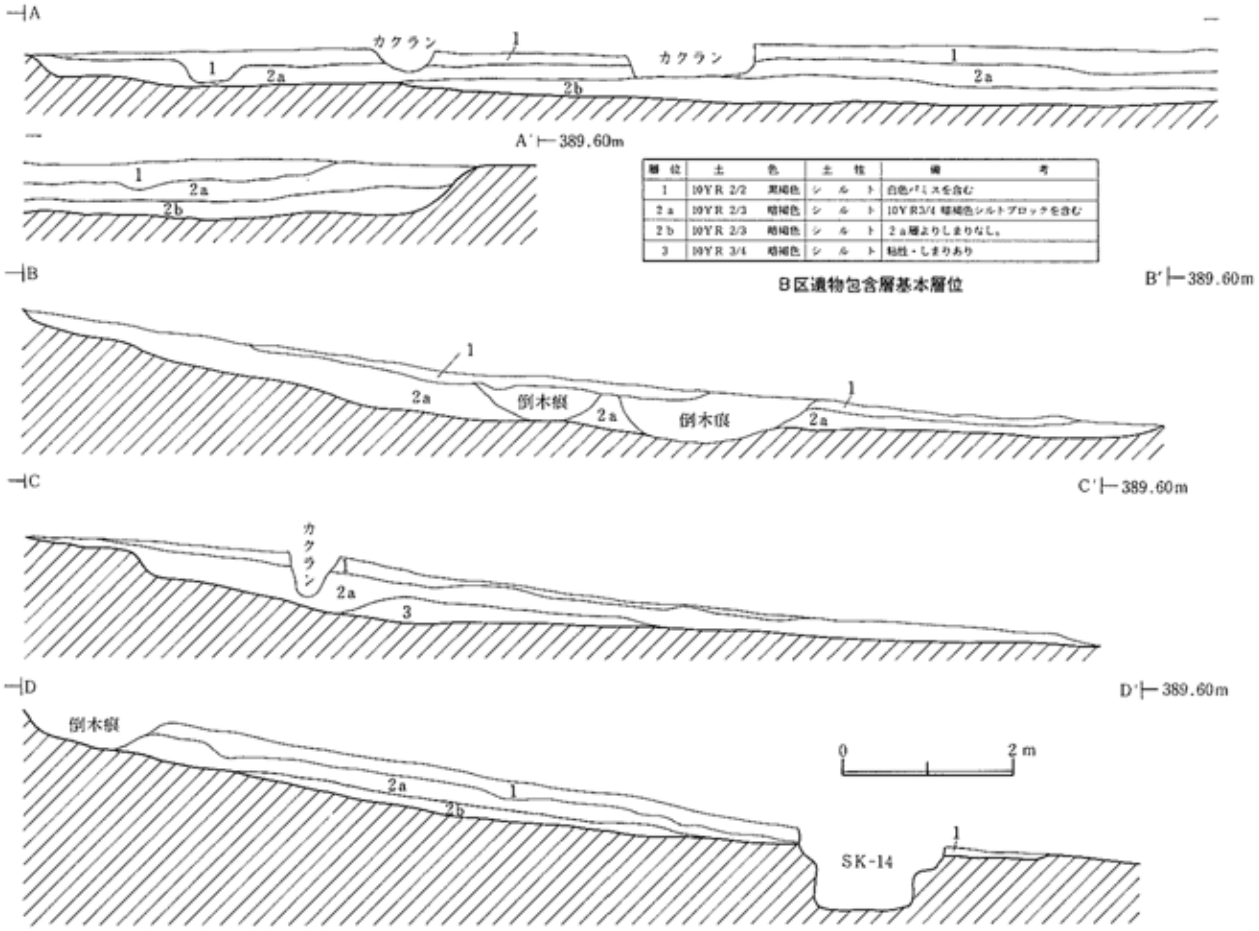
胎土に繊維を含まず、貝殻文が施されるものである。1 は貝殻腹縁文・沈線文・円形刺突文が施される。胎土は白っぽく、器壁は薄い。2 は内外面に条痕文、外面に貝殻腹縁文が施される。胎土は赤っぽく、器壁は薄い。3 は内外面に条痕文、外面に粘土が貼り付けられ、内面には貝殻刺突文が施される。胎土は赤っぽい。

(2) 縄文時代早期末葉の土器（第 16 図 1～5）

胎土に植物繊維を含み、土器の内外面に、または一方に条痕文が施されるもので、いわゆる縄文条痕文土器である。口縁部は 5 が小波状口縁で、ほかは平縁で、すべて外傾している。1 は外面に山形沈線文、口唇部～内面上部に縄文（ＬＲ）、その下部に条痕文が施される。2 は外面に縄文（ＬＲ）、口唇部～内面上部に縄文（ＬＲ）、その下部に条痕文が施される。3 は外面上部に縄文（ＬＲ）、その下部に条痕文・沈線文が、内面に条痕文が施される。4 は外面に縄文（ＬＲ）、内面に条痕文が施される。口唇部には刻目、指の押圧が加えられる。5 は外面にタガ状の隆帯をもつ口縁部に　撚糸押圧文が横位・刻目状に施され、その下部に条痕文、棒状工具による円形刺突文が施される。内面には、上部に縄文（ＬＲ）、その下部に条痕文が施される。



第13図　B区遺物包含層



層位	土色	土性	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	白色パミスを含む
2a	10YR 2/3 暗褐色	シルト	10YR3/4 暗褐色シルトブロックを含む
2b	10YR 2/3 暗褐色	シルト	2a層よりしまりなし。
3	10YR 3/4 暗褐色	シルト	粘性・しまりあり

B区遺物包含層基本層位

第14図　B区遺物包含層断面図

（3）縄文時代前期初頭の土器（第 16～26 図）

胎土に植物繊維含む深鉢型土器で、本包含層の主体を占めるものである。特徴的な口縁部資料（343 点）、底部資料（7 点）を観察した。

◎口縁部資料

口縁部に装飾的な文様をもつものと地文のみのものがある。

《口縁部に文様をもつもの》

口縁部の文様には、①撚糸押圧文（第 17 図）②竹管文（第 18～19 図）③竹管撚糸文（第 20 図 1～5）④棒状工具による沈線文・刺突文・押引文（第 20 図 6～14）がある。

①撚糸押圧文が施されるもの（第 17 図 1～14）

山形状（1～2）、木目状（3）、横位（4～13）、弧状（14）がある。口縁部は、波状口縁（1～2）と平縁（3～14）があり、指の押圧が加えられるもの（1）、刻目が入るものもある（3、6～11、14）。また、胴部との境界に刻目が入るものもある（3）。

②竹管文が施されるもの（第 18～19 図）

ａ．半截竹管による沈線文が施されるもの（第 18 図、第 19 図 1～11）　ｂ．半截竹管による同心円状押引文が施されるもの（第 19 図 12～14）　ｃ．円形竹管による刺突文が施されるもの（第 19 図 15～16）がある。さらに、ａは、ｉ．波状沈線文（第 18 図 1～11）ii．山形沈線文（12～14）　iii．格子状沈線文（15～23、第 19 図 1～7）　iv．刻目状沈線（8～10）　ｖ．櫛歯状沈線文（11）がある。

口縁部は、波状口縁のもの（第 19 図 1）と平縁のものがあり、刻目が入るものもある（第 18 図 11～12、第 19 図 1～6、9）。また、胴部との境界に刻目が入るものもある（第 18 図 1、18～21、第 19 図 1～3）。

③竹管撚糸文が施されるもの（第 20 図 1～5）

撚糸押圧文と竹管文を組み合わせて施文するものである。

1～5 とも渦巻き状撚糸押圧文・円形沈線文・短沈線文が施され、口縁部および胴部との境界に刻目が入る。

④棒状工具による沈線文・刺突文・押引文が施されるもの（第 20 図 6～13）

6 は平行沈線文、7～11 は刺突文または押引文、12～13 は沈線文＋刺突文である。

《地文のみ施されるもの》

地文には①縄文（第 21～23 図）　②撚糸文（第 24 図）　③末端ループ文（第 25 図 1～9）　④組紐回転文（第 25 図 10）がある。

①縄文が施されるもの（第 21～23 図）

縦走縄文（第 21 図 1～5）、斜行縄文（6～27）、結束羽状縄文（第 22 図 1～17、第 23 図

1〜8)、非結束羽状縄文（第 23 図 9〜13）がある。また、第 22 図 6〜8 は結束羽状縄文の結束部分を回転施文したものである。口縁部は平縁と波状口縁（第 23 図 4）があり、外傾するものと、内弯するもの（第 23 図 9〜10）がある。また、口縁部に刻目をもつもの、指の押圧が加わるもの（第 21 図 13)、口唇部に縄文原体を押圧したもの（第 21 図 26〜27）もある。

口縁部〜胴部にかけて器形がわかるものには、胴部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がりるもの（第 22 図 12)、胴部から頸部にかけて直立気味に立ち上がり、頸部から、外傾して立ち上がるもの（第 22 図 17)、胴部がやや膨らみながら直立気味に立ち上がり、頸部でややくびれ、外傾して立ち上がるもの（第 23 図 1〜2）がある。これらは口縁部と胴部との境界に刻目が入る。

②撚糸文が施されるもの（第 24 図）

縦走撚糸文（第 24 図 1〜9)、斜行撚糸文（10〜16)、網目状撚糸文（17〜19)、木目状撚糸文（20）がある。口縁部はすべて平縁で、外傾する。また、口縁部に刻目が入るもの（1〜7、13〜19)、口唇部に撚糸原体が押圧されるもの（8〜9）もある。

③末端ループ文が施されるもの（第 25 図 1〜9）

2ｃｍ間隔のもの（1〜2)、1ｃｍ間隔のもの（3〜9）がある。口縁部はすべて平縁で、外傾している。

④組紐回転文が施されるもの（第 25 図 10）

1 点出土した。口縁部は平縁で、外傾する。植物繊維は少量含まれる。

◎底部資料（第 26 図）

底部資料は 20 点出土しているが、摩滅した破片資料が多いため、文様、底部の器形のいずれかが分かるものを図示した（第 26 図 1〜7)。

底部は、平底のもの（1〜5）と揚底風平底のもの（6、7）がある。体部の立ち上がり方は、5 が直立気味に立ち上がるほかは、外傾している。体部の文様が分かるものは、2 が縄文（ＲＬ)、4〜7 が結束羽状縄文である。7 は底面にも結束羽状縄文が施文されている。

（4）縄文時代前期中葉〜中期初頭の土器（第 27 図）

胎土に繊維を含まないもので、前期中葉〜中期初頭のものを一括した。量的には少量である。特徴のある口縁部資料（一部胴部資料含む)、底部資料について観察した。

◎口縁部資料（第 27 図 1〜20）

1 は縄文施文後、縦走の山形状平行沈線文が施されるものである。2 は縄文施文後、山形状の粘土貼り付け文が施されるものである。3 は縄文施文後、横位の山形状沈線文が施

されるものである。4 は縄文施文後、横位の山形状沈線文が施されるものである。5～11 は円形、渦巻き状、横位平行沈線＋沈線間連続刺突文・短沈線文が施されるものである。12～16 は横位平行沈線＋沈線間連続刺突文・短沈線文＋三角形の彫去＋縦走結節回転文が施されるものである。17～20 は渦巻き状、三角形の粘土貼り付け文＋沈線文、短沈線文、刻目文が施されるものである。

◎底部（第 28 図）

底部資料は 20 点出土したが、摩滅した破片資料が多い（第 28 図 1～8）。すべて平底で、3、5 には木葉痕が、1、4、6 には網代圧痕が認められる。

（5）弥生土器（第 29 図 1～10）

弥生土器は 30 点出土している。1 は器壁は薄く、菱形状沈線文と磨消縄文が施されている。2～10 は器壁が薄く、鋭利な平行施文具による沈線文が施されている。

（6）土師器

同一個体と思われるロクロを使用した土師器の胴部資料が 2 点出土している。

図 番号	出土位置（グリッド）		胎 土	備 考	登録No.	写真図版
第15図 1	M－52	2 a 層	繊維含まず	（内面）貝殻腹縁文・沈線文・円形刺突文	15	9－16
2	M－49	2 a 層	繊維含まず	（外面）条痕文、粘土貼り付け文　（内面）条痕文、貝殻刺突文	372	9－17
3	M－47	2 a 層	繊維含まず	（外面）条痕文、貝殻腹縁文　（内面）条痕文	371	9－18

第15図　B区遺物包含層出土土器（1）

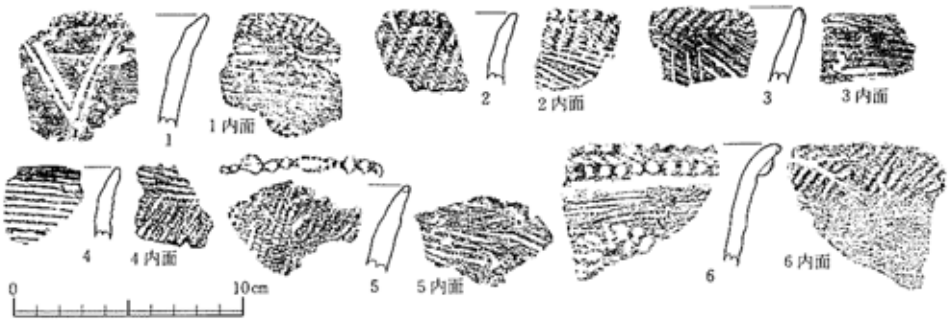
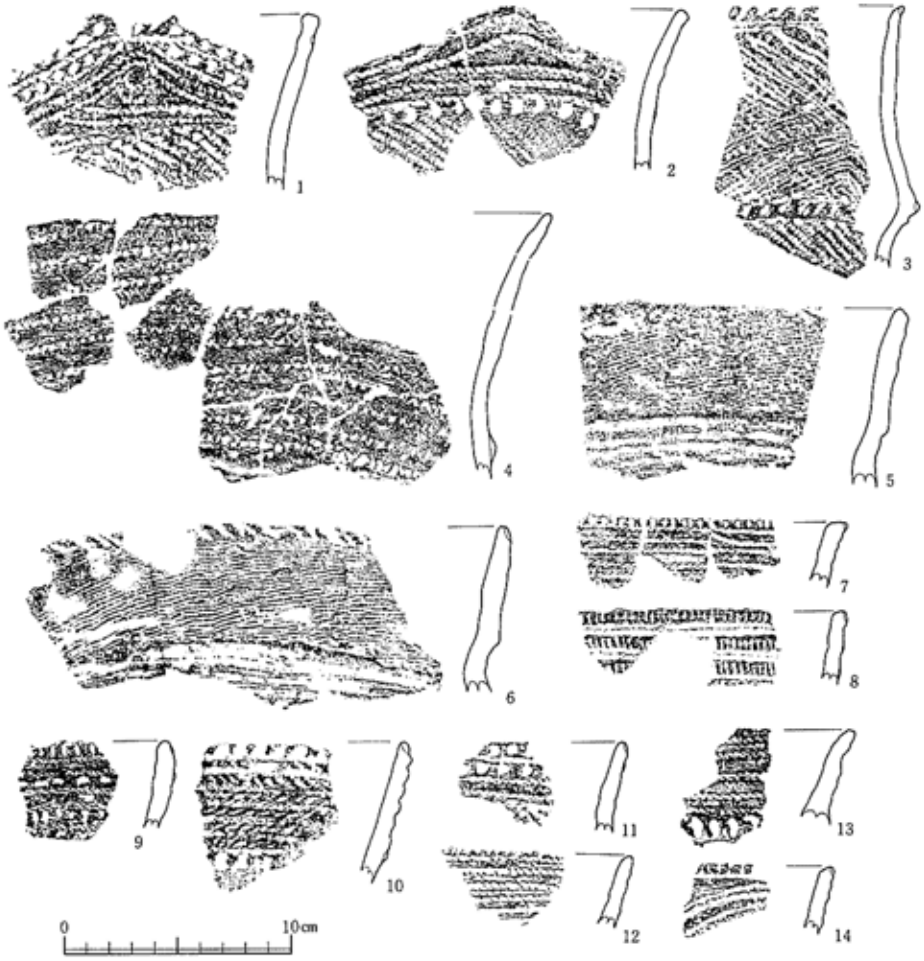


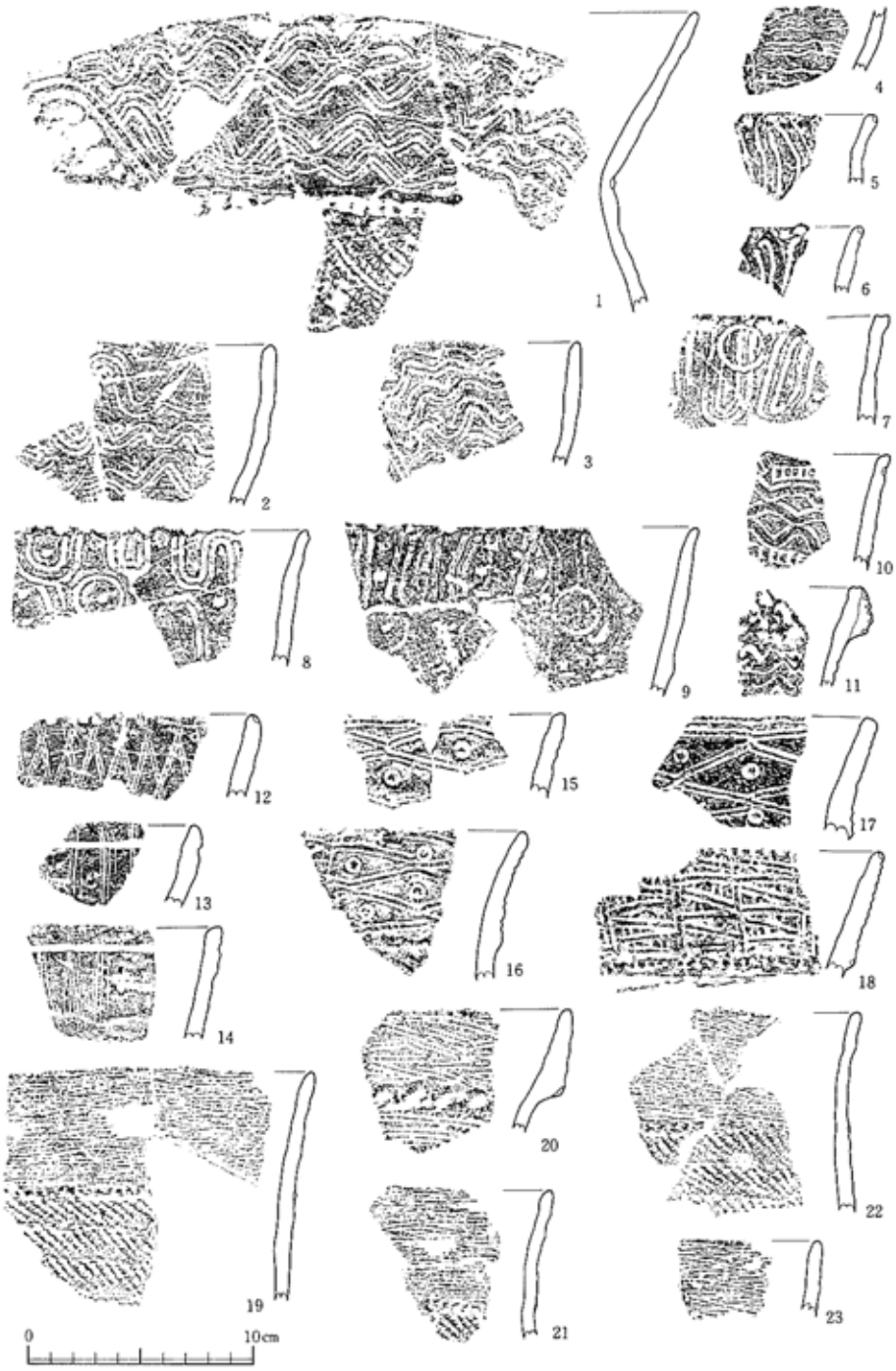
図 番号	出土位置（グリッド）		胎 土	備 考	登録No.	写真図版
第16図 1	MNO－51	2 a 層	繊維を含む	（外面）条痕文、山形沈線文　（内面）縄文（LR）、条痕文	21	9－19
2	KL－48	2 a 層	繊維を含む	（外面）縄文（LR）　（内面）縄文（LR）、条痕文	164	9－20
3	M－47	2 a 層	繊維を含む	（外面）条痕文　（内面）縄文（LR）、条痕文	243	9－21
4	41ライン	2 a 層	繊維を含む	（外面）縄文（LR）、条痕文、平行沈線文　口縁部に刻目	367	9－22
5	51ライン	2 a 層	繊維を含む	（外面）縄文（LR）　（内面）条痕文　口唇部に刻目、指の押圧文	375	9－23
6	N－47	2 a 層	繊維を含む	（外面）条痕文　タガ状の口縁部に刻目状の連続押圧文　棒状工具による円形刺突文　（内面）条痕文	262	9－24

第16図　B区遺物包含層出土土器（2）

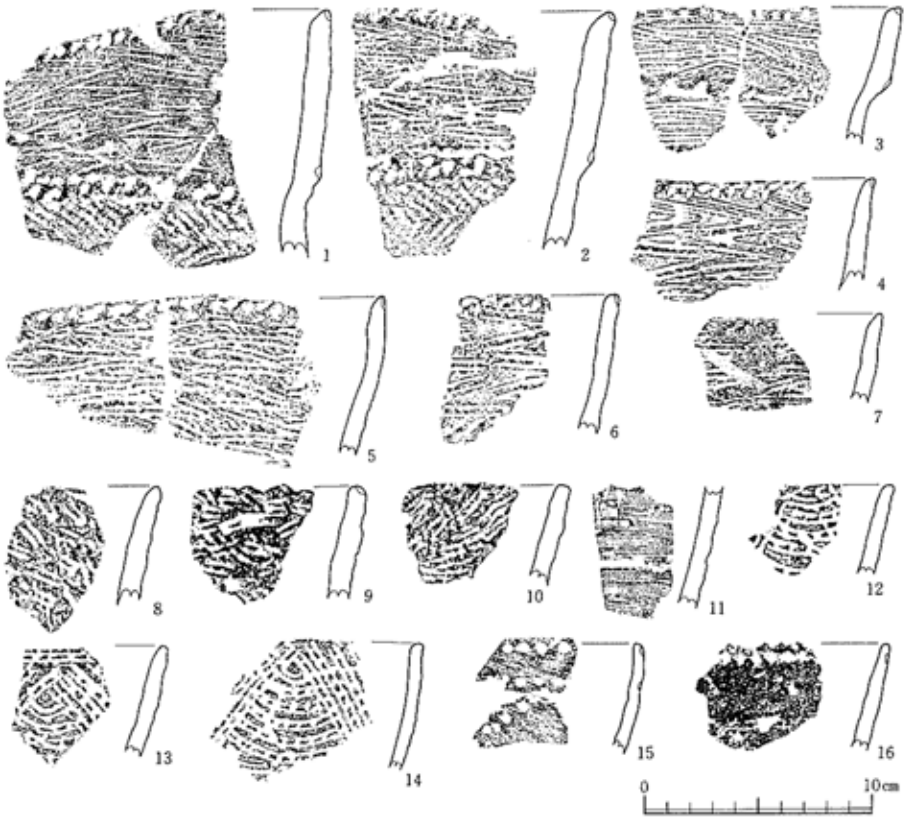


図番号	出土位置（グリッド）		胎土	備考	内面	登録No.	写真図版
第17図 1	M－48	1層	繊維を含む	山形状燃糸押圧文、波状口縁頂部に指の押圧文、燃糸押圧文間に刺突文	ナデ	11	9－25
2	MN－48	1層	繊維を含む	山形状燃糸押圧文、頸部に刻目、波状口縁	ナデ	12	9－26
3	KL－48	2a層	繊維を含む	木目状に燃糸押圧文、頸部に刻目	不明	176	9－27
4	KL－47	2a層	繊維を含む	横位の燃糸押圧文	ミガキ	197	9－28
5	43ライン	1層	繊維を含む	横位の燃糸文・押圧文	ミガキ	9	9－29
6	L－45	2b層	繊維を含む	横位の燃糸文・押圧文、口縁部に刻目	ナデ	10	9－30
7	KL－48	2b層	繊維を含む	横位の燃糸押圧文、口縁部に刻目	ナデ	24	9－31
8	N－55	2a層	繊維を含む	横位の燃糸押圧文、燃糸押圧文間に刻目	ナデ	25	9－32
9	K－49	1層	繊維を含む	横位の燃糸押圧文、燃糸押圧文間・頸部に刻目	ナデ	146	9－33
10	R－50	1層	繊維を含む	横位の燃糸押圧文、燃糸押圧文間・頸部に刻目	ナデ	148	9－34
11	JK－45	2a層	繊維を含む	横位の燃糸押圧文、口縁部に刻目	ナデ	155	9－35
12	KL－48	2a層	繊維を含む	横位の燃糸押圧文、口縁部に刻目	ミガキ	156	9－36
13	JK－48	1層	繊維を含む	横位の燃糸押圧文、頸部に刻目	ミガキ	149	9－37
14	不明		繊維を含む	弧状の燃糸押圧文、口縁部に刻目	ミガキ	226	9－38

第17図　B区遺物包含層出土土器（3）



第18図　B区遺物包含層出土土器（4）



図番号	出土位置（グリッド）		胎土	備考	内面	登録No.	写真図版
第19図1	不明		繊維を含む	羊歯竹管による波状沈線文	不明	19	10－1
2	JK－45	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による波状沈線文	ナデ	223	10－2
3	JK－45	1層	繊維を含む	羊歯竹管による波状沈線文	ナデ	228	10－3
4	KL－47	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による波状沈線文	不明	150	10－4
5	JK－45	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による波状沈線文	ナデ	227	10－5
6	JK－45	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による波状沈線文	ナデ	308	10－6
7	JK－45	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による波状沈線文	不明	226	10－7
8	JK－45	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による波状沈線文	ミガキ	230	10－8
9	N－49	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による波状沈線文	ミガキ	231	10－9
10	N－50	2b層	繊維を含む	羊歯竹管による波状沈線文	ミガキ	258	10－10
11	不明		繊維を含む	羊歯竹管による波状沈線文	不明	259	10－11
12	不明		繊維を含む	羊歯竹管による山形沈線文	ミガキ	252	10－12
13	45ライン	1層	繊維を含む	羊歯竹管による山形沈線文	ミガキ	249	10－13
14	不明		繊維を含む	羊歯竹管による山形沈線文	ミガキ	248	10－14
15	M－34	1層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ミガキ	14	10－15
16	O－49	1層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ミガキ	15	10－16
17	不明		繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	不明	128	10－17
18	KL－53	1層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ナデ	8	10－18
19	JK－46	1層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ナデ	209	10－19
20	KL－52	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ナデ	211	10－20
21	JK－44	1層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ナデ	206	10－21
22	KL－47	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ナデ	210	10－22
23	KLM－46	1層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ミガキ	207	10－23

図番号	出土位置（グリッド）		胎土	備考	内面	登録No.	写真図版
第19図1	KL－43	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ミガキ	203	10－24
2	KLM－46	1層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ナデ	213	10－25
3	KL－51	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ナデ	212	10－26
4	M－52	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ナデ	205	10－27
5	KL－48	2a層	繊維を含む	羊歯竹管による格子状沈線文	ナデ	204	10－28
6	MN－48	1層	繊維含まず	羊歯竹管による格子状沈線文	ナデ	214	10－29
7	MN－48	1層	繊維含まず	羊歯竹管による格子状沈線文	ナデ	205	10－30
8	KL－48	1層	繊維を含む	羊歯竹管による刺目状短沈線文	ナデ	326	10－31
9	KL－50	2b層	繊維を含む	羊歯竹管による刺目状短沈線文	ナデ	325	10－32
10	KL－44	1層	繊維を含む	羊歯竹管による刺目状短沈線文	ナデ	324	10－33
11	不明		繊維を含む	羊歯竹管による鋸歯状沈線文	不明	163	10－34
12	M－51	1層	繊維を含む	羊歯竹管による同心円状押引文	ミガキ	285	10－35
13	不明		繊維を含む	羊歯竹管による同心円状押引文	不明	255	10－36
14	M－51		繊維を含む	羊歯竹管による同心円状押引文	ミガキ	300	10－37
15	不明		繊維を含む	羊歯竹管による刺突文	ナデ	17	10－38
16	KL－49		繊維を含む	羊歯竹管による刺突文	ミガキ	22	10－39

第19図　B区遺物包含層出土土器（5）

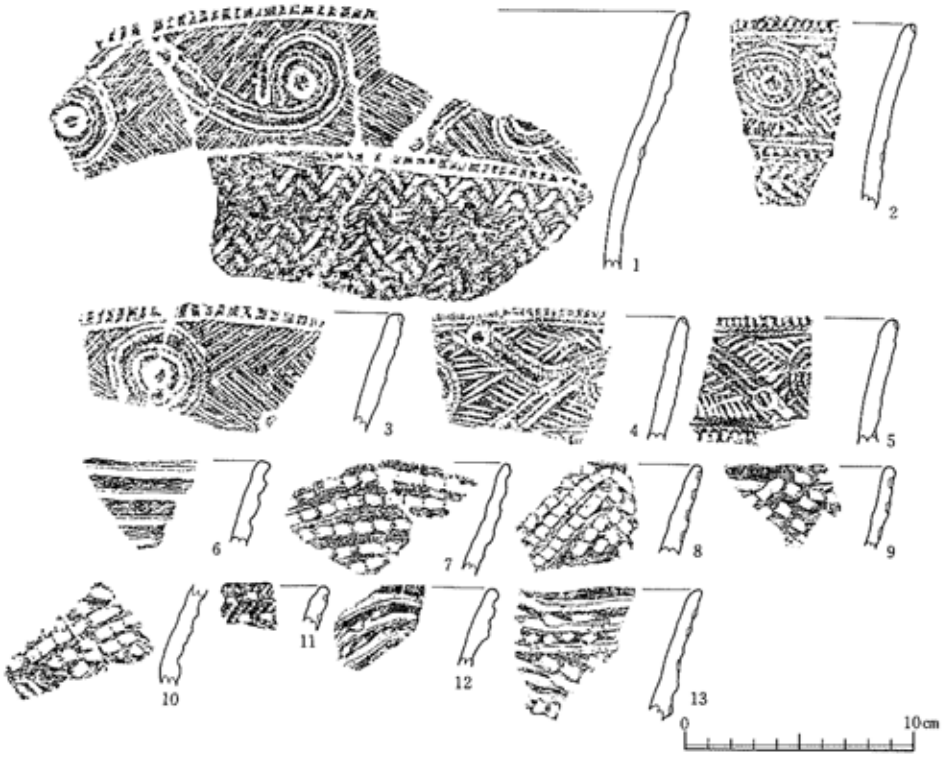


図 番号	出土位置（グリッド）		胎 土	備 考	内 面	登録No.	写真図版
第20図1	N－47	2 a 層	繊維を含む	過巻き状撚糸押圧文、半截竹管による沈線文　口縁部、頸部に刻目、鋸歯ループ文	不　明	239	11－1
2	M－49	2 a 層	繊維を含む	過巻き状撚糸押圧文、半截竹管による沈線文　口縁部、頸部に刻目	ミガキ	237	11－2
3	N－47	2 a 層	繊維を含む	過巻き状撚糸押圧文、半截竹管による沈線文　口縁部、頸部に刻目	ミガキ	238	11－3
4	MN－49	1 層	繊維を含む	過巻き状撚糸押圧文、半截竹管による沈線文　口縁部、頸部に刻目	ナデ	232	11－4
5	N－47	2 a 層	繊維を含む	過巻き状撚糸押圧文、半截竹管による沈線文　口縁部、頸部に刻目	ミガキ	233	11－5
6	JK－41	1 層	繊維を含む	棒状工具による平行沈線文	ミガキ	331	11－6
7	不　明		繊維を含む	棒状工具による押引文	不　明	267	11－7
8	JK－45	2 a 層	繊維を含む	棒状工具による押引文	ミガキ	268	11－8
9	JK－45	2 a 層	繊維を含む	棒状工具による押引文	ミガキ	270	11－9
10	不　明		繊維を含む	棒状工具による押引文	不　明	299	11－10
11	不　明		繊維を含む	棒状工具による刺突文	不　明	321	11－11
12	不　明		繊維を含む	棒状工具による沈線文＋刺突文	不　明	273	11－12
13	KL－44	2 a 層	繊維を含む	棒状工具による沈線文＋刺突文	ミガキ	279	11－13

第20図　B区遺物包含層出土土器（6）

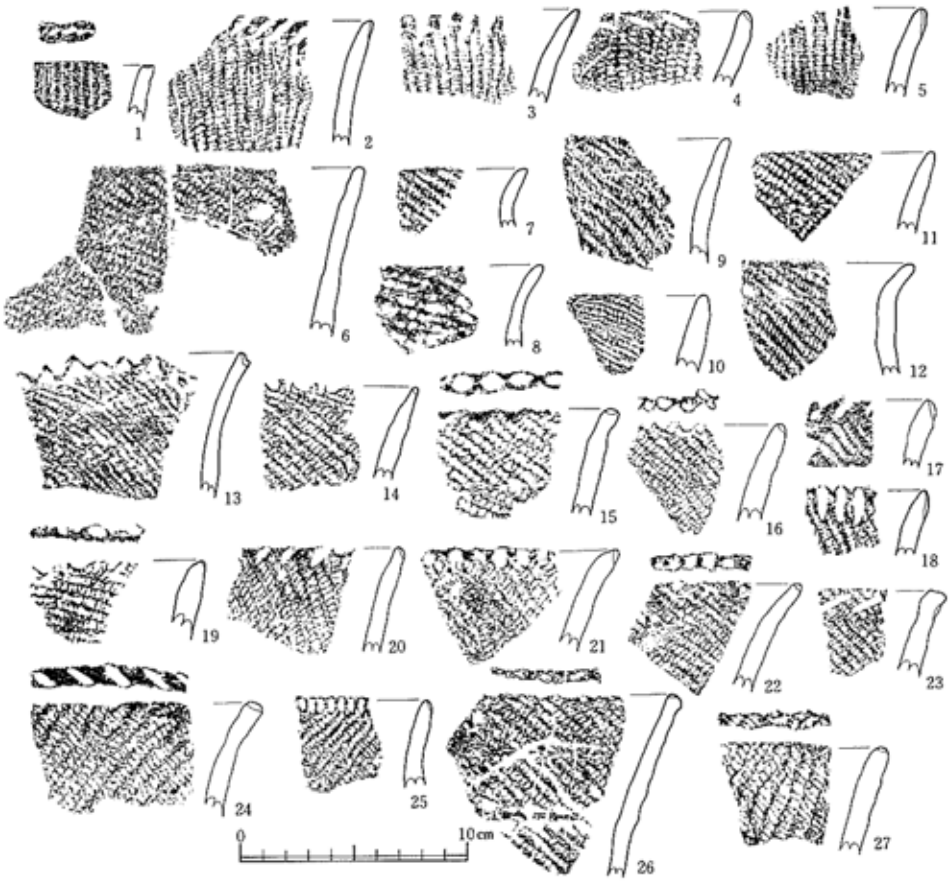
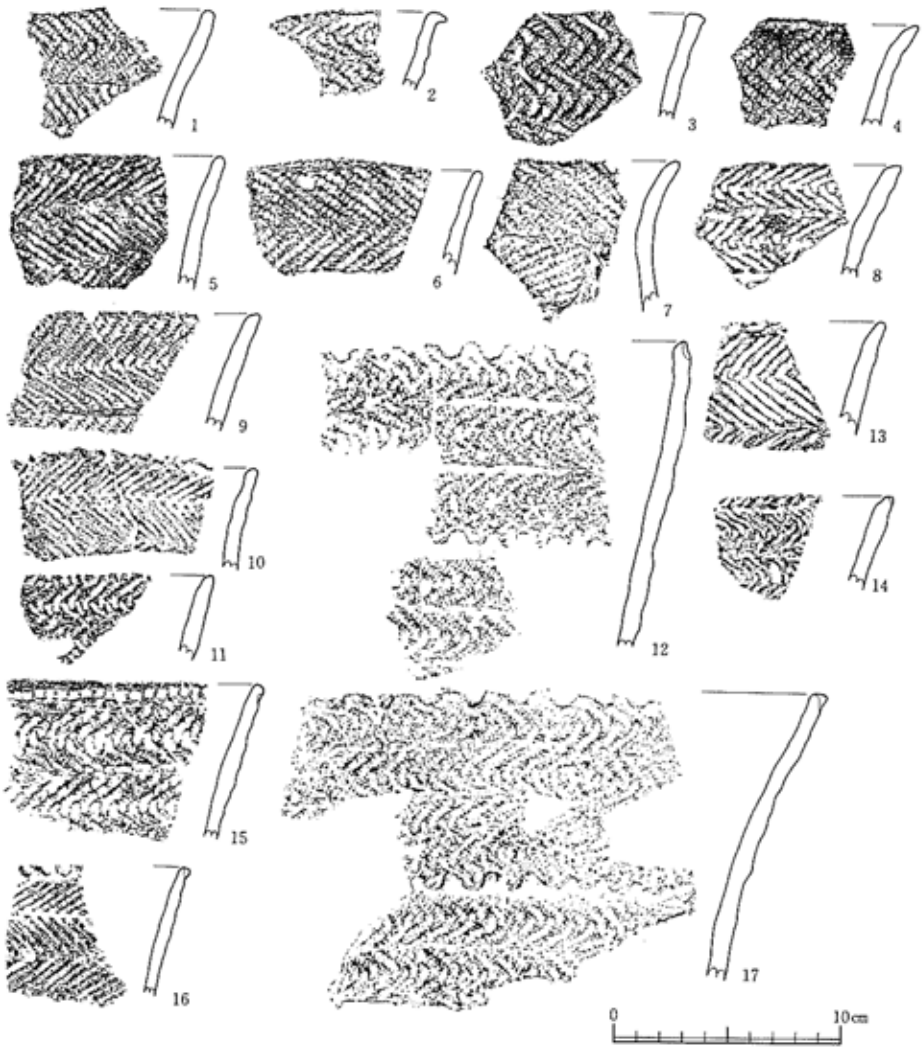


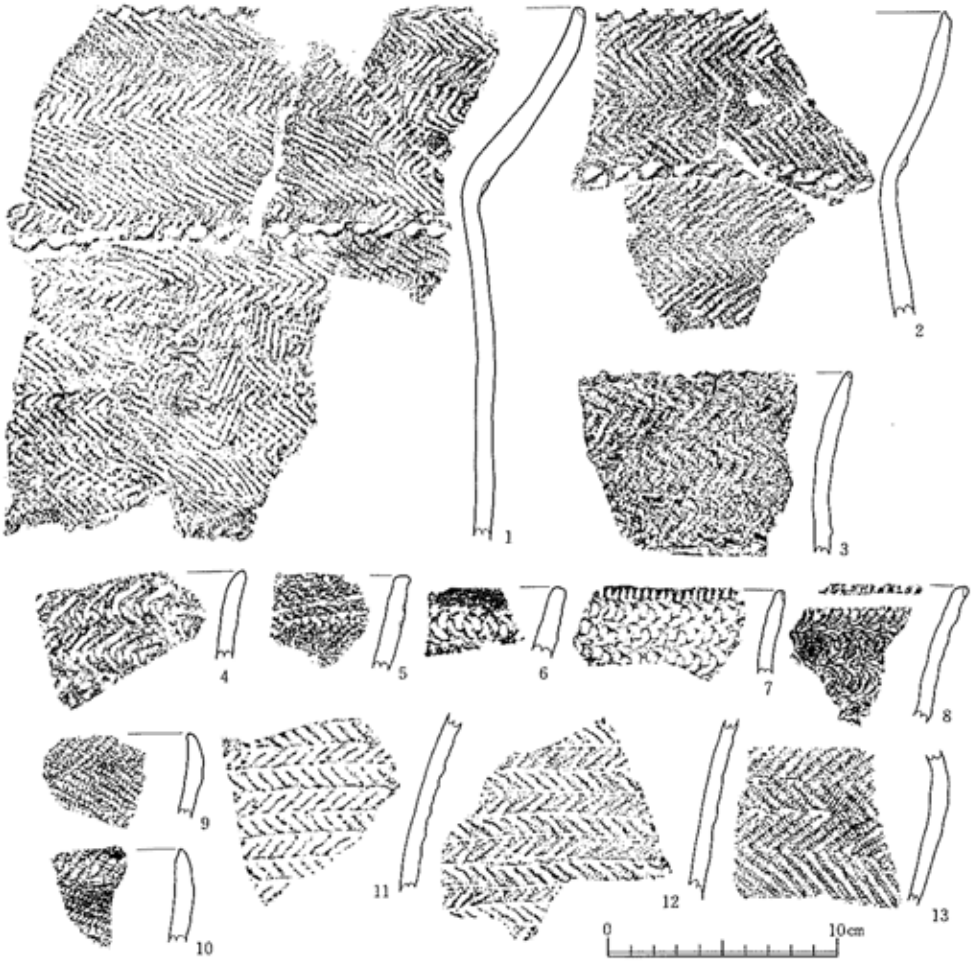
図 番号	出土位置（グリッド）		胎 土	備 考		内 面	登録No.	写真図版
第21図1	41ライン	2a層	繊維を含む	縦走縄文（RL）	口唇部に縄文原体押圧文	ナ デ	109	11－14
2	JK－43	1 層	繊維を含む	縦走縄文（RL）	口縁部に刻目	ナ デ	102	11－15
3	JK－44	2a層	繊維を含む	縦走縄文（RL）	口縁部に刻目	ナ デ	91	
4	JK－45	2a層	繊維を含む	縦走縄文（LR）	口縁部に刻目	ナ デ	90	
5	KL－44	2a層	繊維を含む	縦走縄文（LR）	口縁部に刻目	ナ デ	93	
6	41ライン	1 層	繊維を含む	斜行縄文（RL）		ナ デ	94	11－16
7	M－49	2a層	繊維を含む	斜行縄文（RL）		ナ デ	95	11－17
8	KL－44	2a層	繊維を含む	斜行縄文（RL）		ナ デ	97	11－18
9	KL－48	1 層	繊維を含む	斜行縄文（RL）		ナ デ	98	11－19
10	M－49	1 層	繊維を含む	斜行縄文（RL）		ナ デ	99	11－20
11	M－50	2a層	繊維を含む	斜行縄文（RL）		ミガキ	100	11－21
12	MN－46	2a層	繊維を含む	斜行縄文（RL）		ナ デ	106	11－22
13	K－53	2a層	繊維を含む	斜行縄文（LR）	口縁部に刻目　小波状口縁	ミガキ	5	11－23
14	N－50	1 層	繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に刻目	ミガキ	103	
15	不 明		繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に刻目	ナ デ	105	11－24
16	JK－44	1 層	繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に刻目	ナ デ		
17	KL－48	2b層	繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に刻目	ナ デ	110	11－25
18	41ライン	2a層	繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に刻目	ナ デ	101	11－26
19	M－51	1 層	繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に刻目	ミガキ	104	11－27
20	不 明		繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に刻目	不 明		
21	JK－45	2a層	繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に刻目	ナ デ		11－28
22	KL－42	2b層	繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に刻目	ナ デ		
23	不 明		繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に刻目	ナ デ		
24	43ライン	1 層	繊維を含む	斜行縄文（LR）	口縁部に刻目	ナ デ		
25	JK－45	2a層	繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に刻目	ナ デ		
26	KL－47	2a層	繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に縄文原体押圧	ナ デ		
27	KL－43	2a層	繊維を含む	斜行縄文（RL）	口縁部に縄文原体押圧	ナ デ		

第21図　B区遺物包含層出土土器（7）



図番号	出土位置（グリッド）		胎土	備考	内面	登録No.	写真図版
第22図1	KL－45	1層	繊維を含む	結束羽状縄文	ナデ	2	12－1
2	KLM－45	1層	繊維を含む	結束羽状縄文	ナデ	32	12－2
3	KLM－46	1層	繊維を含む	結束羽状縄文	ナデ	36	12－3
4	KLM－46	1層	繊維を含む	結束羽状縄文	ナデ	37	12－4
5	KL－51	1層	繊維を含む	結束羽状縄文	不明	40	12－5
6	KL－51	2a層	繊維を含む	結束羽状縄文	ミガキ	43	12－6
7	KL－51	2a層	繊維を含む	結束羽状縄文	ナデ	44	12－7
8	KL－51	2b層	繊維を含む	結束羽状縄文	ナデ	46	12－8
9	KL－51	2b層	繊維を含む	結束羽状縄文	ナデ	47	12－9
10	43ライン	1層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部、頸部に刺目	ナデ	75	
11	JK－45	1層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部、頸部に刺目	ミガキ	76	12－10
12	43ライン	1層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部、頸部に刺目	ミガキ	78	12－11
13	JK－45	1層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部、頸部に刺目	ミガキ	78	12－12
14	KL－50	1層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部、頸部に刺目	ミガキ	79	12－13
15	KL－42	2a層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部、頸部に刺目	ナデ	80	12－14
16	M－49	2a層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部、頸部に刺目	ミガキ	81	12－15
17	M－49	2b層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部、頸部に刺目	ナデ	82	12－16

第22図　B区遺物包含層出土土器（8）



図番号	出土位置（グリッド）		胎土	備考	内面	登録No.	写真図版No.
第23図1	43ライン	2a層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部、頸部に刺目	ミガキ	83	12−17
2	43ライン	2a層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部、頸部に刺目	ナデ	84	12−18
3	43ライン	1層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部、頸部に刺目	ナデ	45	12−19
4	KL−48	2a層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部に刺突文	ナデ	3	12−20
5	KL−48	1層	繊維を含む	結束羽状縄文　口縁部に刺突文	ナデ		
6	LM−50	2a層	繊維を含む	結束羽状縄文　結束部分を回転　口縁部に刺目	ナデ		
7	HI−43	1層	繊維を含む	結束羽状縄文　結束部分を回転　口縁部に刺目	ナデ	116	12−21
8	LM−50	2b層	繊維を含む	結束羽状縄文	ナデ	120	12−22
9	KLM−46	1層	繊維を含む	非結束羽状縄文	ナデ	89	12−23
10	JK−46	1層	繊維を含む	非結束羽状縄文	ナデ	90	12−24
11	KLM−46	1層	繊維を含む	非結束羽状縄文（胴部資料）	ナデ	87	12−25
12	JK−49	1層	繊維を含む	非結束羽状縄文（胴部資料）	ナデ	86	12−26
13	KL−51	1層	繊維を含む	非結束羽状縄文（胴部資料）	ナデ	316	

第23図　B区遺物包含層出土土器（9）

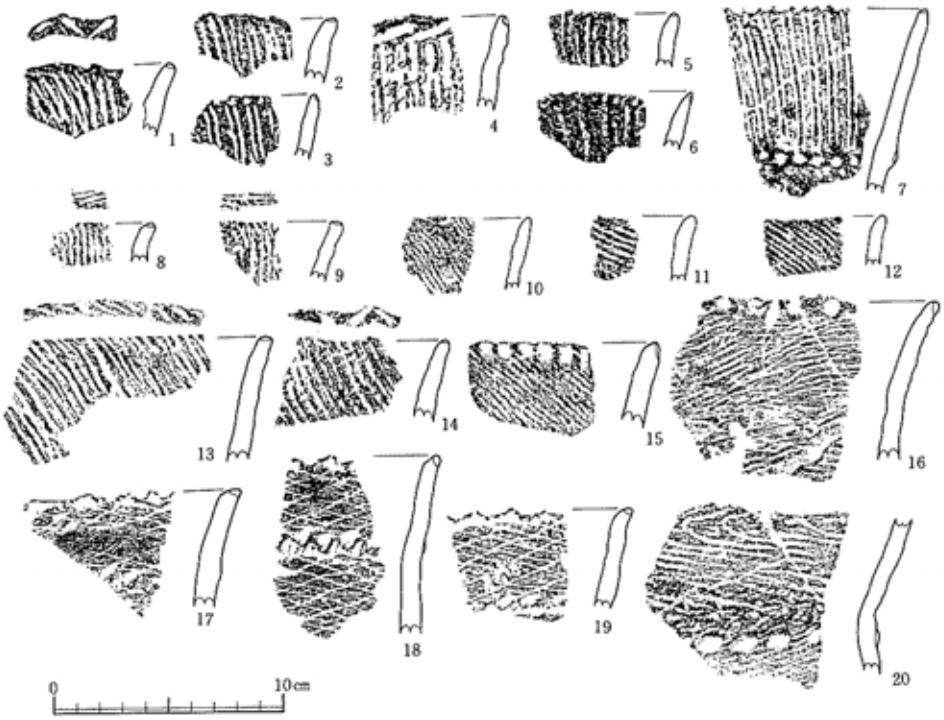


図 番号	出土位置（グリッド）		胎 土	備 考		内 面	登録No.	写真図版
第24図 1	ＪＫ－46	1 層	繊維を含む	縦走撚糸文	口縁部に刻目	不 明	138	11－29
2	ＫＬ－43	2ａ層	繊維を含む	縦走撚糸文	口縁部に刻目	不 明	139	11－30
3	Ｉ－43	1 層	繊維を含む	縦走撚糸文	口縁部に刻目	不 明	140	11－31
4	ＪＫ－46	1 層	繊維を含む	縦走撚糸文	口縁部に刻目	不 明	141	11－32
5	ＫＬ－43	2ａ層	繊維を含む	縦走撚糸文	口縁部に刻目	粗いナデ	142	11－33
6	不 明		繊維を含む	縦走撚糸文	口縁部に刻目	粗いナデ	143	11－34
7	ＭＮ－50	2ａ層	繊維を含む	縦走撚糸文	口縁部に刻目	ナ デ	145	11－35
8	ＪＫ－44	1 層	繊維を含む	縦走撚糸文	口縁部に撚糸押圧文	ナ デ	132	11－36
9	ＪＫ－45	2ａ層	繊維を含む	縦走撚糸文		不 明	131	11－37
10	ＪＫ－45	1 層	繊維を含む	斜行撚糸文		不 明	133	11－38
11	不 明		繊維を含む	斜行撚糸文		ナ デ	10	11－39
12	ＫＬ－42	2ａ層	繊維を含む	斜行撚糸文		ナ デ	134	11－40
13	ＫＬ－42	2ａ層	繊維を含む	斜行撚糸文	口縁部に刻目	ナ デ	130	11－41
14	ＪＫ－46	1 層	繊維を含む	斜行撚糸文	口縁部に刻目	ナ デ	144	11－42
15	ＫＬ－42	2ａ層	繊維を含む	斜行撚糸文	口縁部に刻目	ミガキ	137	11－43
16	Ｋ－50	1 層	繊維を含む	斜行撚糸文	口縁部に刻目	ミガキ	11	11－44
17	ＪＫ－44	2ａ層	繊維を含む	横目状撚糸文	口縁部・頸部に刻目	ミガキ	170	11－45
18	ＫＬ－47	2ｂ層	繊維を含む	横目状撚糸文	口縁部・頸部に刻目	ミガキ	169	11－46
19	ＫＬ－43	2ａ層	繊維を含む	横目状撚糸文	口縁部・頸部に刻目	ミガキ	158	11－47
20	不 明		繊維を含む	木目状撚糸文	頸部に刻目（脚部資料）	ナ デ		11－48

第24図　Ｂ区遺物包含層出土土器 (10)

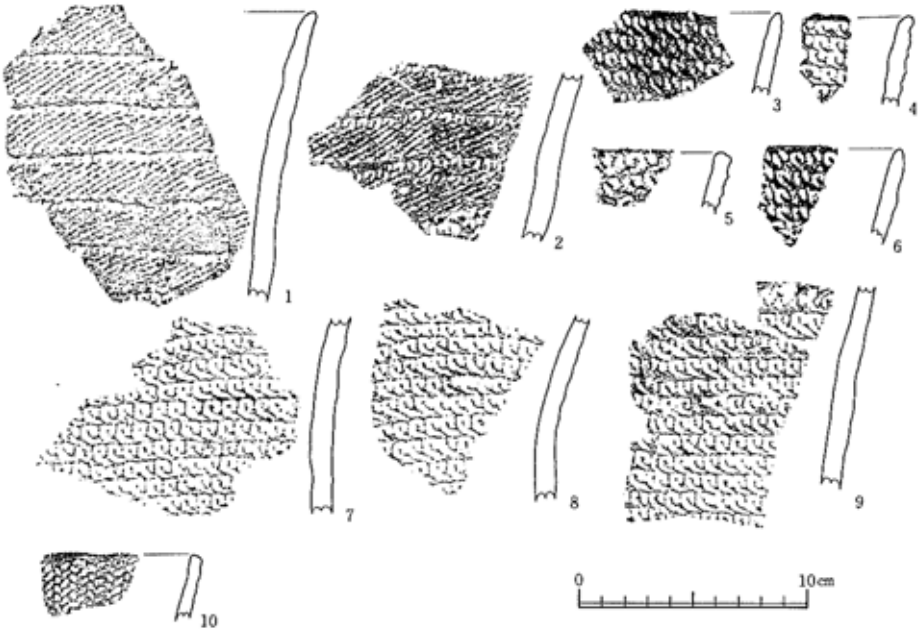
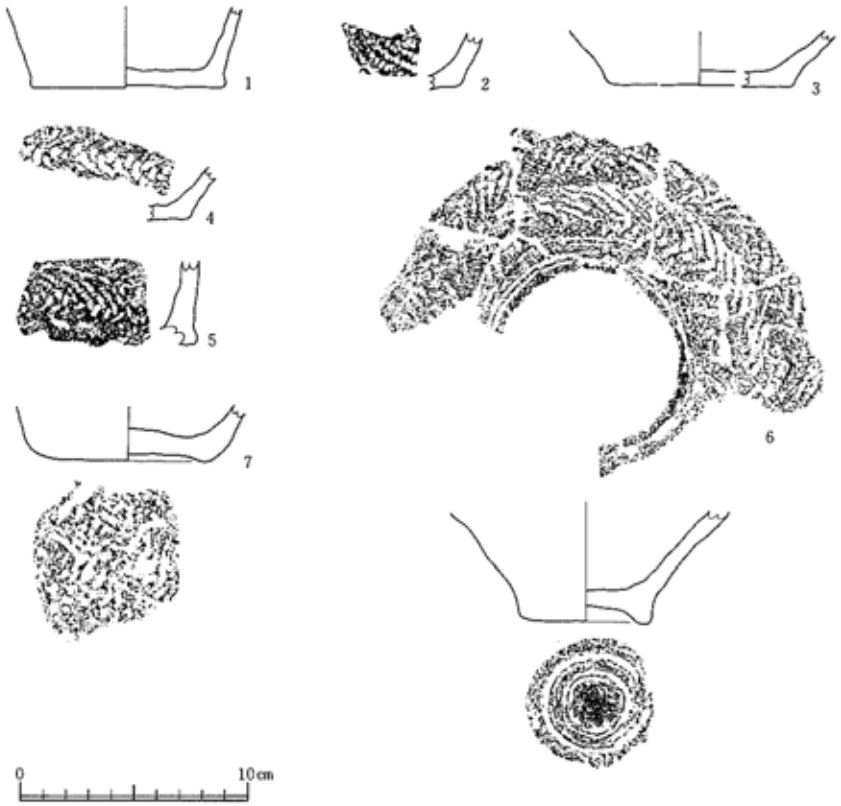


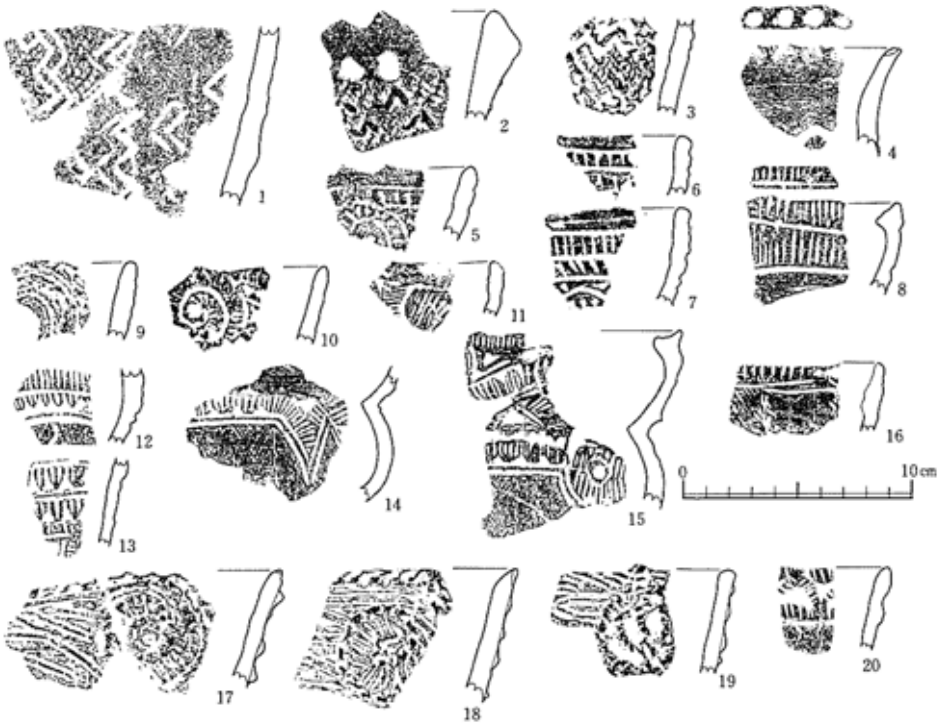
図 番号	出土位置（グリッド）	胎 土	備 考	内 面	登録No.	写真図版
第25図1	KLM－46 1 層	繊維を含む	末端ループ文	ナ デ	111	13－1
2	JK－46 1 層	繊維を含む	末端ループ文（胴部資料）	不 明	123	13－2
3	N－51 1 層	繊維を含む	末端ループ文	不 明	115	13－3
4	不 明	繊維を含む	末端ループ文	不 明	119	13－4
5	不 明	繊維を含む	末端ループ文	不 明	118	13－5
6	N－51 1 層	繊維を含む	末端ループ文	ナ デ	112	13－6
7	MN－48 1 層	繊維を含む	末端ループ文（胴部資料）	ナ デ	124	13－7
8	MN－48 1 層	繊維を含む	末端ループ文（胴部資料）	ナ デ	122	13－8
9	MN－48 1 層	繊維を含む	末端ループ文（胴部資料）	ナ デ	127	13－9
10	N－51 1 層	繊維を含む	組紐回転文	ナ デ	254	13－10

第25図　B区遺物包含層出土土器 (10)



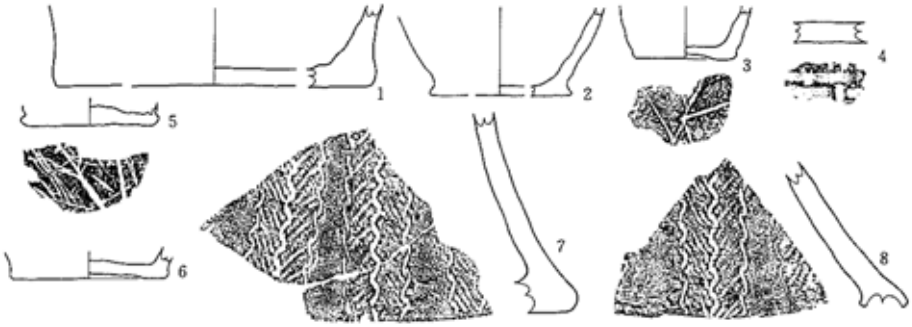
図番号	出土位置（グリッド）		胎土	底部の形	立ち上がり	胴部文様	底部文様	内面調整	備考	登録No.	写真図版
第26図1	R－50	1層	繊維を含む	平底	外傾	不明	不明	不明	摩滅度しい	586	13－10
2	K－52	1層	繊維を含む	平底	外傾	縄文（RL）	不明	ミガキ		576	
3	43ライン	1層	繊維を含む	平底	外傾	不明	不明	ナデ	脚下部に刺突文あり	589	
4	K－50	2b層	繊維を含む	平底	外傾	結束羽状縄文	結束羽状縄文	ナデ		581	
5	KLM－46	1層	繊維を含む	平底	底立	結束羽状縄文	不明	ナデ		575	
6	不明		繊維を含む	編底風平底	外傾	結束羽状縄文	ケズリ	ナデ		229	13－11
7	KL－51	1層	繊維を含む	編底風平底	外傾	結束羽状縄文	結束羽状縄文	ナデ		582	

第26図　B区遺物包含層出土土器 (11)



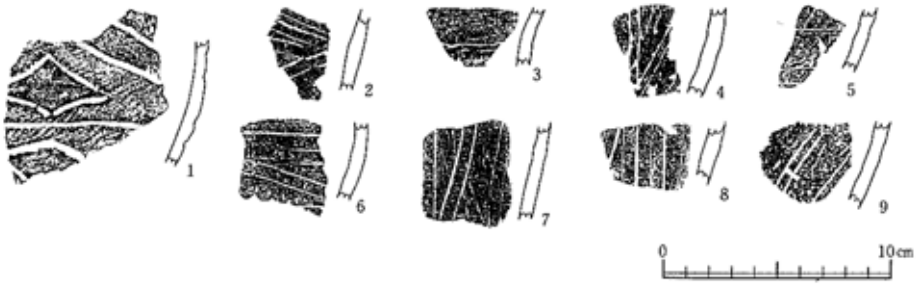
図番号	出土位置（グリッド）	胎土	備考	内面	登録No.	写真図版
第27図 1	MN－48　1層	繊維含まず	縄文施文後、縦走の山形沈線文	ナデ	222	13－13
2	JK－45　1層	繊維含まず	縄文施文後、山形状の粘土貼り付け文	ナデ	27	13－14
3	K－55　1層	繊維含まず	横位の山形沈線文	ナデ	28	13－15
4	M－53　1層	繊維含まず	横位の山形沈線文	ナデ	330	13－16
5	不明	繊維含まず	円形・横位平行沈線＋刻目充填文	ミガキ	244	13－17
6	M－53　1層	繊維含まず	横位平行沈線＋刻目充填文	ミガキ	240	13－18
7	M－53　1層	繊維含まず	横位平行沈線＋刻目充填文	ミガキ	281	13－19
8	M－50　トレンチ埋土	繊維含まず	横位平行沈線＋刻目充填文	ミガキ	449	13－20
9	KLM－45　1層	繊維含まず	円形沈線文＋短沈線充填文	ミガキ	235	13－21
10	N－49　1層	繊維含まず	渦巻き状・横位平行沈線＋短沈線充填文	ミガキ	449	13－22
11	M－53　1層	繊維含まず	円形沈線文＋短沈線充填文	ミガキ	638	13－23
12	N－49　1層	繊維含まず	横位平行沈線＋刻目充填文、三角形の彫去	ミガキ	435	13－24
13	N－52　1層	繊維含まず	横位平行沈線＋刻目充填文、三角形の彫去	ミガキ	436	13－25
14	N－54　1層	繊維含まず	平行沈線＋短沈線充填文、三角形の彫去	ミガキ	447	13－26
15	MNO－54　1層	繊維含まず	平行沈線＋短沈線充填文、三角形の彫去	ミガキ	446	13－27
16	MN－54　1層	繊維含まず	横位沈線文＋刻目、縦走結節回転文	ナデ	219	13－28
17	N－54　1層	繊維含まず	渦巻き状粘土貼り付け文＋短沈線文　口縁部に刻目	ミガキ	206	13－29
18	M－51　1層	繊維含まず	渦巻き状粘土貼り付け文＋短沈線文　口縁部に刻目	ミガキ	250	13－30
19	K－52　1層	繊維含まず	渦巻き状粘土貼り付け文＋短沈線文	不明	594	13－31
20	M－51　1層	繊維含まず	三角形の粘土貼り付け文＋刻目	ナデ	441	13－32

第27図　B区遺物包含層出土土器 (12)



図番号	出土位置（グリッド）	胎土	底部の形	立ち上がり	胴部文様	底部文様	内面調整	備考	登録No.	写真図版
第28図1	KL－49　1層	繊維含まず	平底	外傾	無文	網代圧痕	ミガキ		584	
2	N－47　1層	繊維含まず	平底	外傾	無文	無文	ミガキ		585	13－33
3	不明	繊維含まず	平底	不明	不明	木葉痕	ミガキ		503	13－34
4	S－44　1層	繊維含まず	平底	不明	不明	網代圧痕	不明		577	
5	K－51　1層	繊維含まず	縁底風平底	外傾	無文	木葉痕	不明		502	
6	41ライン　1層	繊維含まず	縁底風平底	外傾	不明	網代圧痕	不明		583	
7	M－50　1層	繊維含まず	平底	内傾	縦走結節回転文		ミガキ		505	13－35
8	K－51　1層	繊維含まず	平底	内傾	縦走結節回転文		ミガキ	7と同一個体	504	13－36

第28図　B区遺物包含層出土土器 (13)



図番号	出土位置（グリッド）	胎土	備考	内面	登録No.	写真図版
第29図1	42ライン　1層	繊維含まず	菱形状沈線文、磨消縄文	ミガキ	368	13－37
2	42ライン　1層	繊維含まず	細利な平行施文具による平行沈線文	ミガキ	355	13－38
3	N－53　1層	繊維含まず	細利な平行施文具による平行沈線文	ミガキ	380	13－39
4	K－52　1層	繊維含まず	細利な平行施文具による平行沈線文	不明	381	13－40
5	42ライン　1層	繊維含まず	細利な平行施文具による平行沈線文	ミガキ	436	13－41
6	KL－48　1層	繊維含まず	細利な平行施文具による平行沈線文	不明	351	13－42
7	N－47　2a層	繊維含まず	細利な平行施文具による平行沈線文	不明	361	13－43
8	KL－47　2a層	繊維含まず	細利な平行施文具による平行沈線文	ミガキ	362	13－44
9	KL－42　2a層	繊維含まず	細利な平行施文具による平行沈線文	不明	363	13－45

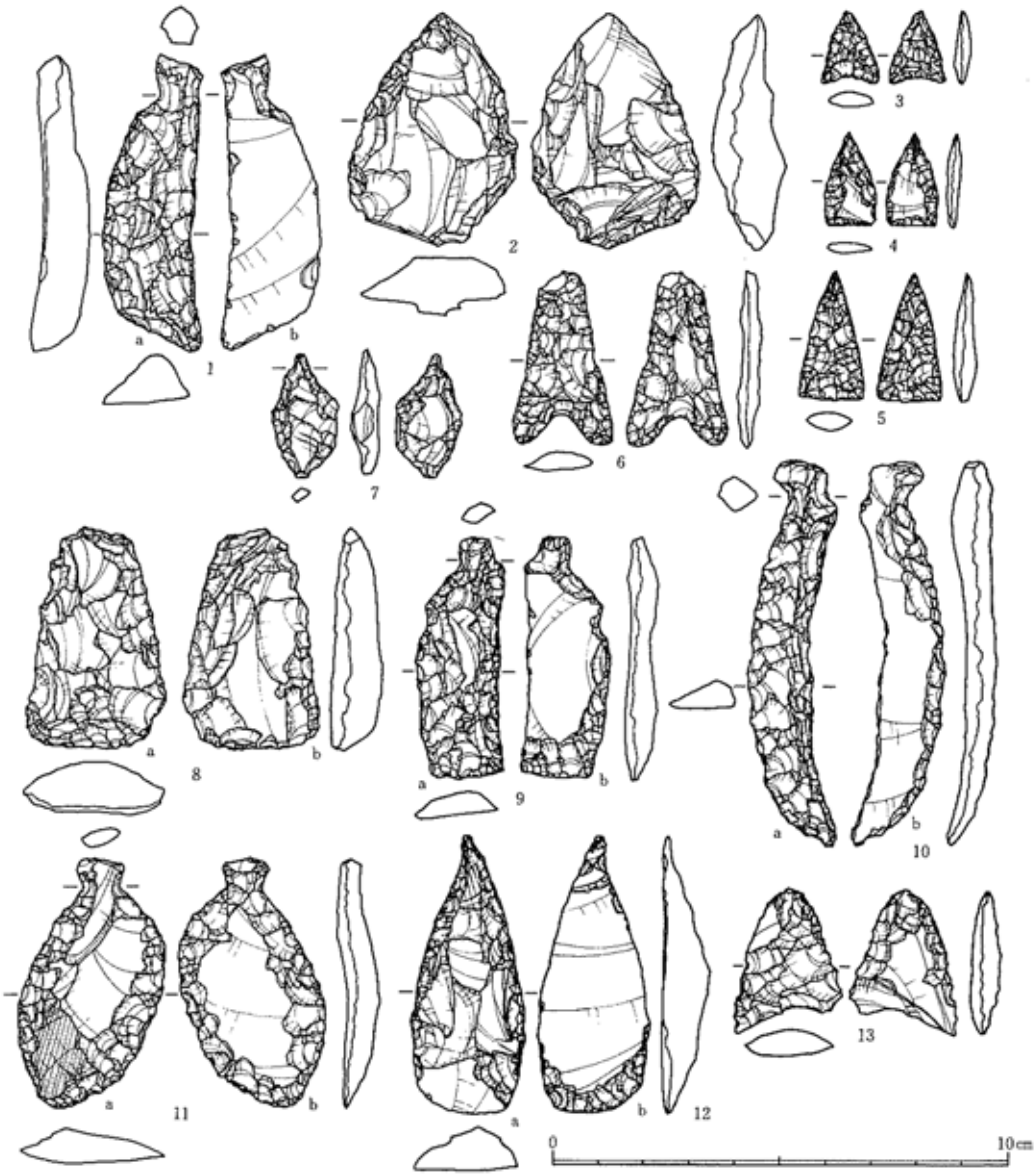
第29図　B区遺物包含層出土土器 (14)

Ｂ区遺物包含層出土石器（第 30 図 3～13、第 31 図）

いわゆる Tool 類は合計 84 点出土している。第 30 図 3～6 は石鏃である。6 の大型品は先端部が火熱を受けてはじけている。7 は両極剥片を素材とした石錐である。8 は箆状石器で、ｂ面基部の二次加工はステップが著しい。9～11 は石匙である。9 はａ面右側辺の二次加工が左側辺およびｂ面の二次加工を切っており、刃部再生の痕跡が顕著である。10 もａ面右側辺の二次加工が左側辺の二次加工を切っている。つまみ部の軸は現在の石器の長軸とずれており、初期にはａ面の右側がふくらんだ幅の広い平面形を呈していたものが、刃部再生の繰り返しによって現在の細長く鋭い平面形態になったと思われる。12 も 8・10 と同様の二次加工の特徴が認められる。特にａ面上部の加工にそれが顕著であり、不定形石器に分類したが、石匙のつまみ部に加工が及んでこの様な形態を呈したものと思われる。13 は剥片素材の尖頭器の破損品（未成品）に再加工が施されている。第 31 図 1 は磨製石斧の未成品の下半部である。折れ面のパティナは新しい。2 は分厚い剥片の稜側辺に粗雑な二次加工が施されている。3 は片面加工の尖頭器を再利用したスクレーパーである。折れ面を切る二次加工が認められる。4 はいわゆる石刃である。打面部は折損しており、先端には稜形成の石核調整を思わせる細かな加工が認められる。5・6 は石核で本遺跡には珍しい黒曜石が用いられている。5 は数ｃｍの大きさの亜角礫を素材とし、片面に周縁から剥離がなされている。6 は背面に自然面を含む剥片を素材としている。そして背面を打面として 2 枚の剥片が剥離されている。7 は石核に分類したが、周縁に細かい剥離が認められ、石斧の可能性も考えられる。石材は玉髄である。

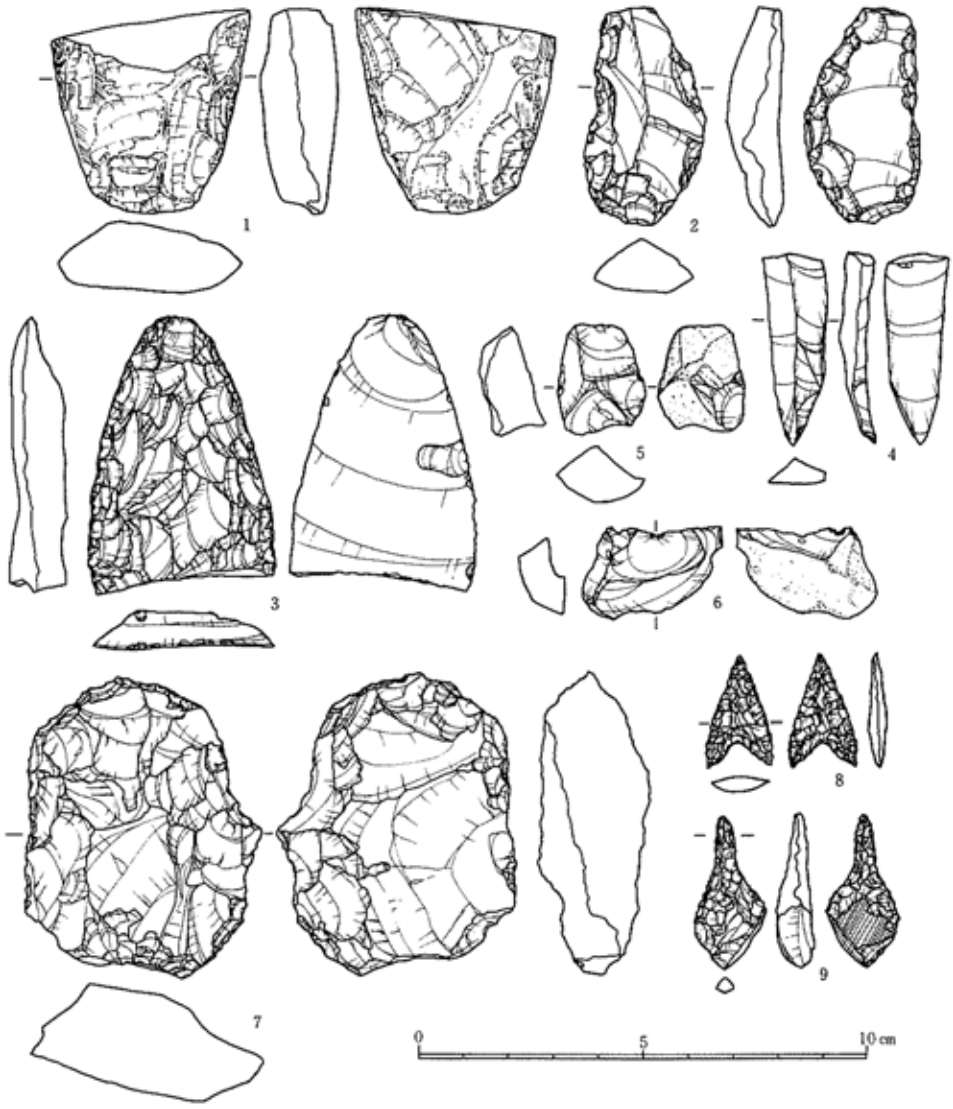
	A 区	B 区	SX06	SX09	SX15	SX18	SK06	SK16	SK17	B区確認面	倒木痕	計
石鏃		18			1		1			3		23
石錐		3								1		4
石匙	1	17				1	1	2			2	24
尖頭器		2								1		3
箆状石器		2	1							1		4
石斧		1										1
両極剥離痕ある石器		14								4		18
不定形石器	1	24		1						2		28
石核		3										3
楔状耳飾り									1			3
計	2	84	1	1	1	1	2	2	1	12	2	109

第３表　出土石器一覧表



番号	出土地区・層位	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	石材	備考
1	A区 28ライン	石匙 Ⅰa類	6.6	2.2	1.0	珪質頁岩	a面右側辺の加工が最も新しい。 稜線やや摩滅。
2	〃 23ライン	不定形石器	5.2	3.6	1.6	〃	
3	B区 JK45 2層	石鏃 Ⅰb類	1.6	1.2	0.3	珪化凝灰岩	
4	〃 〃 〃	〃 Ⅱ類	2.1	1.1	0.3	珪質頁岩	
5	〃 KL42 2層	〃 〃	2.8	1.4	0.5	玉髄	
6	〃 JK45 2層	〃 Ⅰa類	(3.0)	2.2	0.4	珪質頁岩	先端部欠ハジケ
7	〃 〃	石錐 Ⅱ類	2.7	1.5	0.6	玉髄	両極剥片素材。
8	〃 KL42 2層	微小石器	4.9	3.1	1.1	珪質頁岩	
9	〃 N53	石匙 Ⅰb類	5.4	1.9	0.7	〃	a面右側辺の加工が最も新しい。
10	〃 43ライン 1層	〃 Ⅰa類	3.5	1.0	0.8	〃	〃
11	〃 N49 2層上部	〃 Ⅱb類	5.5	3.2	0.7	〃	素材打面部は折断されている。
12	〃 K41 2層	不定形石器	6.2	2.5	1.0	〃	石匙？ a面右側辺の加工が最も新しい。
13	〃 N50 1～2層	〃	3.2	2.4	0.6	〃	基部折断を切る二次加工あり。

第30図　包含層出土石器



番号	出土地区・層位	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	石材	備考
1	B区 N47 2層下部	磨製石斧	(4.6)	(4.4)	(1.7)	硬砂岩	未成品。 新しい折損。
2	〃 KL49 1層	不定形石器	4.9	2.7	1.1	珪質岩	
3	〃 KL51 2層	〃	6.2	4.1	1.2	珪質頁岩	片面加工尖頭器の再加工品。
4	〃 KL51 1層	石刃	(4.3)	(1.5)	(0.7)	〃	被熱成。 打面部新しい折損。
5	〃 52 2a層	石核	2.4	2.0	1.1	黒曜石	剥離から剥離。
6	〃 52	〃	2.0	3.1	0.9	〃	剥片素材。
7	〃 KL48 1層	〃	6.8	5.3	2.4	玉髄	周辺にツブレ状の細かい剥離あり。
8	B区 KLM48	石鏃 Ia類	2.5	1.5	0.4	珪質頁岩	
9	〃 O50	石鏃 Ia類	3.5	1.6	0.8	〃	

第31図　包含層・包含層外出土の石器

第三章　考　　察

1．出土遺物について

(1) 縄文時代

A．縄文土器の特徴と編年的位置

今回の調査で出土した縄文土器は、縄文時代早期中葉の土器（A群土器)、縄文時代早期末葉の土器（B群土器)、縄文時代早期末葉もしくは前期初頭の土器（C群土器)、縄文時代前期初頭の土器（D群土器)、縄文時代前期中葉～中期初頭の土器（E群土器）に大別できた。

◎A群土器（第15図）

A群土器は、胎土に植物繊維を含まず、土器内外面に貝殻文が施されるものである。このような特徴をもつ土器は、七ヶ宿町原頭遺跡Ⅰ群土器（村田：1986)、高清水町大寺遺跡（興野：1970)、福島県塩川町常世遺跡（芳賀：1977）で類例が見られ、縄文時代早期中葉大寺式に比定できる。

◎B群土器（第16図）

B群土器は、胎土に植物繊維を含み、土器の内、外面に条痕文をもち、条痕文のほかに縄文や沈線文が施される、いわゆる縄文条痕文土器である。縄文条痕文土器は、林謙作（1965）によって素山Ⅱｂ式→上川名Ⅰ式→梨木畑式→船入島下層式に編年されており、縄文時代早期末葉に位置づけられている。

B群土器のうち、外面に条痕文、外面に山形沈線文が施されるものは、七ヶ宿町小梁川遺跡（真山：1987）や福島県相馬郡飯舘村松ヶ平A遺跡Ⅰ群土器（鈴鹿：1984）に類例が見られ、縄文時代早期末葉の梨木畑式に比定できる。他はおおまかに縄文時代早期末に位置づけておく。

◎C群土器（第12図）

C群土器は、胎土に植物繊維を多量に含む深鉢型土器で、口縁部に装飾的な文様をもたず、縦走縄文・縦走撚糸文が主体となる土器である。これらはA区遺物包含層およびその周辺からまとまって出土している。

C群土器と同様の特徴をもつ土器は、七ヶ宿町大倉遺跡（笠原：1985）から出土している。大倉遺跡では、縄文時代早期末か前期初頭に位置づけるかは課題としているが、船入島貝塚貝層下土層出土土器→大倉遺跡１類土器→上川名貝塚上層出土土器という縄文時代早期末～前期初頭の変遷を考えており、ここでも同様に位置づけておく。

◎D群土器（第17図～第26図）

D群土器は、胎土に植物繊維を多量に含む深鉢型土器で、口縁部に装飾的な文様が施されるもの（ＤⅠ類）と地文のみのもの（ＤⅡ類）に分類でき、さらに細分できる（第3表）。また、それらの出土点数は第5表に示した。

(1) D群土器の特徴　D群土器は本遺跡出土土器の 9 割以上を占めるものである。破片資料が多く、接合資料も少なかったため、口縁部が残っている資料330点と底部資料7点を観察した。その結果、D群土器の特徴は次のようになる。

《器形》

①すべて深鉢形土器である。

②口縁部は平縁が大部分で波状口縁のものは5点のみである。

③口縁部の器形は直立～外傾、外反するものが大部分で、内弯するものは2点のみである。

④口縁部～胴部の器形が分かるものには、ａ．胴部でやや膨らみ直立気味に立ち上がり、頸部でくびれ外傾して立ち上がるもの　ｂ.胴部はほぼまっすぐ立ち上がり頸部から外傾、外反して立ち上がるもの　ｃ．頸部で段が付きやや内傾しながら外反するもの　ｄ．胴部から口縁部までくびれないで外傾気味に立ち上がるものがある。

《文様・地文の種類と比率》

①口縁部に施される文様には、撚糸押圧文（ＤＩａ類）、竹管文（ＤＩｂ類）、竹管撚糸文（ＤＩｃ類）、棒状工具による沈線文・刺突文・押引文（ＤＩｄ類）があり、全体の2割程度である。一方、地文のみのもの、地文＋口縁部・頸部に刻目が加わる程度のものが8割を占め、主体となっている。

②地文の種類は、比率が高い順に、縄文（ＤⅡａ類）、撚糸文（ＤⅡｂ類）、末端ループ文（ＤⅡｃ類）、組紐回転文（ＤⅡｄ類）となっており、縄文が全体の6割以上を占める。このうち縄文は、結束羽状縄文が6割を占め主体となっており、斜行縄文がこれに続く。縦走縄文、非結束羽状縄文は少数である。

《底部の器形と文様》

①底部は、平底（5点）と揚底風平底（2点）がある。

②底部から胴部への立ち上がり方は、外に開くように立ち上がるもの（6 点）と直立するもの（1点）がある。

③胴下部に刺突文が施されるものもある（1点）。

④底面の文様は、地文と同じ文様の結束羽状縄文が施されるもの（2 点）と揚底状平底の底面をヘラで円形に削ったもの（1点）がある。

(2) 共伴関係

D群土器の大半はＢ区遺物包含層からまとまって出土したもので、他に土壙や焼け面な

D群土器　胎土に植物繊維を多量に含む深鉢型土器

Ⅰ類　口縁部に装飾的な文様が施されるもの

ａ　撚糸押圧文が施されるもの

ｂ　竹管文が施されるもの

①　半截竹管による沈線文

1　波状沈線文

2　山形沈線文

3　格子状沈線文

4　刻目状短沈線文

5　櫛歯状沈線文

②　半截竹管による同心円状押引文

③　円形竹管による刺突文

ｃ　竹管撚糸文が施されるもの

ｄ　棒状工具による沈線文、刺突文、押引文が施されるもの

①　平行沈線文

②　刺突文・押引文

③　平行沈線文・刺突文

Ⅱ類　地文のみのもの

ａ　縄文が施されるもの

①　縦走縄文

・　口縁部に刻目

・　口唇部に縄文原体押圧

②　斜行縄文

・　口縁部に刻目

③　結束羽状縄文

・　口縁部、頸部に刻目

・　口縁部に刺突

・　口縁部に指の押圧

④　非結束羽状縄文

ｂ　撚糸文が施されるもの

①　縦走撚糸文

・　口縁部に刻目

・　口唇部に撚糸押圧文

②　斜行撚糸文

・　口縁部に刻目

③　網目状撚糸文

・　口縁部に刻目

④　木目状撚糸文

・　口縁部、頸部に刻目

ｃ　末端ループ文が施されるもの

ｄ　組紐回転文が施されるもの

D群土器底部　ａ　平底のもの

ｂ　揚底風平底のもの

第４表　D群土器分類

	Ⅰ類　口縁部に装飾的な文様が施されるもの												Ⅱ類　地文のみのもの																														計
	Ⅰa類　燃糸押圧文				Ⅰb類　竹管文							Ⅰc類 竹管 燃糸文	Ⅱa類　縄　文															Ⅱb類　燃糸文												Ⅱc類			Ⅱd類	
					半截竹管による波線文						同心円状 押引文	円形竹管 刺突文	区別つかず			縦走縄文			斜行縄文			結束羽状			非結束羽状			縦走燃糸文			斜行燃糸文			網目状燃糸文			木目状燃糸文			末端ループ文			組　紐	
	山形状	木目状	横　位	弧　状	波　状	山形状	格子状	刺目状	楕円状				i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	回転文	
A　包																	4			2		1						1	3			1								1				13
B包1層	2		5		2	2	12	1	1	2	1	4	5	6			3		10	9		29	18	3	1				4	1	2	2			2					7				134
B包2a層		1	11		7		8			1	1	4	4	10	1		5	1	7	6		26	17						4	1	1	3	1		1			1		2	1			125
B包2b層			1		1			2		1			1	1					1			5	3																						16
B包3層					2									1	1				1	1																									6
B包不明			3	1			3						3	5						3		14	13		1																		1	49
計	2	1	20	1	12	2	23	3	1	4	2		13	23	2		12	1	19	21		75	51	3	2			1	11	2	4	7	1		3			1		10	1			
	24				47							8	38			13			40			128			2			14			12			3			1			11			1	343
													222															25																

＊1　A包－A区遺物包含層
＊2　B包－B区遺物包含層
＊3　区別つかず－小破片のため羽状縄文か斜行縄文か区別がつかないもの
＊4　i－地文のみ　ii－地文＋口縁部、鎖部に刺目　iii－口縁部に原体押圧文

第５表　土器組成

どの遺構、表土から出土している。これらは、口縁部に装飾的な文様をもち、地文は結束羽状縄文が主体となっているものである。Ｂ区遺物包含層は４層に分層できたが、末端ループ文（ＤⅡｃ類）が１層から多く出土するという傾向が見られたものの内容に違いはみられなかった。

（3）Ｄ群土器の編年的位置

Ｄ群土器は、口縁部に装飾的に文様をもつもの（ＤⅠ類）と、地文のみのもの（ＤⅡ類）がある。ＤⅠ類の文様には、撚糸押圧文、竹管文、竹管撚糸文、棒状工具による沈線文、押引文、刺突文があり、ＤⅡ類は縄文、なかでも結束羽状縄文が主体となる。このような特徴をもつ土器は、柴田町上川名貝塚上層出土土器（加藤：1951）に代表してみられるものであり、縄文時代前期初頭の上川名Ⅱ式に比定できる。

その他、県内で類例が報告された遺跡には、塩釜市桂島貝塚（林：1960）、鳴瀬町金山貝塚（鳴瀬町教育委員会：1977）、七ヶ浜町左道貝塚（白鳥：1979）、名取市宇賀崎貝塚Ⅱ群土器（阿部：1980）、七ヶ宿町原頭遺跡Ⅱ群土器（村田：1986）、同町小梁川遺跡（真山：1987）、川崎町前田遺跡（相原：1987）などがある。また、地理的に近い福島県でも、松ヶ平Ａ遺跡Ⅱ群土器（鈴鹿：1984）、羽白Ｄ遺跡（鈴鹿：1988）で類例が報告されている。

◎Ｅ群土器（第 27 図～第 28 図）

縄文時代前期中葉～中期初頭の土器を一括したものである。

縄文施文後、縦走の山形平行沈線文が施されているものは、宇賀崎貝塚（阿部：1980）、七ヶ浜町大木囲貝塚（八巻：1979）などに類例が見られ、縄文時代前期大木３式に比定できる。

縄文施文後、山形状の粘土貼り付け文が施されているものは、七ヶ浜町大木囲貝塚（八巻：1979）、追町糖塚貝塚（興野：1981）などに類例が見られ、縄文時代前期大木５ａ式に比定できる。

縄文施文後、横位の山形沈線文が施されているものは、七ヶ浜町大木囲貝塚（八巻：1979）、追町糖塚貝塚（興野：1981）、原頭遺跡Ⅳ群土器（村田：1986）などに類例が見られ、縄文時代前期大木５ｂ式に比定できる。

沈線間の刻目充塡、三角形の彫去、刻目をもつ渦巻き状の粘土貼り付け文、縦走結節回転文をもつ土器は、七ヶ浜町大木囲貝塚（八巻：1979）、追町糖塚貝塚（興野：1981）、小梁川遺跡Ⅱ群土器（真山：1987）などに類例が見られ、縄文時代中期大木 ７ａ式に比定できる。

底部資料に関しては、縦走結節回転文が施されているものは、縄文時代中期大木 ７ａ式に比定できる。しかし、その他の資料に関しては不明である。

Ｂ．石器について

本遺跡から出土した土器は、縄文時代早期から古代に至る長期にわたっているが、その土器のほとんどは縄文時代早期末から前期初頭に位置付けられる。石器についてもほぼまとまった特徴を有する一群として把握することが可能であり、以下では石器の所属時期を縄文時代早期末から前期初頭として考察を加える。

①石器組成と石材

本遺跡出土の石器には、石鏃、石錐、石匙、尖頭器、箆状石器、石斧などの定形石器や、両極剥離痕ある石器、不定形石器、石核、剥片類と、石製品である玦状耳飾りがある。礫石器類は出土していない。その内訳を第 3 表に示した。不定形石器が最も多く、石匙、石鏃、両極剥離痕ある石器が続いている。そしてこれらだけで全体の 85%以上を占めている。組成の特徴として石匙の多さがまず第一に指摘できよう。

石材は、いわゆる tool 類では珪質頁岩が主体を占め、碧玉や玉髄、珪化凝灰岩、石英、黒曜石がわずかに用いられているのみである。しかし剥片類では珪質頁岩の占める割合は低くなり、そのほかの石材が多くなる。

②石鏃

多くは両側辺が直線的であり、基部の形態によって、Ⅰ類…窪むもの（凹基）とⅡ類…平坦なもの（平基）に大別できる。Ⅰ類は浅く窪むものから深く窪み鋭い逆刺がつくものまで認められるが、それらの変異は連続的であり、明確な境界線が引けない。ここでは窪みの深さの 4mmを区分線として、4mmよりも深いもの（ａ類）と浅いもの（ｂ類）に細分する。Ⅰａ類 4 点、Ⅰｂ類 13 点、Ⅱ類 3 点、不明 3 点である。

③石錐

わずか 4 点の出土である。Ⅰ類…細長い錐部が一端にあり、つまみ部がつくものと、Ⅱ類…短い錐部が両端にあり、中程がふくらむものに分けられる。点数はそれぞれ 3 点、1 点である。

④石匙

ほとんどが縦長の形態を呈する。それらのなかでもⅠ類…細長いものとⅡ類…幅広で一側辺に角を持つものに大別できる。Ⅰ類はさらに a…先端の尖るもの、ｂ…先端に長軸に直行する縁辺のあるもの、ｃ…両側辺が外弯し先端が丸みを持つものに細別でき、Ⅱ類もａ…素材の背面側の全面に二次加工がおよぶもの、ｂ…背腹両面の周辺に二次加工の施されるものに細別できる。それぞれの点数はⅠａ類…5 点、Ⅰｂ類…4 点、Ⅰｃ類…3 点、Ⅱａ類…3 点、Ⅱｂ類…5 点、その他不明…4 点である。Ⅰａ類、Ⅰｂ類、Ⅱａ類は 1 点を除いてすべて、つまみ部を上にして加工面を表にした場合に、左側辺が外彎し、右側辺

が直線的になる。そして二次加工も、右側辺の加工が左側辺のそれを切っている。これは右側辺の加工が刃部再生の繰り返しによって徐々に左側辺に近づいてゆき、究極には第30図10のように内彎してしまうことを示すものと思われる。右側辺の刃角が、Ⅱａ類ではそれ程急角度ではないのに対して、Ⅰａ類、Ⅰｂ類では急角度である点も刃部再生の繰り返しを示している。つまり、刃部再生による形態変化をⅡａ類→Ⅰｂ類→Ⅰａ類のように跡付けることが可能である（梶原：1982、小川：1986）。また左側辺の腹面側（腹面側の右側辺）に急角度の二次加工を施し、これを打面として背面側に二次加工がなされるものがⅠａ類…4点、Ⅰｂ類…2点認められる。腹面側の急角度の加工は背面側の剥離がより奥に届くための打面形成の意味をもつと考えられる。Ⅱａ類にはこの加工は認められず、右側辺の刃部再生とこの加工のと間になんらかの関連性があると思われるが、具体的な関係については不明である。

⑤その他の石器

両極剥離痕ある石器は両極打法によったと思われる剥離面が認められる石器で 18 点と数多く出土している。両極剥離の施された対向する縁辺の状況は線状－線状で、平面形が方形を呈する。

不定形石器は28点あり、最も多く出土しているが、平面形態、刃部形態、二次加工状態などにまとまりは認められず、不定形石器をいくつかの有為なまとまりの集合体として捕えることはできなかった。

不定形石器と分類したなかでも、ＳＸ－9付近出土の第11図12は、石刃を素材とした旧石器時代のナイフ形石器に非常に類似した特徴を有する。先端部は後世に折損しているが、基部加工は急角度である。素材の背面には縦長の剥片を連続的に剥離した痕跡が認められ、打面調整も非常に細かである。石材やパティナの面では他の石器類と区別することはできないものの、ナイフ形石器である可能性を指摘しておきたい。

⑥石器群の特徴と年代

本石器群を特徴づける石器として、両側辺の平行する凹基の石鏃、精緻な片面加工の施された縦長の石匙などがあげられる。このような特徴を持つ石器群は、名取市今熊野遺跡（小川・村田：1986）、仙台市三神峯遺跡（佐藤：1980）、宇賀崎貝塚（阿部：1980）、七ヶ宿町大倉遺跡（笠原：1985）、川崎町前田遺跡、同西林山遺跡（相原：1987）などの、本遺跡と同じ縄文時代前期初頭に位置付けられる遺跡に認められる。

(2) 弥生時代

弥生土器の特徴と編年的位置づけ（第 29 図）

器壁が薄く、菱形状沈線文、磨消縄文が施されているものは、角田市鱸沼遺跡（太田：1988)、福島県今和泉遺跡・鳥内遺跡（長島他：1988）に類例が見られ、桝形囲式に比定できる。

器壁が薄く、鋭利な平行施文具による沈線文が施されているものは、名取市十三塚遺跡（太田：1988）に類例が見られ、十三塚式に比定できる。

(3) 平安時代

土師器の特徴と編年的位置づけ

同一個体と思われるロクロを使用した土師器の胴部資料である。平安時代表杉ノ入式に比定できる。

2．遺構について

(1) 土壙

土壙はA区で 2 基、B区で 18 基発見されている。A区で発見された第 19・20 号土壙は、長楕円形の平面形態をもつもので、落とし穴とされているものである。出土遺物はなく、遺構の年代は不明である。

Ｂ区で発見された土壙で年代がある程度わかるものは、Ｂ区遺物包含層を堀込んだ第 10・13・16 号土壙である。第 10・13 号土壙は出土遺物はないが、それぞれB区遺物包含層 2ａ層上面から堀込んでおり、縄文時代前期初頭上川名Ⅱ式期のものといえる。第 16 号土壙はＢ区遺物包含層 1 層上面から堀込んでおり、上川名Ⅱ式期以降のものといえる。

他の土壙は、地山面を堀込んだものであり、具体的な年代は不明だが、土壙内の堆積層から土器が出土したものに関しては、土器がD群土器であることから、縄文時代前期初頭上川名Ⅱ式期のものと考えて良いものと思われる。また、第 3・4 号土壙は、後述する上川名Ⅱ式期のものと考えられる第 14 号焼け面より新しいが、土壙内堆積層から出土した土器がD群土器であることから、時期差はあるが前期初頭上川名Ⅱ式期のものであると考えられる。出土遺物のない土壙の年代は不明である。

(2) 焼け面

焼け面は、A区で 13 か所、B区で 7 か所の合計 20 か所発見されている。これらは直接地面で火を焚き、地表面が硬化、赤色化したものである。焼け面は、A区では南側緩斜面に環状に分布しており、B区では北側緩斜面に点在している。平面形は円形、楕円形、不整

形とさまざまで、規模は一定していない。形態的には掘込みをもっていないが、焼け面が、緩斜面に堆積した層上や、倒木痕上、第 18 号焼け面のように土壙の自然堆積層上で発見されており、地形的にわずかに窪んだところで火が使われたようである。焼け具合は、地面が赤色化した程度のものが多く、硬化しているものは少ない。

焼け面の形成年代がわかるものは、第 16・17 号焼け面である。これらはＢ区遺物包含層 2A 層上面に形成されていることから、縄文時代前期初頭上川名Ⅱ式期のものといえる。その他の焼け面については具体的な年代は不明だが、Ａ区で発見された焼け面は周辺からはＣ群土器が出土していることから、縄文時代早期末か縄文時代前期初頭上川名Ⅱ式のなかでも古い段階に形成された焼け面である可能性が高い。また、Ｂ区で発見された焼け面は周辺からはＤ群土器が出土していることから、縄文時代前期初頭上川名Ⅱ式期に形成された可能性が高い。

焼け面がまとまって発見された遺跡は少ないが、福島県松ヶ平Ａ遺跡（鈴鹿：1984）で 38 か所、福島県羽白Ｃ遺跡（三品：1988）で 25 か所の焼け面がまとまって発見されており、住居に付随する屋外炉の性格をもつものであると考えられている。本遺跡では住居は発見されていないが、同様の性格のものと考えておきたい。

（3）遺物包含層

遺物包含層は、丘陵上部のＡ区遺物包含層と丘陵端部のＢ区遺物包含層の 2 か所発見されている。前述したように、Ａ区遺物包含層はＣ群土器が主体を占め．Ｂ区遺物包含層はＤ群土器が主体を占めていることから、Ａ区遺物包含層は縄文時代早期もしくは、縄文時代前期初頭上川名Ⅱ式期の古い段階に、Ｂ区遺物包含層は前期初頭上川名Ⅱ式期に形成されたものといえる。また、Ａ区遺物包含層は層が一層であり、遺物も少量なことから比較的短期間に形成されたものと思われる。一方、Ｂ区遺物包含層は、2ａ層上面から掘込んだ土壙や、2ａ層上面に焼け面が形成されていることから、包含層形成途中一時的に生活面となっていたことがわかり、包含層はある程度の期間にわたって形成されたものと思われる。

また、上述のことから、生活の中心が縄文時代早期末～縄文時代前期初頭は丘陵上部のＡ区付近であったものが、縄文時代前期初頭上川名Ⅱ式期には、丘陵端部のＢ区付近に移ったと考えられ、その期間もＡ区付近の生活は比較的短期間で、Ｂ区付近の生活は比較的長期間であったと思われる。

第四章　ま　と　め

1. 下南山遺跡は、宇田川右岸の丘陵の傾斜が緩いところに位置している。
2. 調査の結果、土壙20基、焼け面20か所、遺物包含層2か所が発見され、縄文時代早期末～前期初頭上川名Ⅱ式期でも古い時期は、丘陵上部のＡ区付近が生活の場となり、前期初頭上川名Ⅱ式期には丘陵端部のＢ区付近に生活の場が移っていったことがわかった。
3. 遺構の時期は、出土遺物から、Ａ区で発見された遺構は縄文時代早期末～前期初頭上川名Ⅱ式期でも古い段階のもの、Ｂ区で発見された遺構は縄文時代前期初頭上川名Ⅱ式期のものと考えられる。
4. 出土遺物には、土器、石器がある。土器は縄文時代早期中葉、末葉～中期前葉、弥生時代、平安時代のものであるが、縄文時代前期初頭上川名Ⅱ式期の土器が主体となっている。石器も土器と共伴していることから縄文時代前期初頭上川名Ⅱ式期のものと考えられる。
5. 今回発見された土器や遺構は、仙台湾～福島県北部にかけて類例が見られ、当時の生活や文化圏を知る上で重要な遺跡と言える。

引用・参考文献

相原淳一（1987）:「前田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』121 集

相原淳一（1987）:「西林山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』121 集

相原淳一（1990）:「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年ー仙台湾周辺の分層発掘資料を中心にー」『考古学雑誌』76-1

阿部　恵（1980）:「宇賀崎貝塚」『宮城県文化財調査報告書』67 集

太田昭夫（1988）:「宮城県における弥生式土器編年研究の現状と課題」『東北地方の弥生式土器の編年についてー縄文文化検討会シンポジウムー』

小川出・村田晃一（1986）:「今熊野遺跡Ⅱ縄文・弥生時代編」『宮城県文化財調査報告書』第 114 集

笠原信男（1985）:「大倉遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 107 集

梶原　洋(1982):「石匙の使用痕研究　仙台市三神峯遺跡出土資料を使って」『考古学雑誌』68-2

加藤　孝（1951）:「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』1

川村　正（1991）:「左道遺跡」『七ヶ浜町文化財調査報告書』第 7 集

興野義一（1970）:「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」『古代文化』22-4

興野義一（1981）:「糖塚遺跡について」『追町史』

佐藤則之（1980）:「三神峯遺跡」『仙台市文化財調査報告書』25 集

白鳥良一（1978）:「宮城県七ヶ浜町左道貝塚の縄文前期土器について」『宮城史学』6　宮城教育大学歴史研究会

鈴鹿良一（1984）:「真野ダム関連遺跡発掘調査報告　松ヶ平Ａ遺跡（第 1 次）」『福島県文化財調査報告書』第 118 集

鈴鹿良一（1988）:「真野ダム関連遺跡発掘調査報告　松ヶ平Ｂ遺跡」『福島県文化財調査報告書』第 193 集

鈴鹿良一（1988）:「真野ダム関連遺跡発掘調査報告　岩下Ａ遺跡（第 2 次）」『福島県文化財調査報告書』第 193 集

鈴鹿良一（1988）:「真野ダム関連遺跡発掘調査報告　羽白Ｄ遺跡（第 2 次）」『福島県文化財調査報告書』第 193 集

鈴鹿良一（1988）:「真野ダム関連遺跡発掘調査報告　宮内Ｂ遺跡（第 1 次）」『福島県文化財調査報告書』第 193 集

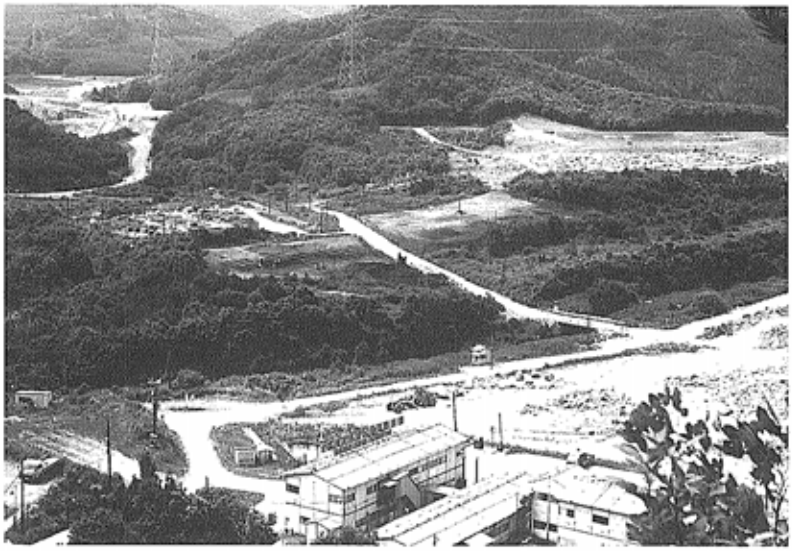
鈴鹿良一（1988）:「真野ダム関連遺跡発掘調査報告　羽白Ｃ遺跡（第 1 次）」『福島県文化

財調査報告書』第 194 集
鈴鹿良一（1989）:「真野ダム関連遺跡発掘調査報告　羽白Ｃ遺跡（第 2 次）」『福島県文化財調査報告書』第 210 集
鈴鹿良一（1989）:「真野ダム関連遺跡発掘調査報告　宮内Ａ（第 1 次）、宮内Ｂ（第 2 次）」『福島県文化財調査報告書』第 210 集
長島雄一他（1988）:「福島県における弥生式土器編年研究の現状と課題」『東北地方の弥生式土器の編年について－縄文文化検討会シンポジウム－』
林　謙作（1960）:「宮城県桂島貝塚出土の前期縄文式土器群」『考古学雑誌』46-3
林　謙作（1962）:「山形県野山遺跡の土器」『考古学雑誌』46-4
林　謙作（1965）:「縄文文化の発展と地域性－東北」『日本の考古学』河北書房新社
真山　悟（1987）:「小梁川遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 122 集
宮城県教育委員会（1993）:「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第 152 集
村田晃一(1986) :「原頭遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 117 集
八巻正文(1979) :「大木囲貝塚」『七ヶ浜町文化財調査報告書』第 4 集

写　真　図　版

調査区遠景
（北西から）

調査区遠景
（北東から）



B区土壙群
（西から）

写真図版（1）

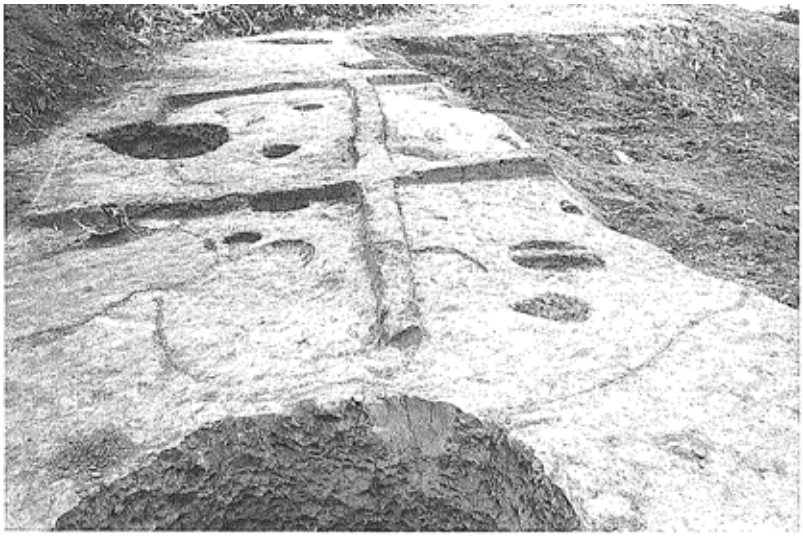
A区遺物包含層
（北東から）

B区遺物包含層調査風景
（北東から）

B区遺物包含層調査風景
（北東から）

写真図版（2）

第14号焼け面ダメ押し
（東から）



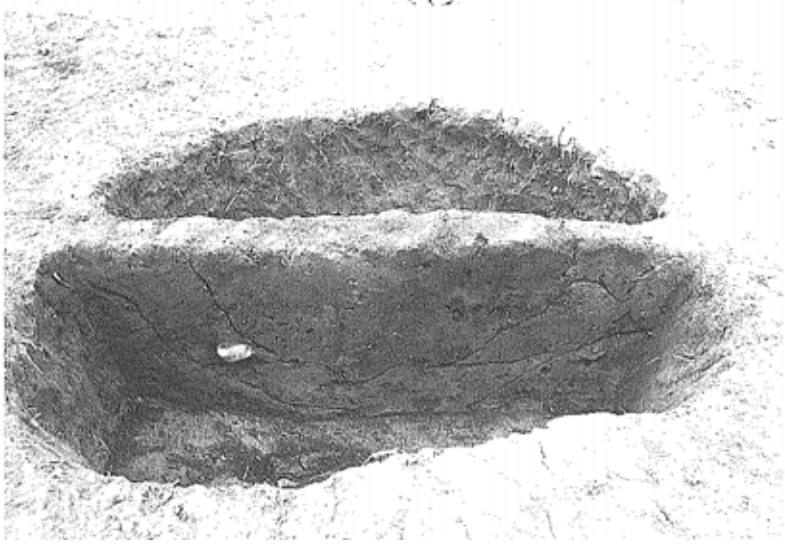
第１号土壙

第２号土壙

写真図版（３）

第４号土壙

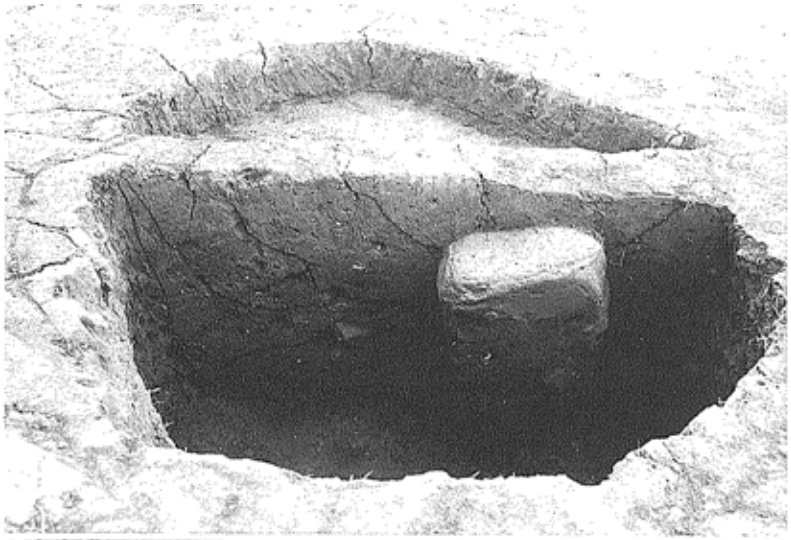
第６号土壙



第７号土壙

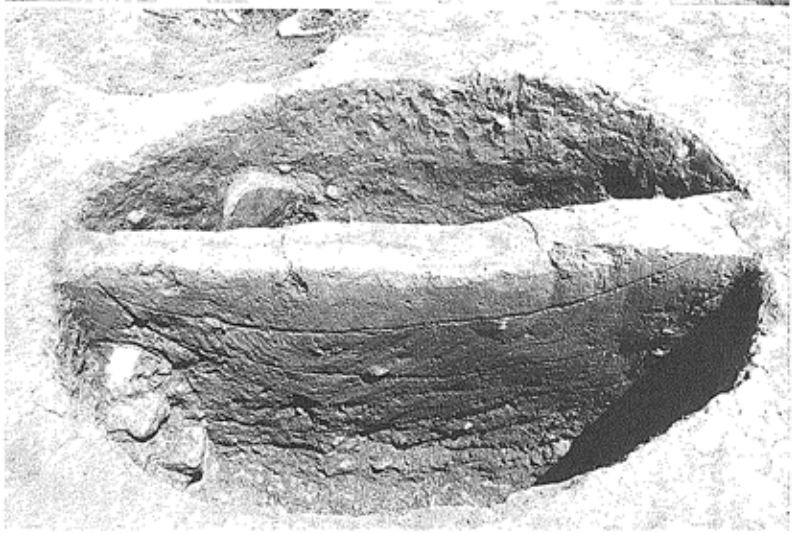
写真図版（４）

第８号土壙

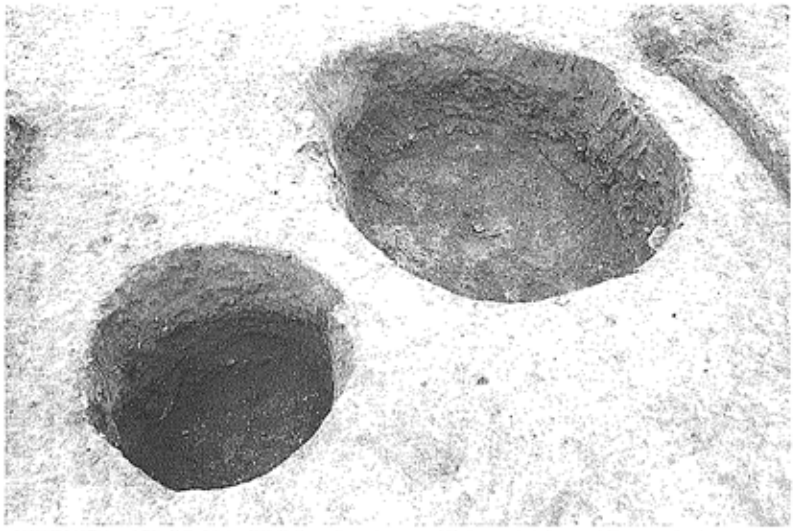


第14号土壙
第18号焼け面

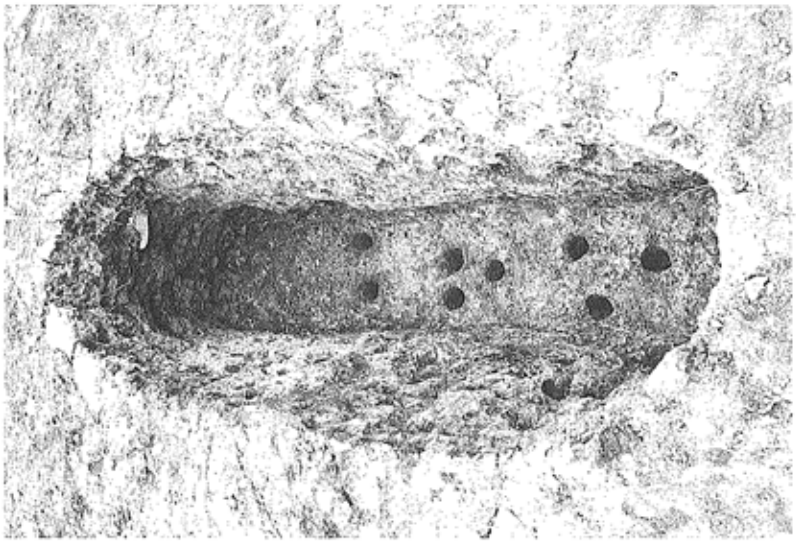
第16号土壙



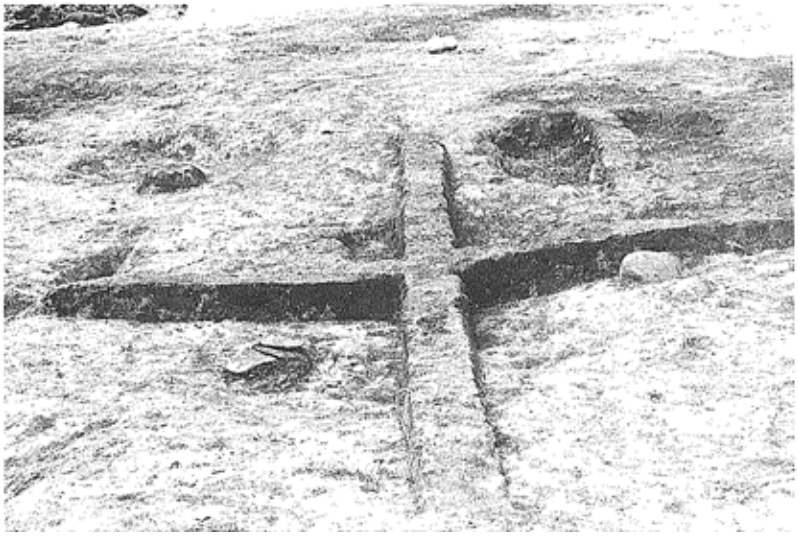
写真図版（５）



第17号土壙（右上）
第17号土壙（左下）

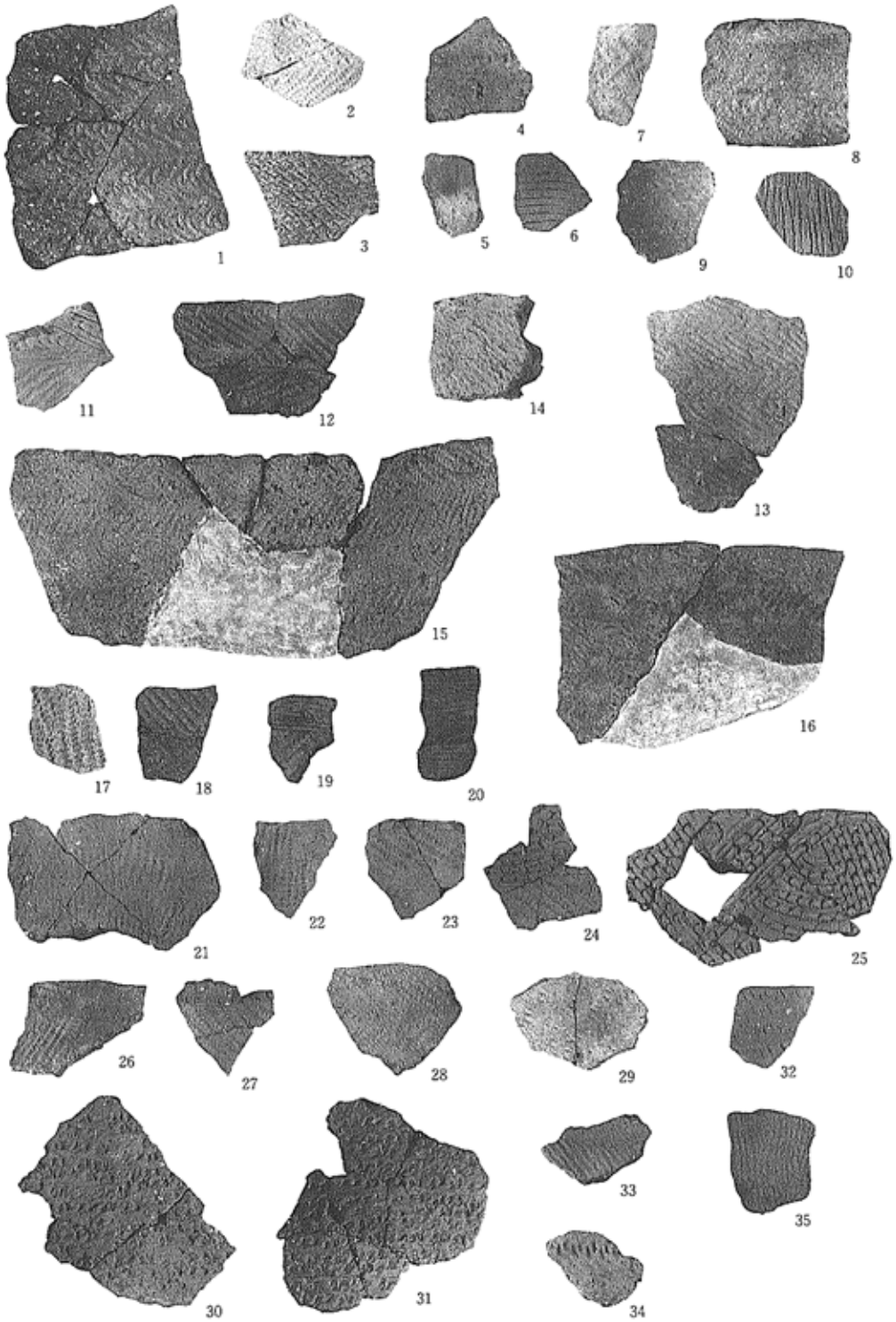


第20号土壙

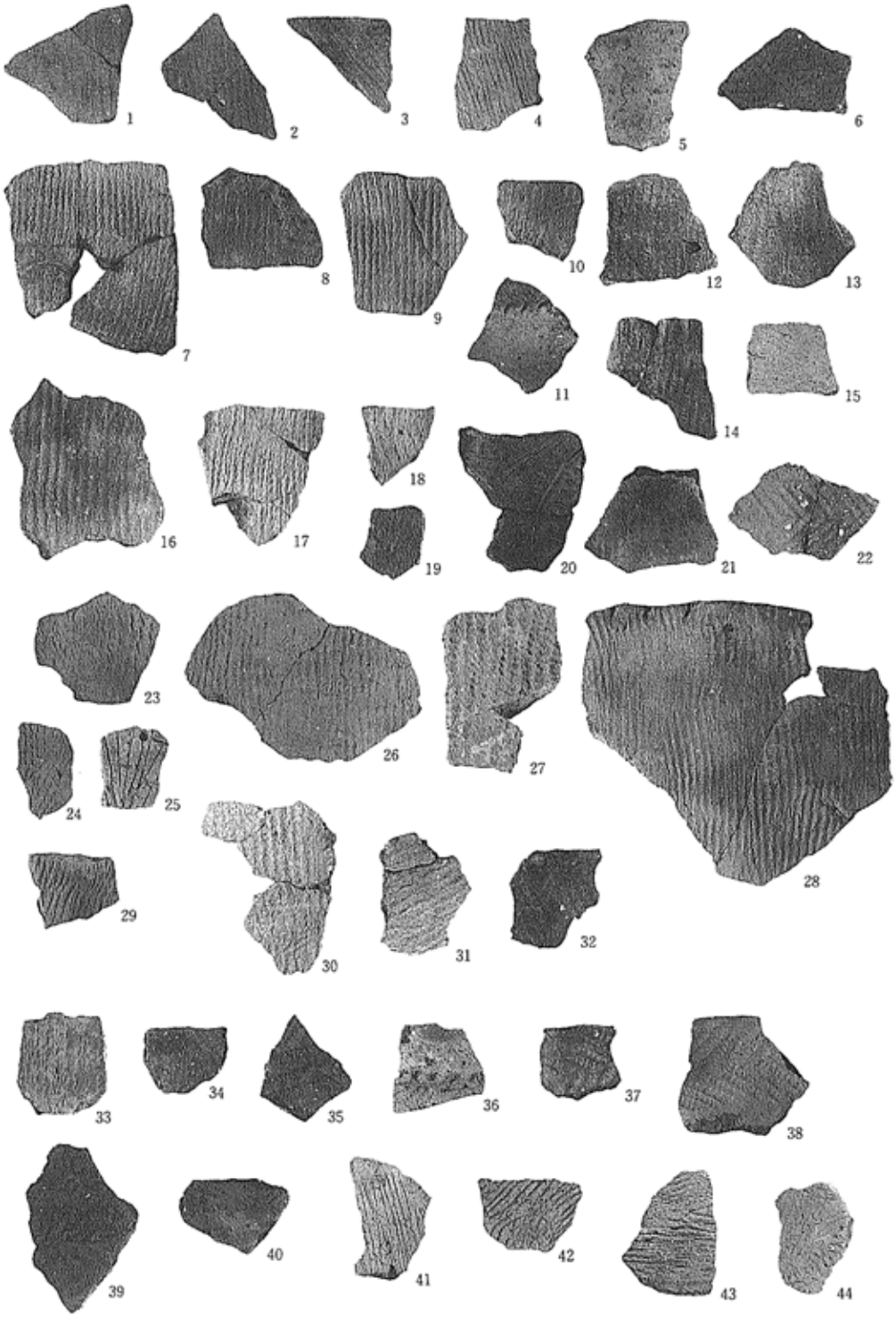


第９号焼け面

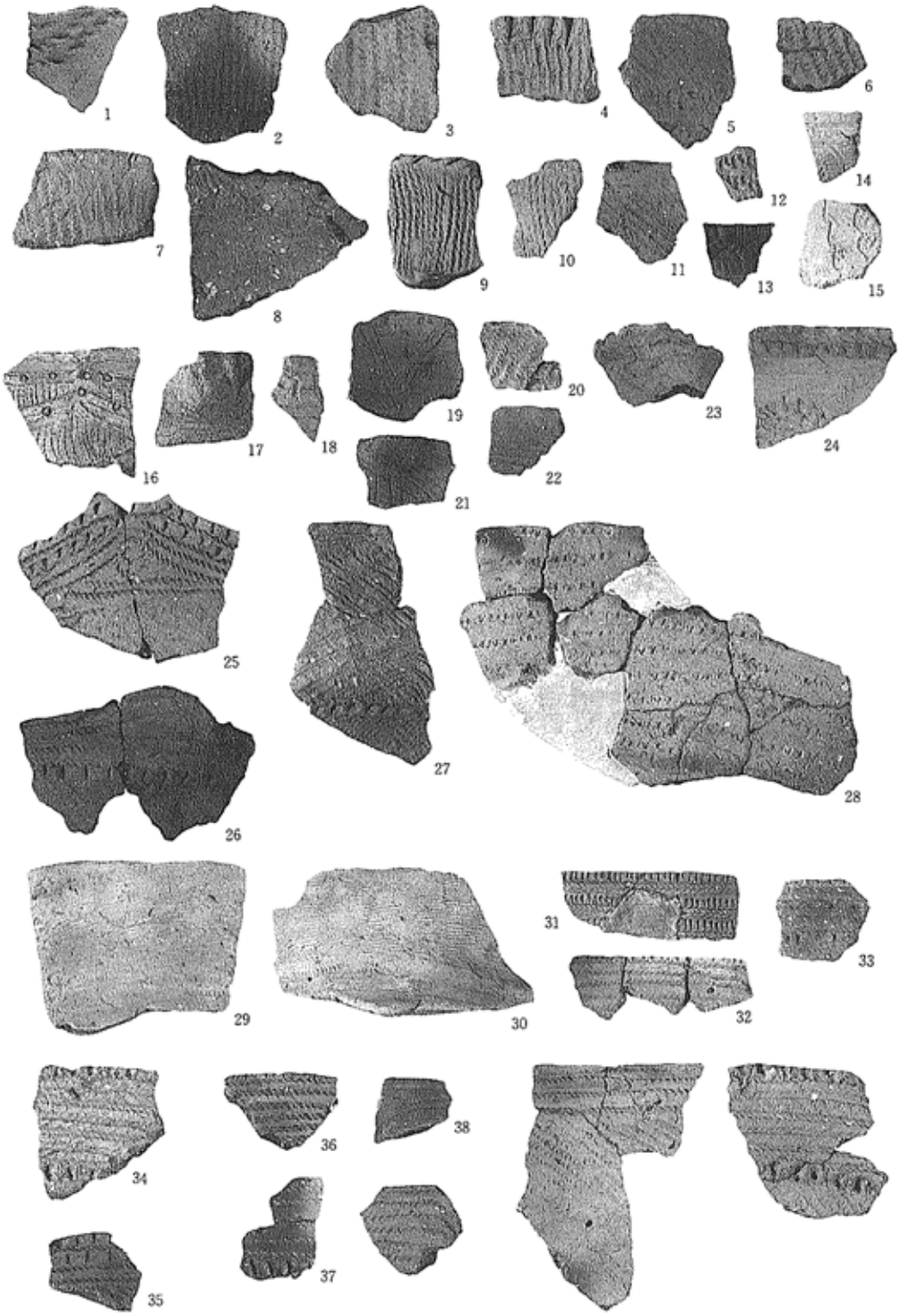
写真図版（６）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35

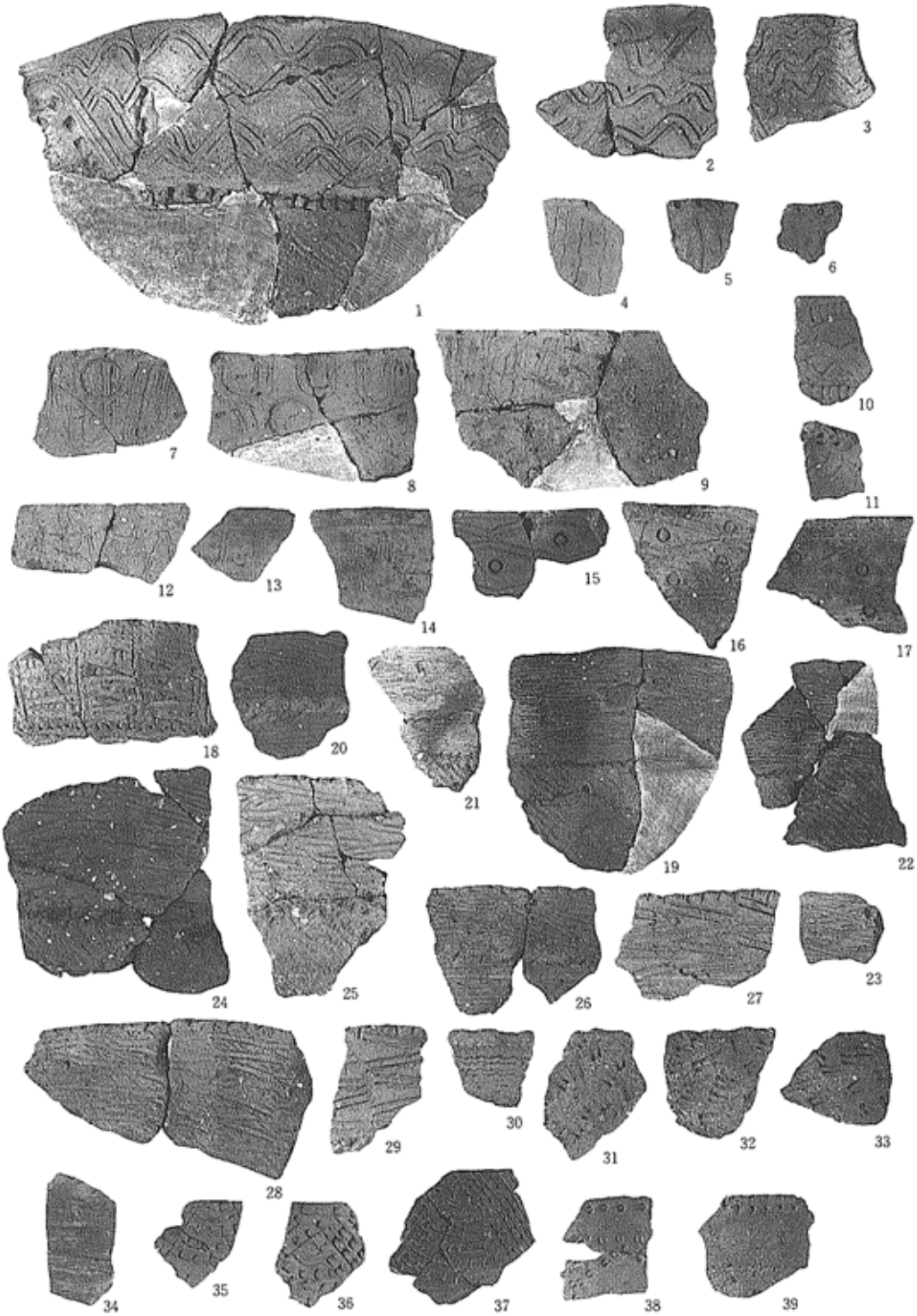
写真図版（7）　　出土土器（1）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

出土土器（2）　　写真図版（8）

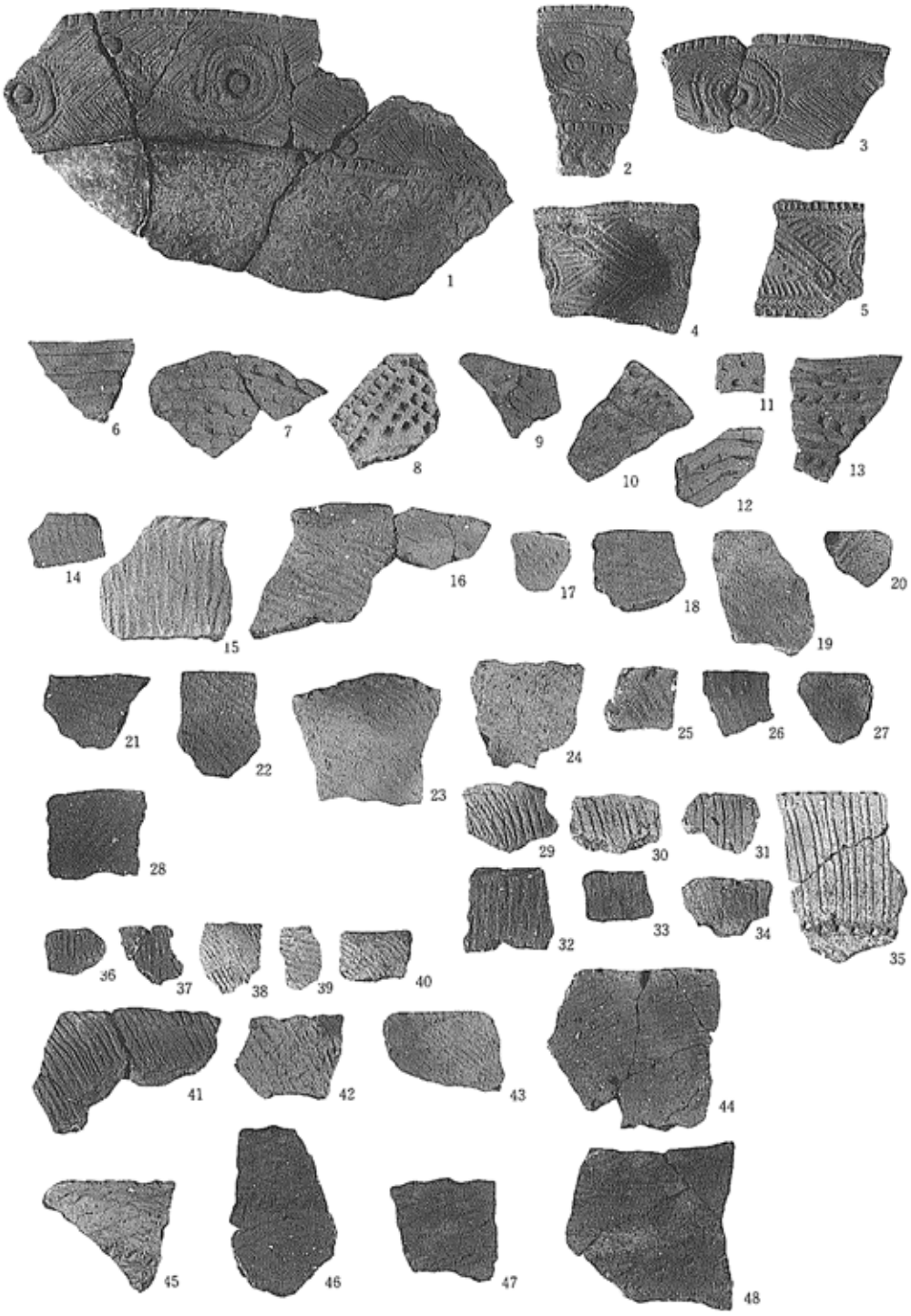

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

写真図版（9）　　出土土器（3）

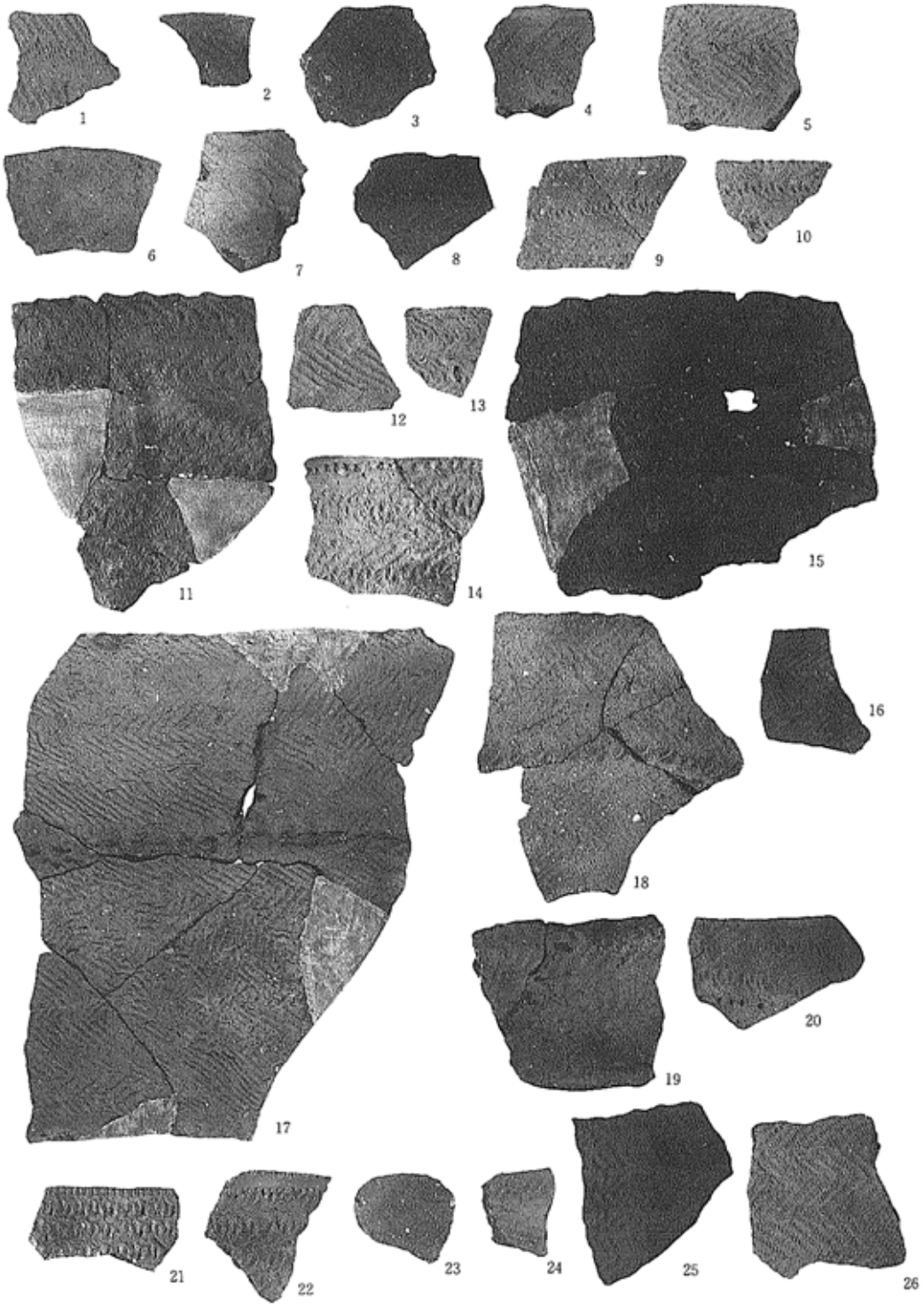


出土土器（4）

写真図版(10)

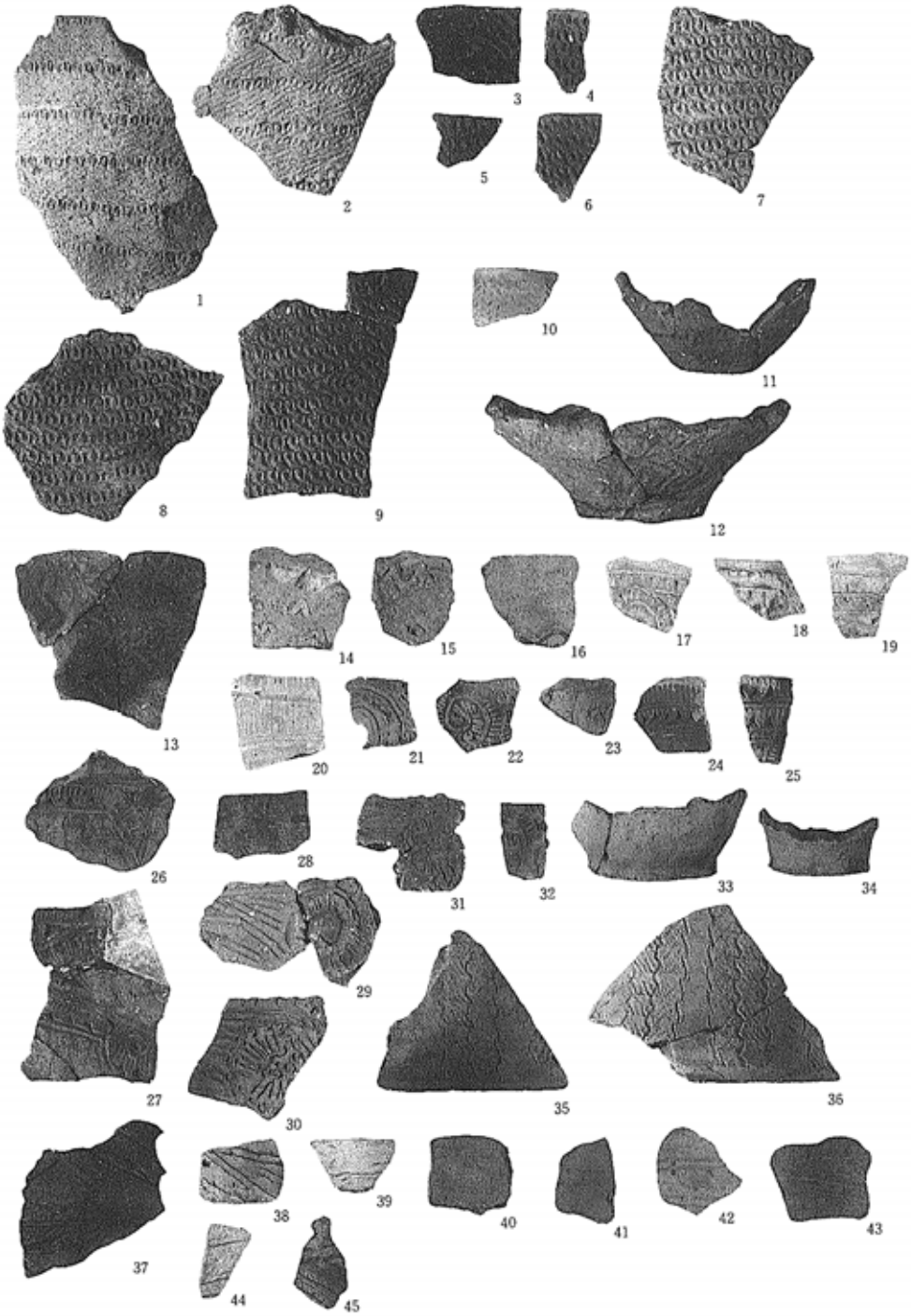


写真図版(11)　　出土土器（5）

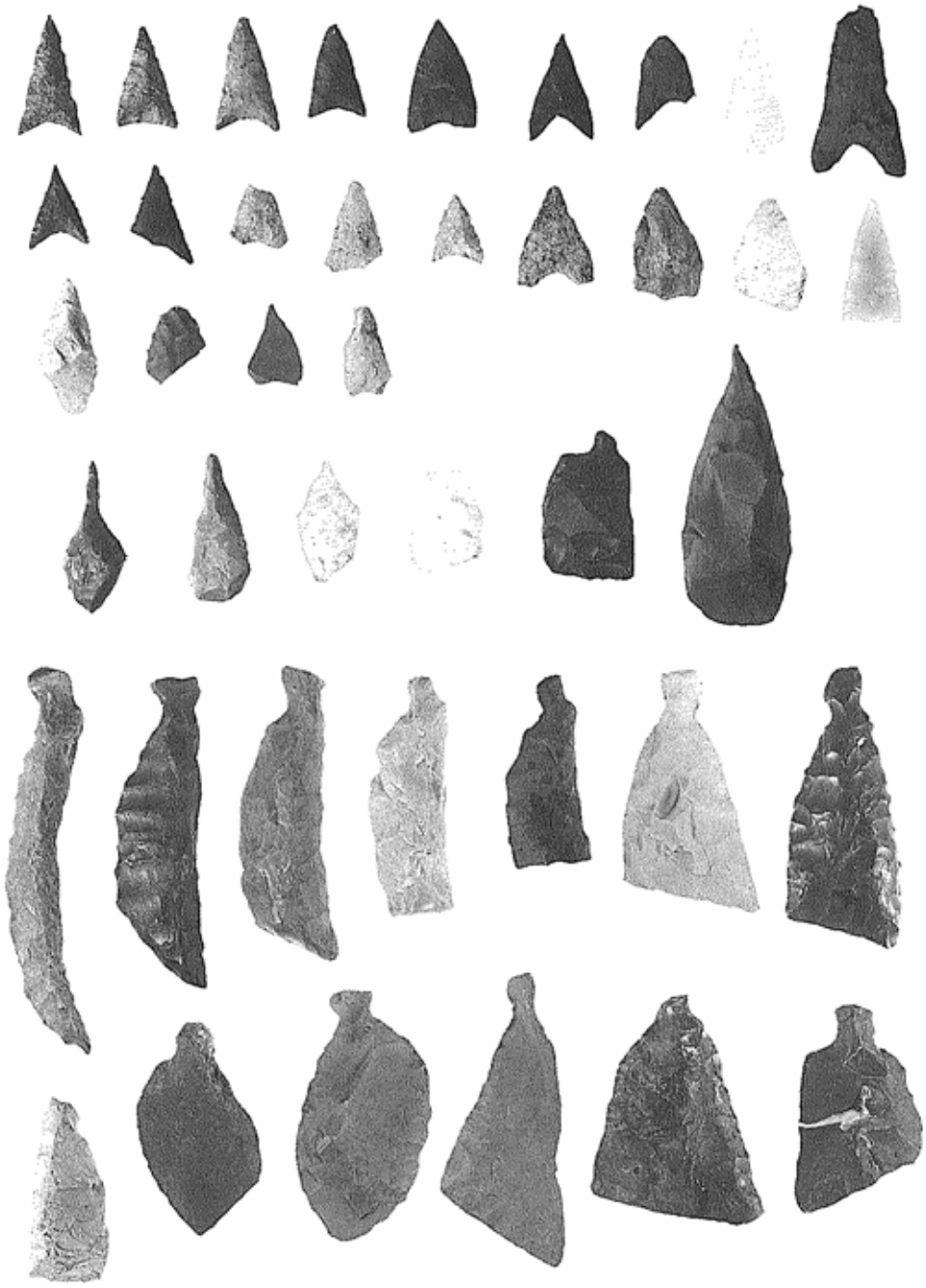


出土土器（6）

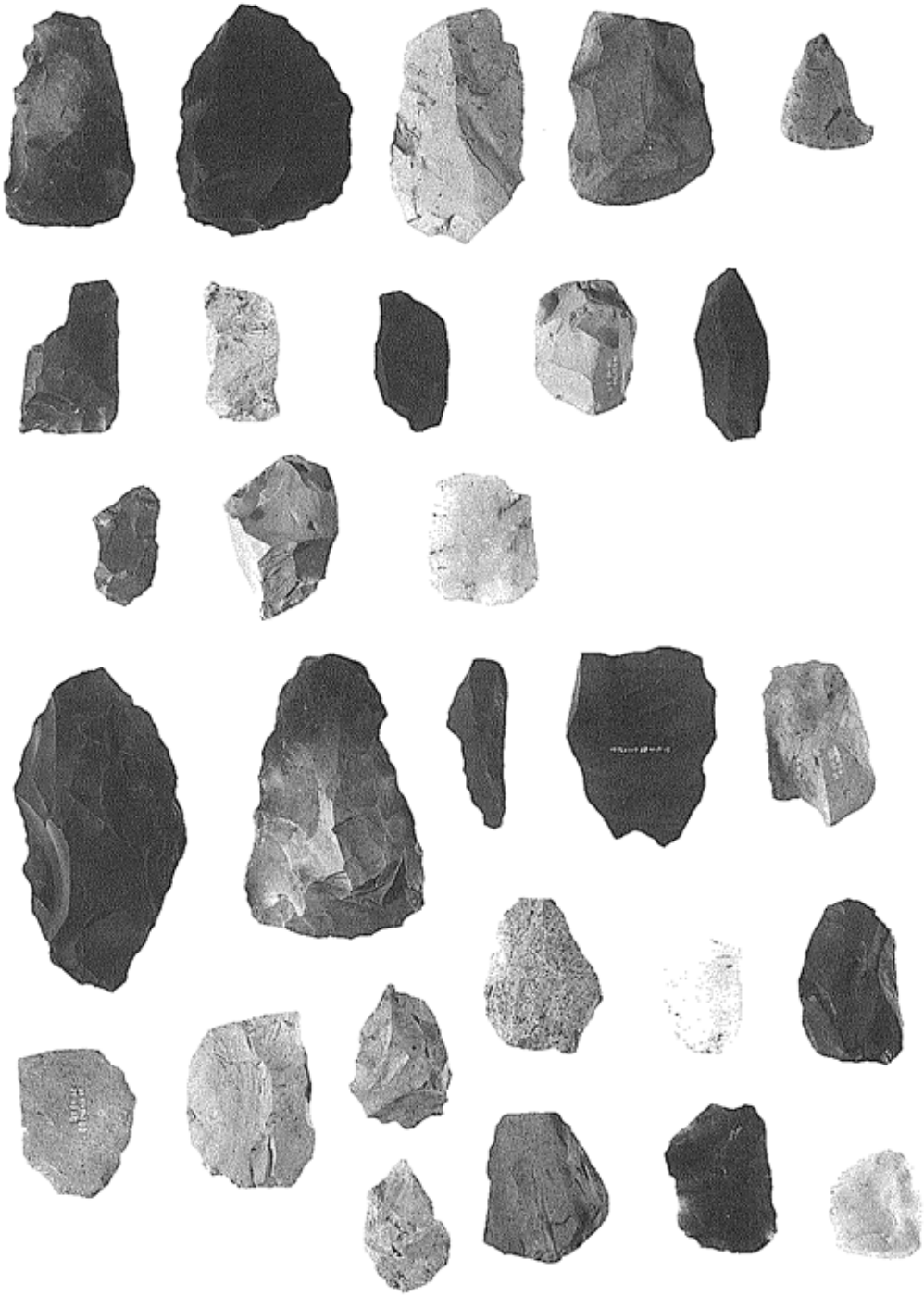
写真図版(12)



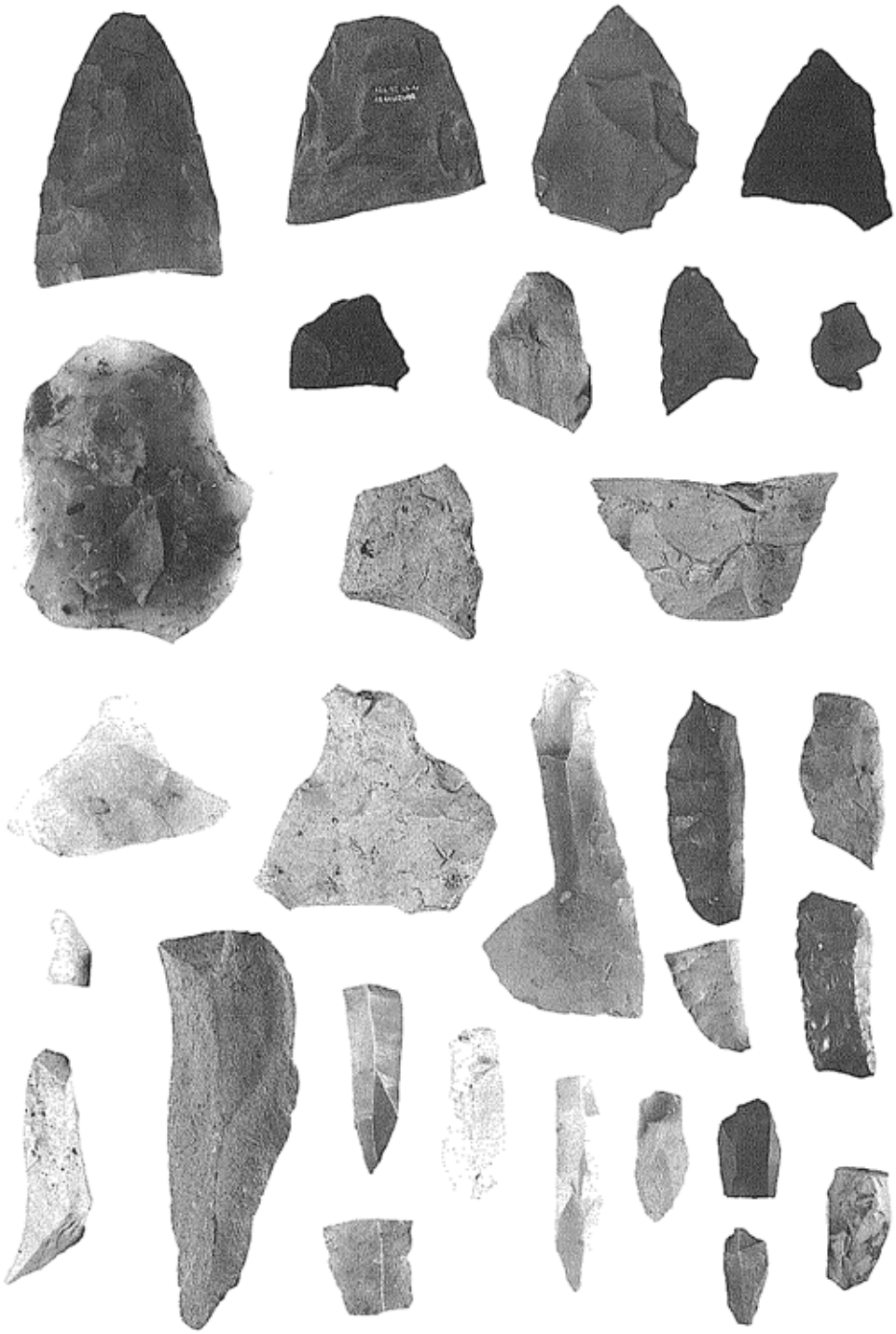
写真図版(13)　　出土土器（7）



写真図版14　出土石器（1）



写真図版15　出土石器（2）



写真図版16　出土石器（3）

写真図版17　出土石器（4）